
魔法少女まどか マギカ 勇者の物語

木国 多夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ 勇者の物語

【Nコード】

N3950V

【作者名】

木国 多夢

【あらすじ】

数年前に一度会ったきりの「彼」は僕にこう言ってからまもなく姿を消した。

「僕と契約して「魔法少女」になってよ！」

「君の願いはエントロピーを凌駕した。」

そうして僕は「魔法少女」になったのだった……。

男だってエントロピーを凌駕する願いがかなえられれば「魔法少

女」になっただっていいじゃないか！

そう思って書いてみた。

きっと自分の前にもいろんな人が書いてると思いますけど、そんな感じのストーリーですw

01、たいていの物語は出会いから始まる。(前書き)

オリジナル小説の方がまったく続けられなくなったので、しばらく二次創作を書いていこうと思います。

設定とか文章とかでもし変なところとかあればお知らせしてくれると嬉しく思います。

感想はいつでも書いてくれると嬉しいですw

あ、あと

この物語の主人公は男です。

純粹な「魔法少女」がいい人は戻ってかまいません。二次創作ですからねw

01、たいていの物語は出会いから始まる。

自分の身長ほどあろうかと言う大きな剣が薄黒い塊の集合を薙ぎ払い、魔獣の身体が真つ二つに切断されて崩れていく。

その消滅を待たず、先端に刃のついた鎖が僕の元へと飛んでくる。それを剣の腹の部分で受け流し、まるで太刀での返し切りと同じそれを大きな剣でいともたやすく行い、鎖を空中で断ち切る。

それを何度か繰り返しているうちに地面に降り立ち、魔獣どもを見上げる形になったが、「魔法少女」は剣を絶えず振り続ける。

「これだけ多いとさすがにやばいかも……」

剣を腰の位置で持ち直して身体を大きくひねり、勢いをつけて一閃。振り終わった後からかまいたちが周りの鎖を薙ぎ払い、さらにその風圧に魔獣の巨体がなびいた。

一瞬の隙に自分の腰の位置にあるソウルジェムを見てみると、それは元の輝きを失い、ほとんど真つ黒に染まっていた。それにはさすがに自分の長い「魔法少女」人生も終わりかと思ってしまうた。

「グリーンシールドはもうないよな。ならいつそ特攻でもして終わった方が……」

その時だった。

「その必要はないわ。」

ふと目の前に天使のような白い翼を持った少女が現れ、その弓を持って魔獣の急所を的確に、しかし素早く貫いていく。

僕はただただその人の為す作業を見ている事しかできなかった。

「捕まりなさい。一旦退却するわよ。」

天使に手を差しのべられて拒否する者はいないだろう。僕も例外でなく、迷わず彼女の手を取った。

すると次の瞬間、世界が動きを止めた。

「これはいったい……？」

「時間停止よ。手を放したら解除されるわ。分かったならそのままでいることね。」

彼女は無感情にそう言うと、魔獣の群れの中をその白い翼を持って飛行し始めた。

「どこにいくんだ？」

「私の家よ。そこなら安全だわ。」

彼女は部屋に着くとすぐに変身を解いてお風呂に行ってしまった。

「あなたも魔法少女なのでしょう？それならこの部屋を任せていられるわ。」

「だそうだ。」

部屋の中はとても異質な光景だった。魔法によって完全に外部から切り離された部屋だとすぐに分かった。

和室でも洋室でもない。というかこの世界にこんな部屋に住んでいる人は二人とないだろう。置物や私物なんかが普通の木でできた棚の上に置いてあるとこなどがまたこの部屋の異質さを強調しているようにも思う。

「それで……」

お風呂から上がったのだろうか？さっきの少女の声が部屋の出口の方から聞こえた。

「あなたは何者？」

「一応肩書きは「魔法少女」だけど？」

「そう。魔法「少女」と言う割に身体ががっしりしているように思うのだけれど？」

彼女は一瞬で僕の後ろへと回り二の腕の筋肉を人差し指でぶすりと突き刺した。

しかし、少しの痛みは彼女の誘惑的な格好に惑わされて消えていく。バスタオルを巻いただけの女の子。それは彼女が意識しようとしまいと僕を罠に落としてしまっていた。

「あなた、男じゃないの？名前は？」

「まあいつか。そうだよ僕は男の「魔法少女」さ。」

僕は戦っている時からずっとかぶっていたフードを取り去り、彼女に素顔を見せてみる。

彼女は僕の素顔を見ると一瞬たじろいだ。

しかし予想はしていたのだろう。大きな反応はそれだけで、あとは元の無表情に戻って、近くの置物に腰かけた。

その反応は僕にとっても意外だった。いままで会ってきた魔法少

女たちは僕を見てもつと驚いたり、すぐさまそこから離れたり…
…とにかく僕を同類とみなさなかつたのだ。
だから僕はずっとこのフードを被っている事にしたのだ。

「名前はミナト。14歳。「魔法少女」歴は3年。」

「そう。なら後輩ね。」

彼女は漆黒の髪をタオルで丁寧に拭いている。そんな様子を見ると、さすがに気がついたのだろう。

「私は暁美ほむらよ。年齢は……。分からないわ。」

拭き終わった髪をサツと手で流して見せる。

その綺麗な髪は男性の心をキャッチするためにかくさんのフェロモンでも放っているのかと、「魔法少女」でありながら科学的な事を考えさせるほどに魅力的に思えた。

少しでも気を紛らわすためにほむら先輩から眼を放す。

「わ、分からないとは？」

「私が同じ時間を何回も繰り返した結果よ。言っておくけど、精神だけよ。身体は真正正銘16歳よ。」

どうやら精神年齢も身体年齢も彼女の方が先輩らしい。

ほむら先輩は先ほどもしていたピンク色のリボンと同じ位置に同じように付け直していた。着衣はいつの間にか私服になっている。時間停止を使ったのだろう。

「これ、使いなさい。」

そう言って僕にキューブ型の物体を投げて渡してきた。それを片

手で受け取り、即座に自分のソウルジェムに押し当てた。

それがなんなのかは分かっている。グリーンフシードだ。しかもこれは僕が見てきた中でもかなり大きい。これだけあれば20%くらいは回復できるだろう。

「あら、助けてもらったのにありがとうございますの？」

「あ、ありがとうございます。」

そう言われて条件反射の様に言ってしまったからか？ 僕が恩着せがましいと思っ
ていると思っ
ているのだらう。ほむら先輩はちょっと気に喰わないと言った顔をしていた。

「あ、あの……」

このちよつと気まずい空気を立て直そうとなんとか声を出したが、この先をどう続け
ればいいのか分からなかった。

確かにちよつと生意気な反応だったかもしれない。けどそれはソウルジェムが濁っていたせい
でちよつと鬱になったというか、なんと
いうか……。とにかく僕は別にそういうタイプの人間ではなくて……

「モノローグが聞こえるわよ。大丈夫。あなたの今にも泣き出しそうな顔を見て察したわ。」

そう言っ
てほむら先輩は部屋の出口の方に歩いていく。

「あ、えと……。ありがとうございます、暁美先輩。」

「問題ないわ。あ、あと……」

そこで一瞬立ち止まると僕の方に振り返った。髪がその動きにつ

られてなびき、またも僕を惑わせる。

「私の事は「ほむら」と呼んでもらっても結構よ。モノローグの時と違うと大変でしょう。」

「え、あ、あわわ……。し、思考を……」

読まれた。どこから読まれていたのだろうか？　もしかして髪に見とれていたのも分かっていたのかもしれない。

そんな風に考えながら僕はほむら先輩の方を見る。

先輩は一瞬ニヤツとちよつと意地悪な笑みを浮かべると部屋をあとにした。

02、希望と絶望は紙一重（前書き）

この二次創作の主人公は男です。

見たくない人はどうぞ戻ってくださいw

見たら感想をお願いします。

ここをこうした方がいいよってのがあったらぜひ！

02、希望と絶望は紙一重

「魔法少女」になるために叶えた願いはその後の「魔法少女」人生に大きく影響してくる。

例えば僕の知り合いで責任感の強かった魔法少女がいた。彼女はキュウベエにこう言ったらしい。

「私に知識があればもっと多くの人を助けられたでしょう。私はこの世界のすべてを知りたい。」

そしてその願いが叶い、「魔法少女」となった彼女は大きな本を片手に魔獣たちと戦っていた。

しかし彼女は世界の何もかもを知りつくしてしまうと、たちまち円環の理に導かれ、違う世界へと旅立ってしまった。

また僕の知り合いの一人はこう言った。

「私は変わりたい。先輩のように輝いていて、綺麗な人になりたい。」

彼女にはなににでも変身できる魔法が与えられた。その力を使って憧れの者に擬態し、その人を一生懸命に演じた。

しかし彼女はある時自分は自分で、他者は他者である事に気が付いてしまった。

そしてそれと同時に円環の理に導かれて逝った。

つまり、その願いの限界が見えてしまい、絶望した時とはすなわち「魔法少女」の終わりの時と同じ意味なのだ。

円環の理さえなければ彼女達はきつと持ち直して今も「魔法少女」を続けていたに違いないのに、そんなものがあるからただ一回の絶望で彼女達は死んでしまつて……、もう生き返る事は無い。

まったく「魔法少女」つていうのは実はものすごく不自由なんだというのを感じられる。

僕はいままで実はそんなに不自由な世界で3年暮らしてきたわけだが、この先はどうなるのだろうか？

いままで通りの暮らしが続くのか。

それとも終わりが見えてきてしまつのか。

少なくとも僕にはまだ終わりの光は見えていなかった。

「ミナト、起きなさい。」

優しい声に魂を呼び起こされ、僕はハッと目を覚ました。

そう言えば昨日は疲れていてほむら先輩の家でそのまま寝てしまったのだった。

「朝食よ。」

ほむら先輩からチーズトーストを受け取ると、昨日から何も食べていなかったせいか、お腹が盛大に音を立って目の前のトーストを

欲求した。すぐにその欲求に応え、口を大きく開けて3分の1くらいを丸のみにする。

「あひっ、あひっー!」

火傷しそうなほどの熱さのトーストを一気に飲み込んだことで僕の頭は一気にフル回転し始めた。

「ありがとうございます。」

とりあえず昨日の反省を生かしてお礼を一言言うことにした。

「礼には及ばないわ。」

言いながら髪を後ろへ流す。

それが超絶スタイリッシュに決まっっていて、またも僕は見とれてしまっていた。

「なぜならそのパンはさっき私が誤って落としてしまったものだから。」

「ぶがつ!!!??」

「冗談よ。ゆっくり食べなさい。時間はあるわ。」

危うく鼻からパンが飛び出すところだった。

ほむら先輩はまた少し意地悪な微笑みを浮かべている。しかし急に真顔に戻った。

「あなた、学校は行ってないの?」

「……はい。親とは絶縁しましたから。」

意外な質問ではない。僕は14歳だと名乗った時に言ったんだ。普通なら義務教育を受けるべき年齢だ。

「そう。私は高校に通っているからあなたの面倒は見れないわ。」

ほむら先輩は絶縁という言葉も聞いてもたじろぎはしなかった。慣れているのだろうか？

「近くに仲間がいるのだけれど。この町を見て回りたいなら紹介するわよ？」

「いえ、結構です。今までも一人でやってきましたから。」

ならいいのだけれど。

と心配そうに僕の顔を覗いてくる。僕はそれを笑顔でごまかした。

「くそ！ 昼間から魔獣に出くわすなんて！」

本当に運が悪かった。

というより、この町の負のエネルギーの溜まり場を知らずにたまたま通りがかってしまったのだ。

もしかしなくても自分が街案内を断ったのは正解ではなかった。

昨日の晩に少しは浄化したとはいえ、ソウルジェムはまだ淀みの方が大半だ。これでは昨日の晩に逆戻りしてしまう。

しかし、戦わずして逃げ切れるほど魔獣と言つのは弱くない。戦うしかなかった。

剣の腹で敵の攻撃を全て受け流し、反撃はしない。する余裕がな

いのだ。

四方八方から次々と影の様に黒く半透明の触手のようなものがミナトに襲いかかり、なんとか防げてはいるもののそれ以上の行動は起こせなかった。

一人で相手をするには数が多すぎる。

「どうすればいいんだ。」

剣の耐久度も無限じゃない。というかすでにひびが入りはじめている。こうして避けられるのも時間の問題だろう。

しかし、状況は剣の耐久度が尽きるよりも早く動いた。

一本の触手がミナトのリフレクトを免れ、その足を捕える。

「しまった。」

と思った時にはものすごい力で引つ張られ、自分は為す術なく身体をひっくり返された。しかも頭を強打し、軽く脳震盪を起こしてしまった。

そのせいで視界がぐにやりと曲がり、もはや自分が何をしていたのかも分からなくなる。

そのぼんやりした視界の中を紅い流星が一筋流れたような気がした。

「おい、大丈夫か？」

その声をかけられて、また助けられたんだな、と分かった。とりあえず声の主を安心させようとむくりと身体を起こす。

「おお、起きたか。よかった。」
「だ、だれ？」

その女性がムツとしかめっ面になるのを見て、また自分について誤解されるような話し方をしてしまったと気がついた。

「助けられなくてそりゃないぜ。そう言う時はまずありがとうございませうだろ？」

「あ、はい。すいません。」

「まあ、いいや。それにしてもお前、なんであんなところにいたんだよ。マジ死ぬ気がつーの。」

紅い服を着た魔法少女は立ちあがり、その辺にたてかけてあった長く大きな槍を杖の様につく。

「言っとくけど、この町にいる間はもう誰ひとり死なさねーからな！」

片手でがさがさと自分の髪をかきながらそういう。

「まあ、とりあえず仲良くなるうや。私は佐倉杏子。見ての通り魔法少女だ。」

その雰囲気は僕よりも「魔法少女」？ っで感じなのだが……。

「食つかい？」

「よろしく」の代わりに差し出されたそれは堅焼きブリッツだっ
た。

02、希望と絶望は紙一重（後書き）

とりあえず今週中は毎日くらい更新しようと思っ
てます。来週からはたぶんペースが遅くなっ
てくると思います。なので更新日時決めますねw

来週からは月曜日と水曜日と日曜日に投稿
します！守れるか分かりませんが、頑張ります。

きつと次話を期待してくれてる人がいると信じて！

03、魔法ってどう思う？（前書き）

感想および評価をお願いします。

シリアスな場面を書きたかったのですが、普段はこんなことしないから下手なの丸出しですw

03、魔法ってどう思う？

佐倉先輩に手を引かれて最初に案内されたところは教会だった。

「教会だからって別に固くなることはないさ。どうせ人はいないんだからな。」

そう言いながら重そうな扉を押しあけて、入りな、と扉をくぐる事を促された。

中に入ってみると、教会とは言えない場所が広がっていた。

歩くとほこりが舞い、道の両脇にズラリと並んでいる木製の椅子にも全てほこりが被っている。

数十年は使われてなさそうな古い古い教会だと思われる。

「ここ、何年か前まであたしの家だったんだ。」

背後で扉が閉まるが、どこからか風が吹いている。

「魔法少女になった後ですね？」

「そうだ。」

佐倉先輩はその後しばらく沈黙の時間をおいてから再び口を開こうとした。

「先輩はここでいきなり僕に魔法少女になった経緯でも話すつもりですか？」

「……悪いかな？」

「悪いとは言いませんが良くないです。僕はもう人が哀しげにしてるのを見たくないですから。」

魔法少女の人生なんてたいていは辛いものなんだ。特に、自分がそうであるからなおさら人の過去話は聞きたくなかった。

「じゃあミナト。お前は魔法についてどう思う？」

魔法について。それを「魔法少女」に聞くか。

「あたしは……、魔法は結局人のためにならないと思ってた。」

彼女は教壇の上に置いてある開かれたまま埃を被った本のページをめくる。

「魔法を人のため使って、それのおかげで何かの願いを成就できたとしても、それはまやかしみみたいなもので、最後は結局なにもかも魔法なんて奇跡の塊みたいなもののおかげで自分は何もできていないって気付いてしまうんだ。そして自分のやったことと魔法のおかげでできたことが分からなくなって、全て魔法のおかげなんじゃないかって自分を疑って破滅してしまう。」

ページをめくる手を止めずに彼女はそう言った。

ちなみに、彼女のそれは違うと僕は感じている。

上手く言葉にできないけど、魔法は人を助けるためにあるんじゃないと思った。しかし、何のためにある？ と聞かれると言葉が浮かばない。

「だけど今は違うと思うてるよ。お前の知らない、今はもういない

魔法少女のおかげで考え直したんだ。」

「……今は、どう思ってるんですか？」

「結論からいうと。魔法つてのは人のためにあるんじゃないと今は思ってる。魔法があるから人を助けられるだけであって、魔法自体は道具にすぎないんだ。結局人を助けられるのは人だけなんだよ。人を助けるために使える魔法があるのならあたしたち魔法少女は積極的に魔法を使って人を助けるべきなんだ。」

先輩は本の表紙をパタンと閉じると教壇から降りた。

「それがあたしを改心させた魔法少女の遺産だよ。」

先輩が僕の目の前にある木でできた長方形の物を指差した。良く見ると天板は止められておらず、押せば開閉できそうだ。そしてその上に乗った金属製のプレートに文字が彫られている。棺桶ってやつか。

「でも、円環の理に導かれて逝った魔法少女があとに残す物は何もないんじゃない。」

実際に僕の目の前で逝った彼女達はあとに何も残せなかった。

「そうだよ。でもどうしてもあいつの物を残したくてな。あいつのモノを自分で作っちゃったんだよ。」

開けてみな。と言われて僕はいいのかと思いつながら棺桶の蓋を押しあげた。

中には一本の剣が入っていた。それを手に取る。

僕のと比べたら身は細くて短い、しかし真つ直ぐだった。細い身

は歪みなく磨かれていて、光を綺麗に反射している。

「言っとくけど魔法は使っていないかな。逆に魔法を使ったらそこまで綺麗にいかなかったんだ。」

会心の一振りというものだろう。聞かなくても分かる。

僕の一振りとは違って一見軽くてもろそうに見えるが、歪みないとにかく歪みがなかった。

「魔法を使わずにここまでのことをするなんて……。職人技ですよ、これ。」

「なんか、方法はもともと知ってたような気がするんだ。さやか魔法でもかけたのかな。」

結局大事なものは「人間」ということだ。

魔法があるうがなかるうが、確かな「思い」があれば気持ちは伝わるのだ。

僕は彼女達に何を伝えただろう。きつと何も伝えていない。

その後先輩は僕に数個のグリーンフィードを渡し、僕はそれで魔力をほぼ全回復した。

それから街めぐりを再開したのだった。

「なーミナト、お前ゲーム得意か？」

「いえ、あんまり。」

魔法少女になる前もずっと家に閉じこもってばかりだったから、

ゲームセンターなんてそんなに行ったことも無かった。

「ちえ、ほむら達が来るまでの間一緒にやろうと思ったのになー。私は超得意だからレベル合わないからつままないな。」

「すいません。」

「別に謝らなくてもいいって。じゃあいつてみようかなって。」

先輩は懐からコインを取り出し機械に入れると、慣れた手つきで画面を操作する。

「どうやらこのゲームは音楽に合わせて足元の十字マークを踏むゲームらしい。」

「お、新曲入ってる。」

とか言って最初から難易度最高を選んだ時はさすがに無理じゃないかと思っただが、先輩はそれを難なくクリアし、総合評価でもA+なんてヤバそうなのを出すから恐れ入った。

「なー、さっきのサビの入りんとこの踊り方変じゃなかったか？あのクルクル回ってツパーン！ってなるやつさ。」

「初見でそこまで追求するんですか!？」

「はあ？ たりめーだろ。このゲームは誰が一番華麗に踊れるかを競うんだぜ!」

ゲームでここまで集中するとは思わなかった。

「おっと、そろそろ二曲目選ばないと。」

「楽しんでるようね。」

後ろから声が聞こえ、振り向くとほむら先輩ともう一人女性がそ

ここにいた。

ほむら先輩が真っ直ぐな髪の毛をしているが、この女性は黄色い髪が柔らかく波を打っていて、先の方は巻かれている。大学生にでもいそうな感じのヘアスタイルをしていた。

「あ、こんにちは。私の名前はバマミ、一応ここでは最年長の魔法少女よ。」

「え、でも……？」

僕がほむら先輩の方をちらつと覗くとほむら先輩は一瞬こつちを睨む。言ったら殺すと言っているように思えるほどの目付きだったが、すぐに笑顔に戻った。それが逆に僕に怖気を覚えさせる。

「何？」と巴先輩が僕の眼を覗く頃には僕の一瞬の震えは治まっていた。

「知りたい事があればなんでも聞いてね！」

「さて、今日はどういう作戦で行くんだ？ あとマミ、見滝原はあたしが案内しといたぞ。」

ゲームを全部終えた佐倉先輩もゲームの台の上から会話に加わった。

「そ、そんな。男の子とデートしてみたかったのに！」

「で、デート!?!」

心底残念そうな顔をしている巴先輩のその言葉は破壊力抜群で、ミナトの顔が真っ赤に染まるのは一瞬だった。

しかし彼女達はそんな僕の反応を面白そうに見ていた。ぷすす。とかほむら先輩もこらえ笑いをしている。

だってデートでしょ？ デートって言ったら手をつないだり腕を

組んだりしながらいろんなところに行くあれでしょ？

「さすがは中学生ね。ああ、私にもこんな時代があったわ。」

「おいマミ、恋人ごっこしてやれよ。」

「ウブね。」

三者三様に笑いを必死にこらえている。

「な、なにがどうなって……。」

「いいわ。また今度時間が空いてる時にでもお出かけしましょうね。」

何が何だか分からないままその話題を流されてしまった。

そして話題は魔獣討伐の戦略についての話に移るのだった。

03、魔法ってどう思う？（後書き）

話はまだ動きませんね。

一応7話ぐらいから本格的に動かそうと思ってます。

予定だから頑張りすぎちゃうかもしれませんが、もしくは力尽きちゃうかもw

04、魔法少女の日常はこんな感じ（前書き）

感想、評価をぜひお願いします。

04、魔法少女の日常はこんな感じ

魔獣の出現場所はほむら先輩の調査によってだいたいの出現位置があらかじめ予測されていた。

朝の様に負のエネルギーが集まりやすい場所はもちろん魔獣が現れる場所としてピックアップされているが、そういうところは普通の人間でも感知できるほどの負のエネルギーが集まっているから、無意識に近づこうとしないものなのだ。

今回は見滝原の東側をパトロールする事にした。今日の出現予測地が東側に偏っていたからである。

「いい、二人一組でいる事を忘れないようにね。チームは私とミナト君、暁美さんと佐倉さんよ。」

「分かった。あたし及びミナトが前衛だよな。」

「コンビネーションで魔力の消費を極力少なくする事を忘れないで。」

「分かりました。」

きつといつもなら彼女達3人でこんな事をせずとも連携をしているのだろう。彼女達は僕にいつもの連携の仕方を一通り教えると一旦解散した。

解散してそんなに時間が経たないうちに第1予測ポイントまで来ると、ほむら先輩の予測通りに魔獣が数体その辺を徘徊しているのが確認できた。

「絶望の淵に立っている人間に取りついて飛び降りさせる存在……。絶対に許す事は出来ないわね。」

念話によって向こうのチームも戦闘を始めている事が分かっている。今回は二人でやるしかない。くれぐれも死にそうにならないように気をつけないとならないな。

「僕は彼らを狩るだけです。絶望を刈って希望を咲かせられればどんなに素敵かって、思った事ありませんか？」

「ええ、そうね。私もそう思うわ。」

巴先輩が魔法を使ってマスキット銃の砲身が長い物をその手に呼び出し、僕は手はず通りに先に魔獣の輪の中に飛び込んだ。

『まずは前衛が切りこんで敵の数を数える。』

小声で復唱し、それをさっさと行う。

2, 4, 6……

「12です！」

僕はそれだけ大声で報告してその場から飛び上がり、魔獣の攻撃をかわした。

「よくやったわ。」

彼女は僕の真下から迫ってくる刃のついた鎖を狙撃し、無力化するとその場から離れて攻撃に移る。

「ええい！」

一発気合いを入れて剣を振りかぶり、魔獣の身体を思いっきり両断した。しかし通常の魔獣は身体を切断されたくらいでは倒れない。それを知っている先輩は魔獣に銃を向けるが、その前に魔獣の消滅が始まっていた。

「どういうこと!?!」

僕が一番最初の魔法だ。

断ち切ることに特化した魔法のおかげで剣は魔獣の身体をたやすく切り裂き、二度と結合させない。この世との関係を断ち切って存在そのものを切り捨てたんだ。

と、僕は口で説明をせずに次の魔獣に襲いかかる。

「もう、あとでちゃんと説明してもらおうからね!」

しかしその言葉は届いていない。僕の眼には次の標的しか映っていないかった。

「危ない!」

一瞬の大きな声とともに銃声が鳴り、僕を襲う軌道にあった鎖を撃ち落とした。

振り返り際に見えたそれは僕の身体を切り裂こうと迫っている。

銃弾に寄って軌道はそれだが服の表面を掠めていく。

「安心していいわ。あなたの周りはちゃんと守ってあげるから。」

「ありがとうございま……」

身の危険を感じて剣を楯のように構えると、鈍い音がしてそのまま押し飛ばされてしまった。空を飛ぶような魔法を覚えていない僕

は水平投射の要領でどこかへと落下を始める。

しかし、まだ11体も魔獣がいるのに一人では危険だ。空中で身体を大きくひねり、剣の腹でそこらへんの空気を掴んで押し放した。剣を団扇のようにして風を巻き起こし、その風に乗って空高く上昇した。

「やあっ！」

最高地点に達するともう一度同じ事をして一気に降下し、その勢いで魔獣を真上から一刀両断した。真つ二つに別れた魔獣は消滅する前に他の魔獣を押し倒す。

「先輩！」

「分かったわ！」

地面に降り立っていた先輩は、リボンをあらゆるものに巻きつけてそれを引っ張ることで砲撃位置まで高速移動し、先ほどのとは異なる大きな砲口を持った大砲をその場にドンと召喚した。

「これで終わりよ！ テイロ・ファイナーレ！」

そう言い放ち、同時に大砲が大きな音を立てて強烈な光を放った。光の後に続く弾丸は砲口の口径よりは少し小さいように思ったが、それは魔獣に着弾するとその口径以上の大きな風穴をぶち開けて貫通し、それでもまだ最初の勢いを保って次々と射線上の魔獣を一掃した。

「まだあと5匹いるわ！ 気をつけて！」

言われなくても。と一瞬思ったが、今回先輩には助けられてばっ

かりなのでそう言うわけにもいかないと思いとどまる。

さすがに7体もいっぺんに倒されると仲間意識なのか、それとも死にたくないとも思っているのか、魔獣の攻撃が活発化してきた。鎖や触手の数は一気に増え、雑に振られているのも避けにくさを倍増させていた。飛んでくる鎖を避けられるものは避けて、あとは防御に集中する。

「先輩は……？」

この嵐の中だ。僕のように大きな楯を持たない先輩はどうしているのか気になっていた。

しかし先輩のすごさは僕の予想をはるかに上回っていた。

空中を舞っていたのだ。リボンを使って敵の攻撃を上手くからめ捕り、時には魔獣の鎖の上を走ったりして団幕を見事に避けまくっていた。

「そんなところでうづくまってるって動けなくなるだけよ！ 大丈夫。相手より早く動けば攻撃は当たらないわ！」

そう言われて僕は即座に行動に移した。空を高速移動する手段がない僕は鎖や触手の降ってくる一瞬の隙を逃さず駆け回る。

そうして魔獣の足元まで行くと、そのままの勢いで魔獣の足に剣を突き刺す。

ズブリと、いった気持ちの悪い感触を感じぬ間に膝を屈伸させてそのまま切り上げた。こちらの魔法によって為す術もなく魔獣が断ち切られ、今度は下から両断される。

また仲間がやられたと言う代わりにオウオウと低い声で叫び声をあげている魔獣に、先輩が銃を次々と連射する。先ほどのよりは小

さいが、明らかに銃の口径より大きい風穴が蜂の巣のように開かれ、魔獣の存在がかき消された。

「あと3体！」

僕は切り上げた姿勢から高速で振り返し、さらに剣を思いっきり振り抜く。それは衝撃波となり、魔獣を切り裂いた。その反動でもう2発ソニックウェーブを繰り出し、同じ魔獣に3撃とも当てる。

3つ裂きにされた魔獣は身体の半分以上を失って崩壊する。

地面に降り立つと、迫ってきた鎖を剣で跳ね返してから残りの魔獣にもうダッシュで仕掛けた。

「これで終わり！」

飛び上がり、断ち切る。

僕の剣が魔獣を袈裟切りにするのとはほぼ同時に視界の隅で先輩が相手をしていた魔獣が崩壊するのが見えた。

これでこの場所の魔獣は全部のはずだ。

「お疲れ様！」

先輩にそう声をかけられ、僕はホッと一息ついた。

「これを飲みなさい。紅茶よ。魔獣退治のあとの紅茶は最高よ。」

先輩がティーカップを僕に差し出していた。

「あ、僕紅茶はちょっと……。」

「あら、嫌いだったかしら、ごめんなさい。」

先輩が紅茶の入ったティーカップを魔法で消した。

『マミ、ミナト、こっちは片付いたぞ。』

「こっちもちょうど今終わったところよ。さて、今日はもう遅いし帰りましょうか。」

『そうね。明日の宿題もしなくてはならないし。』

学生というのは本当に大変そうだ。しかも魔法少女もやっているなんて本当に恐れ入る。きっと毎晩疲れているだろうに。

『次の出現予想日時は次の月曜日よ。』

どうやったたらそんな予想ができるのかは全く分からないが、わざわざ聞く事でもないかと思ってやめる。

「じゃあ週末を挟むわね。どこかに出かけましょうか。ミナト君も一緒に。」

な!?!? 女子の先輩とお出かけ……? しかも3人も??

「そんなことをされても僕は別に惹かれたりしませんからね!」

『別に気を惹こうと何てしていないわ。女の子はね、意味もなく遊ぶのが好きなものなのよ。』

「そ、そういうものなんですか。」

多分と小さく聞こえたのは聞き間違えだろう。

じゃあ昔の僕の仲間たちももっと遊びたかったんだろうか。

そう思い、彼女達を思い出してみることにした。

04、魔法少女の日常はこんな感じ（後書き）

戦闘シーンを書くのはやっぱり楽しいです。

けど自分の中でばかり戦うから伝わるようには書けてなかったか
もしれませんね。

戦闘シーンの描写などでここをこうした方がいいとかあればアドバ
イスお願いします。

次回はついにミナトの過去について書きたいと思います！

感想お待ちしています。

05、彼女たちとの出会いは（前書き）

今回はミナトの過去についてです。

毎回言つよつだがあえて言おう。
感想を書いてください。

05、彼女たちとの出会いは

2年前彼女達にあった時、僕は一昨日とは逆の立場だった。

今と同じく灰色のフードを深々とかぶって、魔法少女っぽいものとは程遠いローブを着て、今と同じ大きな剣を一振り持っていた。

その日もいつものように街から街を転々としながら、魔獣の気配に寄っていくと、一人の魔法少女が魔獣と戦っているところに出くわしたのだった。

「どういうこと！？　なんで今日に限って魔獣が多いの！」

そう叫ぶ魔法少女は顔に半分に割れた仮面をつけていた。

「もう魔力が尽きそう。誰か助けて！」

しかし魔獣の鎖は無情にもその魔法少女に一撃を加えた。鎖にたき落とされて地面に激突する。

「痛い。痛いよう。」

無数の鎖がその魔法少女に向けられ、刃が白く光った。このままでは彼女は串刺しにされてしまうだろう。

そうしたら彼女は痛いと言うのを辞めて死にいたってしまったのか。そう思うと同時に僕は全力で彼女の前に走り、鎖の軌道を変えるべくその場で剣を抜刀する。居合切りの要領で超高速で放たれた一撃

は衝撃波を生み出し、目の前の鎖の軌道を変えた。

彼女が無事かどうかを確認する前にグリーンフィードを後ろへと放り投げてやる。

「ありがとう。」

と一言そう言って使用する音が聞こえる。

「時間を稼ぐ。隠れてろ。」

そう伝えるとその魔法少女はグリーンフィードを全部拾ってから物陰に隠れた。

それを確認して間もなく魔獣の攻撃が戻ってきた。それを剣で受け止めてから跳ね返し、ソニックウェーブによる斬撃を目の前の魔獣に食らわせる。

「数は30くらいか……。」

これではたとえさっきの彼女が復活しても勝機はほとんどないだろう。3人いてもダメかもしれない。

「江西みずきここに復活！」

「逃げるぞ！」

僕は江西と名乗った魔法少女を肩に担ぐようにして持ち上げて全力で走る。肩に担がれた方はいうと「おお。」と一言驚きの声を上げただけで、「下せ。」とか「放せ。」とかは言わずにおとなしくしていた。

「助けてくれてありがとう。お前なかなかいいやつだなー。」

茶色の髪の毛が夜の風に揺れ、月光に照らされてときおり見える綺麗な茶髪がふんわりと甘い香りを漂わせていた。

「お前男だよな。魔法少女なのに男とか変なのー。」

「気付いたのか。そうだよ。僕は男の「魔法少女」だ。」

彼女が僕の事を意識しているのかしていないのかは顔の片側を隠されていてよく分からなかった。

「あとちよつとで私のお仲間がくるのでーす。あなたはそれまで待っていてくれますか？」

「ああ、どうせ行くあてもないし。しばらくはこの町にしようかな。」

この町は大きな町ではないらしく、周りに見えるほとんどの家が一軒家で、ぼつぼつと背の高いマンションが見える。ビジネスホテルの一個くらいはあってもいいだろう。

しかし先ほどの様子だと魔獣は結構集まりやすいようだ。魔獣の発生原因が人々の負の感情だとすると、確かに住宅地の方が負のエネルギーは集まりやすいのかもしれない。

「やあ、お待たせ。君がみずきを助けてくれた男の「魔法少女」かい？」

僕は最初その声がどこから聞こえているのか分からなかった。周りを見回しても近くににいるのは江西さんだけで、他の魔法少女はどこにもいなかった。

「じつちだよ。」

やっと声の位置を特定し、僕は空を見上げた。

「やあ、僕の名前は三浦すずほだよ。すずほって呼んでね。」

彼女は長身のワンドの上に座っていた。大きな本を片腕に抱き、髪は後ろでポニーテイルにくくられている。女の子にしてはちょっと日焼けした顔にはフレームの無い眼鏡をつけている。知的な人という印象だ。

「はじめまして。」

「自己紹介は無いのかい？ 君にも名前くらいはあるだろう？」

残念ながら僕はその質問に応える事が出来なかった。なぜなら、この時僕は名前がなかったのだ。

「呼び名が欲しかったら、「アーミーナイト」とでも呼んでよ。」

「アーミーナイトね……、何の冗談だい？」

「意味分かんない。」

彼女達は僕が名前を言わない事に腹を立てている様子だった。

「その冗談を説明するにはまず、僕がどうして魔法少女になったのかを言わないといけないんだけど……、聞く？」

「なるほど。事情ありの様だね。」

「ねー、すずほー、どういふことが分かんないー。」

「わからなくてもいいのさ。」と言いながらすすほが頭を撫でる

と江西は急におとなしくなった。

「ねーねー。アーミーナイトって意味分かんないし呼びづらいから短縮して「ミナト」って呼んでもいい？」

会心の出来だった偽「二つ名」をわずか数分で破壊された。

代わりに僕はその日、新しい名前をもらったのだった。

05、彼女たちとの出会いは（後書き）

ほむら達と出会う前に彼は二人の魔法少女にであっていたのでした。

次回もこのお話の続きです。

魔法少女になった時のお話は7話かな。

この話が意外と長くなったので、7話で動く予定でしたがずらしま
す！

06、知識の裏切り（前書き）

ミズキとスズホの表記を平仮名からカタカナに直しました。
こっちの方が見やすいかと。

感想お願いします。

06、知識の裏切り

僕がミナトという呼び名をもらってから3カ月の時が過ぎ、彼女たちともすっかり打ち解けた頃のことだ。その頃はもうすっかり夜が早く、ときおり雪も降っていた。その頃になると魔法少女も夜出歩くのにはちよつとだけ厚着をしていた。

「分かるかい？世界各国の魔獣の出現ポイントに共通している事は、そこに負のエネルギーが溜まっていると言う条件の他にもいろいろあるのさ。だからそれが何なのか突きとめてしまえば、いつ、どこで、どの程度の強さの魔獣が出現するかをある程度予測できてしまふんだ。」

彼女が分厚い本をボタンと閉じて眼鏡の位置を直す。

スズホの説明で僕が分かった事といえば、頭が良ければ魔獣の出現予測をできるということだ。まるで天気予報士と同じじゃないか。

「魔獣が出るから今日も集まったんでしょ！早く終わらせて帰ろうよー。」

「そうだね。じゃあまずは魔獣の出現予想位置まで一気に飛ぼうか。」

スズホはワンドの高度を下げてみずきを乗せてやると今度は上昇していく。僕はそのワンドを空中でつかんでぶら下がった形で移動した。

「魔獣は何匹？」

「予想だと7〜9匹だね。まあこのくらいの数なら5分とかからな

いだろう。」

出現数は7匹で、スズホの予想は確かに当たっていた。

しかしその強さが並ではなかった。なんとか4匹までは倒したものの、残りの3匹がなかなか手強く感じた。それは魔力がかなり消耗しているからだろう。ここまでですでに20分を費やしている。

「みんな円環の理に導かれる事だけは避けなよ。危ないと思ったら逃げていい。なかなか手強いからね。」

スズホがそう言うのに対応できないほどに僕は息切れを起こしている。みずきの方もだいぶ弱っていた。

「さ、ラストスパートだ。」

バツと自分の前で大きな本を開き、とあるページが開かれた。横で見ている僕にはそこになんと書いてあるのか分からない。見たことのない文字だ。すずほはワンドを高々と上げ、それをさくさくつと読み上げ始める。

「我、契約を捧げ力を得たものなり。我の導きに従い、召喚された暁には……」

スズホの最初の魔法、詠唱魔法は発動まで時間がかかるが、低コストで高威力を期待できる。ただし彼女は詠唱している間動けない。それを守りながら戦うのが今の僕の使命だった。

「ミズキ！」

「よし来た！」

ミズキの身体が光を放ち、その形態が大きく変わっていく。腕から羽毛が生えはじめ、足の骨格が変わり、頭が鋭くとがっていく。最後には全身が羽毛に包まれ、翼をはためかせた。それは巨大で、鷲のような形をしていたがとどころ違う。微妙な違いが違和感を発していた。彼女の最初の魔法、変身魔法だ。

「さあ、怪鳥ミズキちゃんに乗りたまえ！」

僕は「言われなくても。」といいながらミズキの背中にまたがる。翼をばたつかせて空を飛び始める。器用に魔獣の鎖を避けつつ魔獣に近づいていき、俺が魔獣を切り裂く。いつもはその連携でなんとなかっていったが、今回はそうもいかなかった。

鎖が途中で網目のように張り巡らされ、ミズキがそれに足を引っ掛けてしまい、集中力が途切れて変身が解除されてしまった。

「きゃー。」

かわいく叫びながら落ちていたが、どうせ着地の瞬間にネコにもなるに違いないので放っておき、自分はカタパルトで打ち出されたのを利用して、そのまま魔獣に一撃を与えに行く。

しかし何重にも張り巡らされた鎖による網が進路をふさぐ。それを切り分けながら進み、魔獣にたどり着く頃には先ほどの勢いはほとんど失ってしまった。

「ミナト！」

スズホが声を上げた。ワンドが金色の光を発し、稲妻を纏っている。どうやら詠唱の第一段階が終了したようだ。

「問題ない！」

剣を振り上げ、思いっきり振り下ろす。魔獣が真っ二つに割れて僕はその間を通り抜けて、落下していった。

落下した先でライオンの動物に変身したミズキが僕を受け止めてそのままスズホの方へと全速で走った。

スズホは再び本を読み始めている。

「……野蛮な獣たちに天罰を与えよ！」

僕たちがスズホの後ろに回ると同時に詠唱の最後の部分を読み上げ、ワンドを魔獣に向かって振った。

すると魔獣の周りに急に暗雲が広がり、魔獣を完全に包み込んだかと思うと放電した。雷のようなものすごい音がし、電撃が暗雲の中で激しく踊っている。

バチバチいつてるとか生易しいものじゃない。稲妻が走るたびにものすごい音がし、魔獣が燃えているのだ。

「これでおしまいだよ！」

最後に一際大きな音をたてて空から2本の雷が落ち、暗雲が消えた。その場にはグリーンフシード以外何も残っていなかった。

「……このグリーンフシード、僕に預けてくれないかな？」

スズホが今集めた大ぶりのグリーンフシード7個を見てそう言った。

「君たちは円環の理について知りたくないかい？」

円環の理とは魔力を使い果たした時にそのソウルジェムが消える現象の事だ。

契約が終わる時、一人の女神が目の前に現れて神の世界へと導くと魔法少女の中で伝承されている。と、キュウベエに聞いた事がある。

「ミズキ興味あるー。円環の理の話もつと聞きたい！」

「僕も興味あるかな。僕もミズキもソウルジェムにはもう少し余裕がありそうだし……。」

「ありがとう！ 必ず円環の理についての情報を持って帰るからね。」

ミズキはそう言ったあと本を開き、その中に飛び込んで行った。

そして後を追うように本も消える。

それからしばらくミズキは魔獣狩りに顔を出さなかった。

二週間と言う時が流れ、スズホは疲れ切った顔で僕たちの前に再び現れた。

「どうしたんだよスズホ。元気ないぞ！」

ある日ちょうど僕たちが魔獣狩りを終えて話をしていたところに急に大きな本が現れ、その中からスズホがでてきたのだ。

そして身体から真っ黒に染まったソウルジェムを取り外すと、それをおもむろに手で握りつぶそうとした。

「おい、何やってるんだよ！」

僕は慌ててスズホの手から彼女のソウルジェムを取り上げた。

すると彼女は顔を上げて僕を一瞬強く睨む。感情むき出しの眼だった。「なんで死なせてくれないの？」とでもいいたげな、明らかに僕を恨むような眼だ。

しかしその顔もすぐに歪み、崩れて、彼女はその場で顔を抑えて泣きだした。

「どうしたんだよ。何があった？」

何か言っている。しかしその声は彼女の嗚咽に全てかき消されてこちらにはまるで聞こえなかった。

「円環の理は魔法少女にとって「終わり」を示す最悪の事象だったわ。」

それは僕たちもよく分かっている。魔法少女が魔力を使い果たした時、円環の理に導かれてその存在を消される。

「でも、ここは二つ目の世界で、何もかも嘘で、本当の事を塗り替えられた偽物だった。」

意味が分からなかった。

平行世界？ 嘘？ 偽物？

そんなわけがない。僕たちは生まれて、魔法少女になっていまま

で生きてきた。それはちゃんと僕が記憶しているのだ。嘘なわけがない。

「本当の世界で円環の理は魔法少女にとって救いだった。魔法少女は魔力が尽きると魔女となり、人を襲った。」

円環の理が救い？ そんなわけがない。魔法少女は魔力が尽きると消されてしまうのに、それが救いになるわけがない。それに魔女ってなんだよ。

「僕の蓄えてきた知識は全て偽物だった。もうこの世界で生きていく価値なんかないよ。何も得られないこの世界で、生きてる価値なんかない！」

その時、スズホのソウルジェムが一気に真っ黒になっていくのに気がついた。このままでは彼女が円環の理に導かれてしまう。僕は先ほどまでに得たグリーンフィードを使い、よどみを取り戻そうとするが、それは無意味だった。ソウルジェムのよどみは消えるどころか、どんどんひどくなっていく。グリーンフィードでの回復が追いつかないのだ。

「スズホ！ そんなに悲観したらスズホが消えちゃうよ！」

ミスキがスズホの耳元で大声を出した。

しかし彼女はもうすでに耳をふさいでいた。この世界からの情報を拒否する様に眼を強く閉じて、耳を手でふさぐ。その口から嗚咽だけがこぼれていた。

「おいスズホ、辞めろ！」

06、知識の裏切り（後書き）

知識の魔法少女は円環の理に導かれて報われたのでしょうか……？
円環の理に導かれた先には何が見えるのでしょうか？

次回は虚偽の魔法少女の消失です。

もう一話ずらしますね。

感想お待ちしています。

07、虚偽の魔法少女の消失（前書き）

円環の理は元の世界を知らない人たちにとって終わりではないと思っんです。

だって死ぬ時の感覚は死んだ人にしか分からない。

ほむら以外の誰も円環の理が神の救済であることには気づけないのだから……。

07、虚偽の魔法少女の消失

スズホがいなくなった後、僕と江西ミズキの共闘関係はなんとか続いていた。

しかしお互いに心に大きな傷が付き、魔獣狩りはほとんど作業と化している。というか、予報をする者がなくなったので、魔獣が出たところにそれぞれ向かって、結果共闘関係になるだけで、それぞれの意思ではなかった。

僕はこの町を離れることもできたが、それをしなかったのは単にめんどくさかったからという理由と他に、スズホの墓がそこにあっただからだ。

僕はひどく落ち込んでいた。それこそ今にも円環の理に導かれるんじゃないかと言うくらいにソウルジェムが淀んだ事もあった。しかしそれはスズホのソウルジェムには到底届かなかった。

「結局男の魔法少女なんてそんなものだよね。第二次性徴時の女の子に比べたらその感情の転移は大きくない。君の願いを聞き入れたのは僕の重大なミスだったかもしれないね。」

使い終わったグリーンフシードを回収するためにこの町に来ていたキュウベエが僕の前に現れた。

「だったら、僕の存在価値ってなんなのさ？」
「ないんじゃないかな？」

キュウベエは真顔で即答する。

その顔が今は妙に憎たらしくて、蹴り飛ばしてやりたかった。とにかく反抗したかった。

そんなのは間違っている。僕に価値がないなんてそんなわけがない。僕は……。僕は……。

具体例が何も出てこなかった。

実際僕に何かがあると言うのだ？

家族は自分で切り捨てた。帰る場所も無い。友達も離れてしまった。好きな人だって消えてしまった。

だったら僕に何が残っているのだろうか？

ソウルジェムがまた黒くなっていく。しかしそれでも円環の理は導いてくれなかった。

僕はどうすればいいんだ。

「ミナト。」

半分の仮面を被った魔法少女が僕の前に立っていた。

「ミズキ……？」

僕は半泣きの顔をミズキに向けた。ミズキも泣いているようだった。

「そんなに悲しい顔をしないで。」

ミズキは無理やり笑って見せたが、その顔は引きつっていてとても笑顔とは言えないありさまだった。

「なんか僕の方が先輩なのに、かっこ悪いね。」

「……そうだよ。かっこ悪いよ。」

その時ミズキが笑ったから、僕たちは立ち直れた。
完璧じゃないけど。
0からのスタートだ。

僕がこの町に来てから実に一年が過ぎようとしていた。
その間にスズホがいなくなってしまったけど、ミズキと二人でな
んとかここまで戦う事が出来た。

「ミズキ！」

「あいよ！」

僕とミズキのコンビネーションはさらに上手くなっていた。

動物に変身したミズキに乗るだけだったのが、今では僕が彼女の
引き立て役に回る事もある。

僕は剣の腹にミズキを乗せ、そのままフルスイングした。ミズキ
は滞空中にミサイル型に変身し、ものすごいスピードで魔獣に突撃
を仕掛ける。それは魔獣の鎖をも押しつけて魔獣のど真ん中を打ち
抜いた。

「ふう、これで終わりか。」

その日の魔獣狩りは夕方だった。そのあと結構時間があると言っ
事で、僕とミズキは近くの喫茶店で休憩することにした。もちろん
彼女の提案だ。そして僕の飲み物は彼女のおごりである。

「最近魔獣が多いな。しかも強いし。」

会話が途切れて気まずかったところにこの話だ。しかしこの時魔法少女としてのつながりしかもたない僕にはこの話題以外で切りだすことはできなかった。

「そうだね。……ミズキもこれ以上増えたらたぶん戦いきれなくなると思う。」

「根源を潰す必要があるかもね。」

根源を潰すとは負のエネルギーを生み出す人間を幸福にしてやるということだ。これだけ集中して魔獣が出現すると言う事はこの町が全体的に落ち込んでいるのかもしれない。それほどはっきりしたものだったらわざと目立つ行為をして街に活気を取り戻すこともできるだろう。

「ミズキの魔法、戦いに向いてないから負けちゃうかも。」

ミズキがうつむいてそう言う。

僕はその顔に見覚えがあった。

スズホが消えてしまう直前と似た顔だった。スズホほど引きつってはいなかったが、僕は念のため彼女の手を取ってソウルジェムの色を見る。

「お前、ちゃんとグリーンフィード使ったか？」

そのソウルジェムは少し淀んでいた。元の色であるオレンジ色はすでに見えないほどだ。

「ううん。使っていない。ちゃんと浄化できる数が集まったらと思うてとってあるの。」

「今すぐ使え。その状態で落ち込んだりなんかしたら導かれるぞ。」

僕は彼女の指からソウルジェムを外して自分のグリーンフィードを2、3個当てた。

2、3個でとりあえず元の色が分かるくらいには浄化され、ミズキの顔色も先ほどよりよくなったように見える。

「ほら、ちよつとは気分晴れただろ？」

「うん。でもね。不安のはやっぱり変わらない。魔獣が増えていつてその内押しつぶされちゃうんじゃないかって……。」

彼女の口は不安の言葉を垂れ流し続けている。僕は席を立て彼女の口を塞ぐために彼女の顔を自分の胸に押し付けた。

「大丈夫だよ。ミズキがピンチになっても僕が必ず助けて見せるよ。だからミズキはそんなこと考えなくてもいいんだ。」

彼女は驚いたような顔をしたが、そのあと僕に身をゆだねてきた。

しかし彼女との別れもその後すぐのことだった。

彼女はある日魔獣狩りに現れなかった。

その時の魔獣は仕方なく僕一人で片づけたが、心配になって念話で話しかけることにした。

「ミズキ、今日はどうしたんだ？ 魔獣の気配は感じただろう？」

しばらくの間返事はなかった。その間が僕の不安をあおる。

その状況はスズホが最後に虚空を見つめたのと同じ事に思えた。誰かがあの手を握ってやらないと彼女はきつと円環の理に導かれて逝ってしまうのだと直感した。

しかしその手は掴まれる前にだらりと降ろされた。

横に置いてあった心電図が0の値を示し、ピーという機械音が彼女の死を知らせた。

彼女に駆け寄りだらりとベッドの外に投げ出されている手を僕は握った。

しかしそのあとすぐに驚愕した。

そこにいたのはミスキではなかったのだ。

「キュウベエ、知ってたのか？」

「当たり前じゃないか。彼女の願いを聞いたのは僕だよ。」

彼女の病室から逃げるようにして公園にやってきた僕を待っていたのは白い獣だった。

「彼女がどうして円環の理に導かれた後あんなったのかは、もう君にも分かっているだろう？」

分かっている。

彼女は自分の容姿を偽っていたのだ。

「彼女は他のすべての人間の姿にあこがれていた。なぜなら彼女の顔の半分は火傷でただれていていたからだ。彼女はそれによって虐げられて自分に絶望した。そして僕に願ったんだ。「私は変わりたい。先輩のように輝いていて、綺麗な人になりたい。」ってね。」

僕はもうそれ以上聞きたくなかった。

「そして彼女は最初に発現した変身魔法で自分が一番良いと思う姿に変身したんだ。それからずっとその姿で生活し続けた。」

「やめてよ！」

「最初に質問したのは君じゃないか。良心で答えてあげたのに。まったく、意味が分からないよ。」

キュウベエはプイツとそっぽを向いてそのまま夜の闇に消えていった。

僕は最後彼女を見た瞬間に嫌悪感を抱いていた。それは彼女の事が好きだと感じていた僕にとって大きなショックだった。

だってそれは彼女への気持ちが嘘だったということではないか？

そんなはずはない。

だって僕はあんなにも彼女を思っていたじゃないか。

そうやって思い出されるのは全て彼女の偽の顔。しかし最後に思い出したのは彼女の素顔だった。

思い出した瞬間に腹の底から何か気持ち悪い物がこみ上げ、僕はそれに耐えきれずにそれを吐きだした。

「僕の気持ちは……」

結局その後も分からなかった。

だげどそつやって記憶を曖昧にしていくことで僕はまた救われて
しまった。

07、虚偽の魔法少女の消失（後書き）

次回も暗い感じでお送りします。

ミナトの契約について少し話数をいただこうと思っています。

最近の話を書いてて思ったのですが

この話R - 15か残酷な表現のやつ付けた方がいいですかね？
感想をお願いします。

08、力を合わせて・・・・・・・・（前書き）

今回の投稿も結局日付変わってから・・・・。
すいません。

今回のお話はなかなか書けなかった。
前回までに明かされたミナトのトラウマをどう処理するか、世界線
が5つくらい分岐していましたw

とりあえずこれでつなげる。

感想よろしくお願いします。

08、力を合わせて……………

三人の先輩は僕の話聞いてもほとんど動じなかった。

ほむら先輩の場合……

「人の死と言うのはそういうものよ。乗り切りなさい。」
なんて言ってくれた。多分あの三人の中で一番多くの人の死を見
てきたのだろうと思う。

確かに僕自身も乗り切らなければならないとは思っている。

佐倉先輩の場合……

「そりゃ悲しい事があったんだな。でもそれは過去の話だろ？ 今
を生きてなきや魔法少女はやってけないぜ？」

彼女が正にその模範だ。彼女は本当に今を生きていると思う。
僕と似た境遇をしていて、彼女はいろんな意味で先輩なのだ。

巴先輩の場合……

「そう、そんなことがあったのね。……大丈夫よ。私たちはそう簡
単には消えないわ！」

僕はその言葉に少しだけ安心した。

しかし、彼女達の言葉は僕の心の奥には届かなかった。

「ミナト君！ そっちの方お願い！」

巴先輩の指示で魔獣をとにかく切って切って切りまくった。

今日の魔獣狩りはかなり突然だった。
ほむら先輩の予報にない魔獣の出現だ。それゆえに彼女自身もかなり苦戦しているようだ。

魔獣たちの出現はいきなりだった。この世のすべての負の感情がこの町に集まっているのではないかと思うほどの大量出現だ。しかも魔獣たちはまだ増えている。

「ミナト。今日は逃げる場所がないわ。魔力を温存して戦って。」

それほど広範囲かつ大規模な発生だ。これは死ぬかもしれないとまだソウルジェムが明るく輝いているうちから思ってしまう。

「佐倉先輩！ 後ろ！」

「何！？」

ベテランの佐倉先輩ですら後ろを取られてしまっていた。

僕は彼女の後ろへ回り、その刃を切り落とす。

しかしキリはない。いつの間にか僕たちは互いに背中を預けあって迎撃するような形で戦っていた。

「ミナト！ ……お前長射程魔法、くっ……できるか？」

「開発中です。今はっ……使えませんっ！」

そういう佐倉先輩は槍の先から魔法弾をだして攻撃している。その攻撃方法は自分も何度か試した。しかし魔力の消費が多い割に攻撃力がなかったことから常用を諦めたのだ。

「この戦い方が燃費悪いのは分かっているんだがな……、さすがにこ

「ここまでになると使わざるを得ないだろ？」

「僕も使えつてことですか？」

「魔力に余裕があったら使った方がいいわね。この戦況で魔獣に突撃していくのはとても危ないわ。」

ほむら先輩は何も言わずに、どこから持ち出したのか、ガトリングガンを魔獣に向けて乱射している。ちなみに僕の射撃系魔法はそんなに連射性能はよくない。

「このままじゃ全滅してしまうわ。皆掴まって。」

ほむら先輩の手を取り、4人の時間が停止した。

「おいほむら。時間を止めても逃げるところはないぞ？」

「どちらにしても休息は必要でしょう？」

「でも後を考えたらこの魔法もそんなに長く持ちませんよね？」

今のうちにできるだけ数を減らしておくというのも手ではある気がするが、それはほむら先輩にしかできないであろう。

「あなたの命と引き換えに休むことなんてできないわ！」

「ええ、無駄にしようとは思っていないわ。体勢を立て直しましょう。長期戦になると思うから、ミナトと杏子の二人はどんどん切りこみなさい。の方がよほど燃費がいいわ。それからマミは魔獣たちの攻撃の無力化をして。私は……なんとかするわ。」

誰もほむらの指示に異議のある者はいなかったが、ほむらが何をするのか曖昧なところが気になった。

「じゃあ行くわよー！」

そんな心配は置いとかれて、僕たちは時間停止の魔法から解き放たれた。

「ミナト！ お前は東側を頼んだ！」

「了解！」

それとともに剣を大きく振り、ソニックウェーブで目の前の魔獣を3体ほどまとめて切り伏せる。その攻撃で硬直している間に来た攻撃は巴先輩の巧みなりボン使いによってすべて直撃からはさらされる。

次の敵もその次の敵もソニックウェーブを使って切り倒していく。

「おりゃあ！」

一方西側では佐倉先輩が多節槍を駆使してあまりその場を動かずに攻撃している。しかし通常の斬撃では魔獣を倒すのに何度も切りつけなければいけない。

多節槍で魔獣を絡め取り、力で他の魔獣にぶつける。そしてなるべくまとめて斬撃をしていたが、それもなかなか上手くいっていないようだった。

かく言うこちらもなかなかしんどくなって来ていた。魔獣が学習したのだ。ソニックウェーブは音によってかき消され、自分で切りつけに行くしかなくなっていた。

巴先輩の作業は上手くいっているようで、僕と佐倉先輩には攻撃が届かなかった。

一つ気がかりなのはほむら先輩がいなくなっている事だった。

ほむらはとある反応に向かって走っていた。

「この反応、まさかこの世に魔女が生まれると言っの？」

グリーンフシードが羽化する直前の反応に酷似していたのだ。この世界で唯一ほむらだけが知る、この何とも言えない悪い予感のようなもの。

それにどんどん近付いていく。

「まどかの願いは完璧にかなったはず。なのにどうして魔女が……？」

そうこう言っているうちにほむらは反応のでているところに着いていた。

周りは魔獣に囲まれている。しかし彼らは自分の事など無視して反応の出ている黒い塊のところに集まっっていく。

「あれは、魔獣たちのグリーンフシードが合体しているの？」

魔獣たちはブラックホールの特異点のようになっていて一つの大きなグリーンフシードに吸い込まれていき、その後には何も残らない。

「元の世界でもこんな魔女の発現の仕方は無かったはず。どういうこと……？」

そうしている間に近辺にいたほとんどの魔獣が取り込まれた。

元の世界で見慣れた球状のグリーンフシードを回収しようと近づいたその時だった。

グリーンフシードが今度は大量の魔力を吐きだし、その空間が切り取られ始めた。

「羽化すると言っの!?!? この場で……!?!?」

ほむらはとつさに周りを見回した。魔女の口付けを受けそうな人物がいたなら守らなければならない。

「まどか……、あなたの願いは？ 叶わなかったというの?」

魔女の結界がすさまじい早さで開かれた。

そこはほむらにとって見覚えがあるようなないようなさういいうところだった。魔女の結界はどれも同じような意味の分からない眼の回る内装をしている。この結界も例外ではなかった。

「とりあえず先に進んでみるしかないわね……。」

どうやら結界ができただけで、使い魔や魔女はまだ生まれていないようだ。畏もなく一本道ですんなりと一番奥の部屋を見つける事が出来た。

その扉の上に薄らと文字が浮かび始めた。

クラーク・シャーナ・クラッチオリゼー

それがこの結界の主の名前らしい。

「本当に魔女なのね……。」

まどかが来るかもしれない。

彼女の願いは「すべての魔女を生まれる前にこの世から消し去り

たい「だから。

08、力を合わせて・・・・・・・・（後書き）

力を合わせたのは魔獣と言うオチ。

次回は魔女を倒すためにもちろん円環の理が動きます！

そしてその次くらいに新キャラを出す事を考えています。

遅れてすいませんでした！

09、新たな魔女は新たな戦いの始まりを告げる。(前書き)

ふと思った。

題名、アニメみたいに話の中のセリフからとった方がいいんじゃないだろうか……。

感想お願いします。

09、新たな魔女は新たな戦いの始まりを告げる。

ほむらは今までに対峙した事のない新たな魔女、クラークのいる部屋の扉を開けた。

その扉は特に何事もなく突破できたが、油断は禁物だ。この世界最初の魔女とは言えもしかしたら先に使い魔が生まれるなんて事もありえる。

ほむらは至近距離を狙えない弓の代わりに、楯から使いなれてきた拳銃、デザートイーグルを取り出し、部屋の中の様子をうかがう。部屋の中は狭く、特に罨などはなさそうだった。当然だ。グリーンフシードがまだ羽化しきっていないのだから。

「まどか……？」

銃を下に向けて構えながらほむらは小声で親友の名前を呼んだ。しかし彼女はまだきていないようだ。もしかしたら来ないのかもしれない。

今回の魔女は明らかに元の世界の魔女と発現の仕方が違う。魔女に酷似しているだけで、本当は違うものなのかもしれない。

「私の砂時計が再び落ち始めたのはこいつのせいなのかしら？」

ほむらは楯に埋め込まれた砂時計を見る。

これがすべて流れ落ちる時間が一カ月だとしたら、今はだいたい四分の一が落ちているので、残りは約3週間と言つことになる。

確かに、この砂時計が再び落ち始めたのも1週間前のことだ。それによつてほむらは再び時間停止、逆行をできるようになっていた。

「もし、この新たな魔女の存在が私の砂時計を作動させているのなら、私は全力でこれを排除しなくてはいけないわね。」

もちろん3週間後に明日を見るためだ。

魔女を倒すだけならそんなに苦労はしないだろう。

まあ、3週間後にあのワルプルギス級の魔女でも出ない限りだが……。

「そろそろグリーンフィードが覚醒するところかしら？」

部屋の中心に浮かんでいるグリーンフィードに銃を向ける。

グリーンフィードに敵意を向けた瞬間、膨大なエネルギーを放出しながらグリーンフィードが形を変えていく。

「魔女のお出ましね。」

クラークのその姿はとてもシンプルだった。特にひねりもない。ただのケルベロスだった。

「すぐに終わらせるわ！」

時間が凍り、ほむらの両手にはサブマシンガンが握られていた。

そしてそれをケルベロスの頭に向けて乱射する。

たいていの魔女はこれだけダメージを与えればあとは勝手に消滅するものだ。

そう思い、ほむらは時間停止を解いた。

「これで終わりね！」

ケルベロスがはじけるのを見届けようとしたが、それはかなわな

かった。

なんと銃弾のすべてを反射したのだ。ケルベロスの身体の代わりに銃弾がはじけ飛び、金属片の雨がほむらに降り注いだ。

「そんな、時間停止が効いていないと言うの？」

しかしそんな事はないはずだ。時間停止をした時、確かにケルベロスの時間も凍っていた。

どうしてと考えている暇はなかった。ケルベロスが紫色に染まった火球を連続で吐き、ほむらはその対処に全神経を使っていた。

「これならどう？」

封印していた自作爆弾をケルベロスに向かって投げつける。

それはケルベロスの頭のうち一つに当たると即座に爆発する。しかし、煙が晴れてもそこには無傷のケルベロスがいた。

「なんなのよ！」

弓での攻撃は貫通するもののダメージはほとんどないようだった。傷口もほとんどん治されていく。

魔女が覚醒しきつたと言うのにまどかは来ない。

これはいったん戻らないといけないかもしれないと楯に手をかけたその時だった。

「ほむらちゃん！ 遅れてごめん！」

どこからともなく聞こえる声は柔らかく、相変わらず優しくかった。誰かなんて問う必要もない。その声は間違いない……

「まどか！」

天からまばゆい光が降り注ぎ、ケルベロスの身体を貫いた。ケルベロスは粒子と化し、消えていく。

グリーンフィールドがその場に残され、結界が幻となって消えていく。そして空を見上げると背中に光の翼を纏い、柔らかく輝く桃色の長髪を揺らしながら、一人の女性が神々しく舞い降りてきた。

「帰って来たよ。ほむらちゃん！」

鹿目まどかは再び現世の土を踏んだ。

まどかの話によると、先ほどの魔女はやはり特異ケースらしい。元の世界のように魔法少女のなれの果てではなく、人々の負の感情の塊らしいが、負の感情だっていきなり増加するわけがない。だいたい増加したとしてもそれがいきなり集まりだす理由が分からない。

……この事象はいきなりすぎる。

今まで何の前兆もなかったのが、今になってなぜ？

元の世界でも、今の世界でも魔法少女は有史以前から存在していて、ということは魔獣もその時から存在していたはずだ。

10万年とか、そういう単位で魔法少女の歴史は全てキュウベエが把握しているはずだが、キュウベエは魔女の存在を知らなかった。

「私も分からないの。魔女は魔法少女からしか生まれないと思ってただけ、まさか負の感情が集まってできちゃうなんて思わなく

て、それで来るのが遅れちゃった。ごめんね。」

「それより、今まどかは現世に存在し続けているけど、それはどうして?」

それもそれで問題である。

まどかが高次元にいないから円環の理が働かないなんて事になっていたら大変だ。

この世界にはおそらく2000〜3000人以上の魔法少女がいる。世界で1日に人が何人も死んでいるが、そのなかに魔法少女も含まれるとしたら大変だ。

「ほむらちゃんが心配してることは大丈夫だよ。私は魔法少女、この身体は本体じゃないの。ソウルジェムは置いて来たから。」

ソウルジェムを置いて来た……?

神の力でも言うのだろうか? しかしそれはそれで問題なんじゃないかと思った。

「それと、この世界に居続けている理由だけど。それはやっぱりあの魔女のせいだね。今後またぶん見滝原に魔女が現れると思うの。ソウルジェムから変化するわけじゃないから私の魔法じゃどうしようもないから……だから直接倒しに来たんだ。」

「またここに現れるの? 他の場所じゃなくて?」

「なぜか分からないけど、この場所に集まるね。間違いなく。」

……やはり元の世界でも最悪の魔女、ワルプルギスの夜を出現させた見滝原と言う町は凶運が強いのかも知れない。

「……ほむらちゃん、もしかしたらワルプルギスよりグレートヒェンよりも強い魔女が今後この町に現れるかもしれない。そうしたら

多分私一人じゃ倒せないと思うんだ。その時は手を貸してくれるかな？」

「グレートヒエンよりも!? そんな……、そんなわけないじゃない。そんなの全世界の人々がひどく絶望したってきつとできないわ。だってあなたは最強の魔法少女だったからあんなにすごい魔女になつていたのよ!？」

「ほむらちゃん落ちついて……。」

言われてみれば少し取り乱していた。

しかしそれは……

「……分かったわ。あなたの頼みならば私は聞くしかないものね。でも、私がどこまでまどかの力になれるか……」

ワルプルギスさえ上手く倒せなかったのに……。

「あくまで可能性の話だから。それを防ぐために私は魔法少女としてここに戻ってきたんだよ。」

「まどか……。あなたは変わっていないわね。」

「えー!? そんなあ……」

まどかは本当に変わらず、優しかった。

09、新たな魔女は新たな戦いの始まりを告げる。(後書き)

まどか登場！

作者はほむら派ですがw

次回はまどかのいる日常を描く予定です。

ミナト、ほむら、マミさん、杏子、まどか。あと近いうちに新キャラを登場させます。

あれ、さやか・・・？

安定のさやかですw

10、勇者は恥ずかしがり屋（前書き）

暇な時間に書いてたら一話できあがってしまった。
更新してくださいと言われたので更新します。
次遅れても知らないからね！

10、勇者は恥ずかしがり屋

まどかの存在は意外とたやすく受け入れられた。

「この子誰？ 知り合い？」

とか言われたりはしていたが、それも最初のうちだけだ。全員でお茶をしている間に皆打ち解けていた。

ミナトは最初から知らない人なので特に問題視はしていなかったが、マミと杏子についてはとても不安だった。

もし変な反応をされたら……。と思っていたが、そんな心配は不要だったようだ。

まあ、彼女達だってそんなに子供じゃないと言う事だ。

……それも当然か。

だってあのループから抜け出してもうすでに3年も経っているのだ。

マミは高校3年だし、杏子は……。ニート歴+3年だし、私自身も高校2年生になっているのだ。当然心も体も変化している。

ほむらは久しぶりの面子を見て笑みをこぼした。

「どつしたんですか？」

ほむら先輩がさつきからずっと幸せそうな顔をしているのがすごく気になった。だって、彼女がそんな顔をしているところは、短い

付き合いたが、見たことなかったのだ。

「ちょっと、ホツとしているのよ。」

彼女はそう答えるとまた鹿目先輩を見て幸せそうな顔をしている。そんな彼女が来てくれた事が嬉しかったんだろうか？ ……いや、そうに違いないだろう。

「ええ、ミナト君「魔法少女」なの！？　なんで男の子が混じってるのかなって思ってたけど、そう言うことだったんだ！　よろしくね！」

「あ、はい！　よろしくお願いします。」

鹿目先輩の笑顔はものすごく眩しかった。屈託のない笑顔が僕の精神を突き刺し、意識せず眼をそらしてしまう。

その笑顔もそうだが、彼女は全身輝いて見えた。眼も心も澄んでいて、桃色をした髪もとてもサラツとしていて、無意識に目をそらしたと言つのにわざわざ見直してしまうほどの美人だった。

「ん？　ミナト君、どうしたの？　私の顔に何かついてる？」

そう言われて見てみれば、口元にケーキのクリームが付着しているのが見えて、僕はとっさにテーブル越しにハンカチを伸ばし、それをふき取った。

「クリーム付いてましたよ。……って。」

おい！　僕はいきなり何をしているんだ？　クリーム付いてるって言えば済む事じゃないか！　なんで自分から拭きに行ってるんだよ。口元についてたんだぞ！　それも拭いたのは僕が普段使って

るハンカチ！？ 何してるんだよ僕。ティッシュで拭けばよかったじゃんか！ って違う違う。拭かなければよかったんだよ。そっと教えてあげればよかったんだって……

ミナトはとつさに身体を乗り出して彼女の口元を拭いたそのままの格好で、まるで彼の時間が停止しているのではないかと思うほどに凍りついているのは裏腹に、水を当てたら蒸発して飛んでいきそうなほどにその体を真っ赤に染めていた。

「あ、ありがとう……。」「

鹿目先輩も鹿目先輩で頬が少し染まっっていて、それが僕の身体をさらに熱くさせた。

他の先輩たちも「あっ」と言う感じで硬直している。

気付くとミナトはそのままの姿勢で失神していた。

気がつくと目の前には巴先輩の顔があった。

「あら、起きたみたいね。目覚めはどうか？」

「特に問題ないです。」「

とりあえずベッドから身体を起こし、周囲を確認する。

「僕は……？」「

「……機械的に説明すると。鹿目さんの口元についていたクリームを拭きとってそのまま失神しちゃったのよ。もう、本当に驚いちゃったわ。」「

僕は失神する直前の事を思い出し、また顔を紅に染める。

「はい、クッション。」

巴先輩が渡してきたクッションを受け取って思わず顔に押し付けた。

「そんなに恥ずかしかったのね。……まだ皆隣の部屋にいるけど、行く？」

「……落ちついたら行きます。」

巴先輩は「そう。」と言い残して隣の部屋に戻った。

……とても情けない。

彼女達が年上だからとかそういうことなんだろうか？

なんだか、自分にはとても色っぽく見えていた気がする。それこそスズホやミズキとは比べ物にならないくらいに……。

それにしても鹿目先輩の顔、綺麗だった……。

……って違うわ！……なんでこんなことを考えてしまうんだろう。当分落ちつけそうになかったが考えるより慣れた方がいいと思っ
て、しばらくしてから僕は再び彼女達の輪の中に入ることにした。

「……お騒がせしました。」

「お、やっと復活か中学生。」

佐倉先輩がにやにやと意地悪な笑みを浮かべている。

それにちょっとムツとなりながら、僕は空いているところに腰を

下ろした。

「今ちょうどあなたのお話をしてたのよ。」

「ど、どんな話ですか？」

「心配する事はないわ。純粹だということについてと、やっぱり「魔法少女」って言うのはおかしくないか？　と言う事についてしか話していないわ。」

前者がどういいう結論にたどり着いたのか非常に気になるが、これは僕にとって有益ではないと思われるので追求するのは止めておく。

「ほむらちゃん、ミナト君がかわいいつていう話を忘れてるよ。」

「ぶふっ！？　……か、かわいいっ！！？」

「ああ、そうだったわね。でもまどか、あなた忘れていないかしら？　この子にそんな事を言ったらまた失神しかねないって言う事も話したでしょう？」

「先輩っ！　ぼ、僕だって本気で言ってるのと、話のノリで言うのくらい分かりますからねっ！」

「あらそう。」

「余計な心配をしたわね。」と言いながらほむら先輩は自分の髪を後ろに流した。

僕が毎回それに見とれるのを知っているはずなので、さすがに今回はひっかからない。

「それより、「魔法少女」って言うのはやっぱりおかしいですかね？」
「当たり前だろ。お前少女ってか、女ですらないじゃんか。」

まあ、確かに自分でも変に思っていないわけでもない。

しかし、良い呼び方が思いつかなかったのだ。

魔法使いつていうとなんだか変だし、魔法少年つていうのもなんだか違う気がする。

「そこで私から提案なんだけど……」

巴先輩はそこで一度区切り、ティーカップの中身を飲みほした。

「……あなたの肩書き、「勇者」なんていうのはどうかしら？ あなた、いっつもローブをまとって、大きな剣を担いでいるじゃない。私的にそれって「勇者」のイメージとぴったりなのよ！」

巴先輩はそう言いながら注いだ紅茶に口をつける。

「でもママさん、それじゃ「魔法」の要素が抜けてないかな？」

「いいじゃない。勇者の中には魔法を使う人たちもいるし。」

勇者……

それは今まで思いつかなかった。さすがは先輩と言つところか。とつても希望に満ち溢れた「魔法少女」の男らしい名前じゃないか？

「どうやら本人も気に入っているようね。いいんじゃないかしら？」

「まあ、「魔法少女」だってどうせキュウベエが勝手につけたものだからな。どう名乗ってもいいだろ。」

僕はその日から「勇者」と名乗ることにした。

10、勇者は恥ずかしがり屋（後書き）

まあ、そんなに多くないです。

今回の話は題名補完ですねw

まあ、こんな感じで最後に向かいますよっと。

次回は・・・

できたらミナトの契約のお話。

または、ミナトの武器について
ですかねw

感想よろしくです。

11、ミナトが魔法少女の力を授かる前の話をしよう。(前書き)

キュウベエの語りです。

上手く書けなかった……。

11、ミナトが魔法少女の力を授かる前の話をしよう。

ミナト……いや、奥村リツと出会ったのは3年前の事だ。

そもそもなぜ僕が男である奥村リツの存在を見つけた事が出来たのかというと、彼が魔獣を見ることのできる程度の魔力を持ち合わせていたからなんだ。

彼の魔力に惹かれてたどり着いたのは狭い狭い押入れの中だった。僕と奥村リツはそこで初めて出会ったんだ。

当時の彼はなまじ魔力があるせいで周囲から遠ざけられ、父親からは暴力を受けていたんだ。

まあ、それが契約の理由になる事は僕にも容易に想像する事が出来ただけど、彼の時は一筋縄ではいかなかった。

彼は家庭内暴力や周囲からの反応にストレスを感じていながら、それを無意識に抑え込んで、その抑え込んだ分を魔力に変換することで毎日の平静を保っていたんだよ。

「やあ、僕の名前はキュウベエ。突然だけど君、僕と契約して魔法少女になってよ!」

僕は後日、彼が小学校から帰っているところでコンタクトを取った。

「魔法少女？ なにそれ？」

彼はいろいろな情報に疎く、魔法少女と言うものを知らないどこ

るか、魔法すら知っていなかった。当然と言えば当然かもしれないね。だって彼は生れてからずっと虐げられてきたのだから。

「僕は君の願いをなんでも一つだけ叶えてあげられるよ！ その代わり、魔法少女になつて魔獣たちを退治してくれないかな？」

魔獣と言うと何か心当たりがあるようで、彼の肩が一瞬震えたのが分かった。もしかしたら彼自身魔獣と対峙した事があるのかも知れない。

「僕には願い事なんてありません。他をあたってください。」

「そんな事はないはずだよ？ 君だって、あんな自分に危害を加えるような親は嫌だろうし、学校にだって仲良くしたい人の一人や二人はいるんじゃないかな？」

僕のその言葉には絶対反応してくれるはずだと思っていたんだけど、彼は僕の言葉を聞かずにすたすたと歩き去って行ってしまった。いや、彼は僕の言葉を聞いたが、無意識に自己を守ったのだろう。それに反応してしまうと彼の心のバランスが崩れてしまっただろうからね。

それなら僕も根気よくお願いしようじゃないか。

彼の心のバランスが崩れて心そのものが崩壊したなら、その時には莫大なエネルギーが手に入るだろうしね。

キュウベエは奥村リツのあとを追った。

彼の日常は正に「壮絶」の二文字しかなかったね。

まず彼が家に帰ると待っているのは父親で、その手には空の酒びんだ。酒は人を狂わすとはいえ、この父親はもともと狂っているの

ではないかと思っただほどによっぱらっていた。

酒がないと言って小学生に酒を買わせ、その酒を飲んだかと思うと奥村リツを傷つけ始める。

本当にわけが分からないよ。僕には最初から感情がないけど、これは感情があつたとしても分からない気がするよ。

そして暴力をふるい疲れたらその次は押し入れに監禁ときた。

何日か一緒にいたけど、毎日毎日意味の分からない言い訳を言いながらそれを繰り返すんだ。本当に何がしたいんだろっね？ 感情を持った君たちになら分かるかい？

「奥村リツ、君はそんなにされて痛くないのかい？」

「痛いけど、僕の家はここしかないから、だから我慢するんだ。我慢するしかないんだ。」

彼と少し親しくなった頃、彼はそんな事を言っていたが、それこそわけが分からない。だって家出をしてやればいいだけの事じゃないのかい？

しかし彼はそうしなかった。

その理由はすぐに分かる事になった。

……奥村リツの母親は父親のDVによって死亡していた。

なぜ魔力を持っているわけでもないのに奥村リツと同じ事をされるのかと言うと、答えは簡単だ。奥村リツの理解者だったからだ。

奥村リツは家に帰っても父親がいない日はずっと母親の遺影の前で過ごしていた。きっと母親が自分を愛していた事を、家族を愛していたと錯覚しているんだろっね。だから奥村リツはその家を捨てられなかった。

しかし、それも強い感情には勝てなかったようだ……。

……ある日のこと

彼が家に帰るといつものように父親が空の酒瓶を持って待ち構えていた。

しかし今日は泥酔していない様子だ。どうやら朝早くから飲み続けてすぐに切らしてしまったようだ。それならこの様子も理解できる。

父親はいつも以上の憤怒の表情で奥村リツにやつあたりをし始める。

「母さん助けて。母さん！」

それは奥村リツが暴力を受けている最中に叫んだ言葉だ。

まったく、人からの暴力を逃れようと死人に助けを求めるなんて助けは来ないに決まっているじゃないか。どうして人間はこんな無意味な事が好きなのかな。

ほら、父親はそれが分かっているから暴力を振り続けているじゃないか。関心はしないけどね。

奥村リツはいつものようにその暴力を心に受け止めた。受け止め続けた。しかし、事は動いた。

父親が奥村リツを外し、母親の遺影を砕いたんだよ。

その瞬間、彼の様子が豹変した。僕はそこで初めて彼が彼の父親に刃向うところを見た。

だけど当時の彼が父親に敵うわけもないだろう。父親はすぐに彼を押し倒して、頭に向かって空の酒瓶を振り下ろした。

それは奥村リツが避けたことで側頭部にヒットした。しかし父親の暴力は止まらない。何度も何度も彼にその酒びんを叩きつける。彼の頭から血が吹いても殴り続ける。彼の頭がどんなになっても殴り続けた。

「こんな家っ……家族なんてっ……もっ、もっっ！……嫌だ！
家族なんていらぬ！」

彼がこちらを視認して助けを求めるように手を伸ばす。

「なるほど。それが君の願いなんだね。」

「こんな世界なんてっ……もうたくさんだっ！……父さんもっ、
母さんもっ、学校の友達もっ！ 何にもない世界に連れてっよ！」

彼が望むなら、僕は彼の願いを聞くだけだ。

それがどんな絶望を生むのかわかっていない方が、希望はできる
だけたくさん持っていた方がいいんだからね。

「インキュベータアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアア……！！！」

「……君の願いはエントロピーを凌駕した。さあ、解き放つてこの
状況を打開しなよ！」

彼はソウルジェムを握りしめ、その剣を持って父親を切り裂いた。

彼は僕以外の人との関係を、記憶をすべて失い、今も「魔法少女」
を続けている事だろう。

11、ミナトが魔法少女の力を授かる前の話をしよう。(後書き)

今回はSSです。

ミナトの剣についてと、日常の話です。

感想よろしくお願いします。

SS 魔法なんて経験で覚えていくしかない(前書き)

と思う。

剣の話ね！。

SS 魔法なんて経験で覚えていくしかない

「ミナト、あなたの剣は大きくて邪魔よ。もっと小ぶりなものはないの？」

ほむら先輩は今日の魔獣狩りを終えると、何の前触れもなくそう言った。

しかし自分には思い当たる節が見当たらなかった。

確かに毎回魔力を使って大振りを繰り返しているが、別に誰かを誤って切ってしまったりはもちろんしていないし、先輩たちの射線を遮ったりもしていなかったはずだ。

……まあでも、ほむら先輩の言う事はたいてい根拠があって正しい。自分には分からない何かがあるのかもしれない。

「僕の魔法は切る事自体をブーストさせますから、剣自体は召喚魔法で呼び出しただけのものです。どんなものでもいいですけど……」

これは自分が魔法少女になってしばらくしてからはずっと使ってきた（何回か破壊された事はあったが……）ものなのだ。変えろと言われてもこれ以外の剣はイメージしがたい。

「どうやら他の剣は出せないようね。ならこれを使いなさい。」

そう言って渡してきたのはただの棒だった。ちゃんと召喚された物の様でそれなりの装飾はしてあったが、どこからどう見ても剣ではない。何度も言うがただの棒だ。

「これでどう戦えと？」

「レーザーカッターを知っているかしら？」

「それくらいは。でもそれとこれとどういう関係が？」

「それを柄にしてレーザーの代わりに魔力で剣を形成しなさい。それなら邪魔にならないわ。」

魔力で剣身を形成……。イメージが上手くわかなかった。

「おお！ ビームサーベルだな！ ほむら、お前なかなかいいもの思いつくじゃんかよ。」

佐倉先輩がそう叫んだのにほむら先輩はちよつと顔を赤らめていた。それとビームサーベルというよりはマジックソードだが、その辺は今はとりあえずどうでもいい。

僕は剣身を形成するのに集中していた。

「ミナト、魔力弾を真つ直ぐ引き延ばす感覚だ。」

佐倉先輩のアドバイスに従ってみると、確かにそれらしきものは作る事が出来た。魔力弾を何発も撃つよりはよほど燃費もいい。それに加えて軽かった。

「的確なアドバイスありがとうございます。……佐倉先輩もやった事があるんですか？」

「ああ、昔挑戦したんだけどな。やっぱり槍の方がしっくりくるからやめたんだ。」

例の彼女の一軒の後だろうか……。まあ、それは聞かなくてもいい事である。

それにしても、この剣は軽すぎる気がする。確かに毎回魔力を使わなくても、普通の肉体強化だけでも衝撃波を出す程度は簡単にできてしまうだろう。

しかし逆にミスが多くなりそうな気がする。今までは力任せでなんとかあったが、これは剣道なりフェンシングなりやっていないと扱いつらいかもしれない。

「今まで通りで大丈夫よ。マミの射撃も、杏子の槍術も、私の弓矢も独学だから、あなたもがむしゃらに振るって経験を積みばいい。」
「そうよ。魔法少女なんてみんなそんなものよ。」

実際そうかもしれない。

巴先輩の射撃の腕はかなりのものだ。魔法による修正はあるかもしれないが、実際に狙撃屋ができるかもしれないくらい視力はいいし、状況判断能力も優れている。

しかしそんな彼女とて最初からそうだったわけではあるまい。
なぜ魔法少女になったのかはまだ聞いた事はないが、その前から射撃の訓練を受けていたなんて事はなかるう。

佐倉先輩の槍術もそうだ。

しかも彼女の場合は槍術と言っても、彼女が使うのは多節槍であって、武器すらもほとんどオリジナルなのだ。もちろん普通の槍術とは全然違うだろうし、多節槍を使う武術なんて聞いた事がない。
しかし彼女の最初の魔法はまた別のものだと言う。だからこれもまた経験から得られたものだと言う事だ。

確かに僕のあの戦闘スタイルだって誰かに教えてもらったわけではない。
はない。

「分かりました。じゃあしばらくこれで行ってみますね。」

僕の武器が変わる瞬間だった。

SS 魔法なんて経験で覚えていくしかない(後書き)

次回はもうひとつSS。

この話からミナトが先輩たちを名前で呼ぶようになります。

感想よろしくお願いします。

SS ミナトは仲間を得た。(前書き)

更新は月、水、金です。

ちなみに今週は部活の合宿なので、水曜分と金曜分は上げられないと思う。

勝手ですいません。

SS ミナトは仲間を得た。

鹿目先輩がこの街にやってきてからというもの、魔獣の出現率が一気に下がった。まあ、あんなに放出したんだから当然といえば当然ではあるのだが、それにしても少なくなっていた。

巴先輩とほむら先輩は高校に通っているし、鹿目先輩はお仕事があると言つて、昨日も早々にミーティングから外れていた。

魔獣狩りしかやることのない僕は、佐倉先輩と一緒にゲームセンターにきていた。

「今日はバイト休みだからな。久しぶりにゲームするぞー！」

佐倉先輩はそういいながらダンレボにコインを投入していた。

「佐倉先輩ってちゃんとアルバイトとかやってるんですね。」

「まあな。昔はやってなかったけど、もう暇で暇でしょうがなかったからさ。だったら働いてみようかなってさ。」

足でステップを踏みながら、画面に流れている矢印は見えていないようだが、佐倉先輩はそういうのに慣れてしている様子だった。

「ま、それもさやかがそうしろって言ったからだけだな。」

例の彼女は「さやか」というのか。

「あとさあ、その佐倉先輩ってのやめてくんないか？」

「な、なんでですか!？」

僕なりに敬意を表しているつもりだったのだが、何かまずかったのだろうか……？

「なんか先輩って言われるところ、背中がむず痒いんだよ。アタシなんてそんな先輩面できる程の人間じゃねえしさ。だから杏子でいいって。」

「それは僕が恥ずかしいんですけど……。」

先輩と呼んでいるのはその恥ずかしさをごまかす意味でもあるのだ。しかし、やっぱり先輩からそう言われたのならそうした方がいいのだろうか？

「ほら、言ってみろって。」

一曲終わらせた先輩がフェンスから乗り出して、僕が名前をいうのを待っている。フェンスで胸が押し上げられているのが見えてしまつて、言いくさをさらに上げている。

「き……。」

なんだか頭がくらくらして全てのことが遅く見える。

賑わっているはずの周りに音が消えて、エアコンから吐き出された風が若干、先輩の髪をなびかせているのがよくわかった。

そうして長いことぼうつとしていたような気がしていたが、実はそんなの一瞬で、僕はその言葉を口にした。

「……杏子。」

言った瞬間、先輩の手からぼろっと、ポッキーの箱が丸ごと落ちた。

しかし先輩はそれを見もせず空中でキャッチする。

「お、おう。今度からそう呼べよな。……な、なんだ今の？」

最後にボソリと何かを呟いたような気がした。

「何か変でしたか？」

「い、いや!? 別に……。」

気になる。しかし追求はやめておく。なんとなく自己防衛になる気がするし。

何か話題を変換しないといけないだろうかと、僕の眼は周りのものに移った。止まったのはダンレボだ。

「き、杏子……って、いつもそのゲームやってますよね？」

「敬語なしで頼む。めんどいから。……このゲームなかなか面白いんだぞ。身体を使ってストレス発散! みたいな?」

「そうなんですか……じゃなくて。そ、そうなんだ。」

それ以上は聞くことが見当たらず、僕はさ……杏子をちらちら見ることくらいしかできなくなってしまった。き、杏子もそれを察したのか、辺りを見回して僕と同じく話題を探していた。

「……そうだ! お前もこれやってみろよ。」

言葉とは裏腹に杏子の眼は鋭くこちらを睨みつけていて、もはや強制的に僕はそれをやらなければいけなくなった。

少しのため息とともに壇上に上がり、さ……杏子が自分のコインを一枚、機械に落とす。

するとさっきからずっと同じ映像を繰り返していた画面がパツと

光、メニュー画面が出てくる。

「初めてならまあこの辺かなあっと……。」

杏子は隣で足元の十字を器用に操作して、一つの曲のところまでピタリと止めた。

「え、でもこれ、難易度が12って……」

「大丈夫大丈夫。そんなの気にすんな。ゲーム作ったやつが勝手に難しいって思っただけだし。」

杏子は僕の意見はまったく考慮せずに決定のコマンドを押した。

12/15……初めてなのに。

そうこう思っているうちに曲が始まり、画面の上から矢印がたくさん落ちてくる。

いやいやいやいや！ 無理でしょ！ なんか一気に矢印4つも落ちてきてるしっ！ 僕には二本しか足はついていませんよっ！ ってか杏子手！？ 手使ってる！？ いいの！？ 足を使うゲームで手を使っていいの！？

そうして瞬く間にも矢印は落ちて行き、僕の足はもつれることはないが、杏子のようにかっこよくはいかなかった。

いや、むしろかっこ悪い。踊っているというより、踊らされてる。というかそもそも踊ってるのか？ というレベル。足を大きく上げて、画面の矢印を追って、なんとか叩けているくらいだ。

そうこうしているうちに曲が終了した。

「お前なかなか面白い踊り方するな。」

ニヤニヤと勝ち誇った眼で隅のベンチに座っている僕を見下す。面白いならいいんだけど……。

「杏子は初めてやったやつに勝って嬉しいのか？」

「いや、ただ必死に画面みてるお前は面白かったなと思ってさ。…

…それにしてもあれだな。もう普通に名前を呼んでくれるようになったな。」

「あ、本当だ。」

いつの間に思考中も名前になってたんだろう。しかも呼び捨てでため口。ダンレボをやっている約5分の間でこつも変わるのかと、僕は内心で驚いていた。

「ま、たぶんママ達は「さん」付けした方がいいと思うけどな。…

…まあ、これでようやく仲間っぽくなったな。」

そう言いながら右手を差し出した。

「よろしくなミナト。」

何だろうこの気持ち。

スズホ達の時には感じなかった感情だ。なんだかとても心が温かくなるようで……、とにかく嬉しかった。

彼女達が僕を受け入れてくれていている事に対して絶大な感謝の念が湧きおこってきて……。

僕がその手を握ろうとすると「エビー。」と言って避けるのだった。

「んなつ!?!」

「へへっ。バカ。ひっかかってやんの！」

感極まっていたのが一気に静まっていく。

「杏子よくもー！」

僕は新たな仲間を得た。

SS ミナトは仲間を得た。(後書き)

これってSSじゃなくて本編じゃね？W
短いつもりで書いてたら本編と同じくらいになったW
まあいいや。

次回は新キャラ出すつもり。

12、魔獣なんかとは比べ物にならない。(前書き)

ほむらとマミは学校！

今回は他にも増して超駄作になってると思う。
やっぱ疲れてんのかな？寝た方がいいのかも？

12、魔獣なんかとは比べ物にならない。

久しぶりに魔獣が現れたと思ったなら、その気配の元には魔獣とは明らかに違う存在がいた。スズホが知って絶望した「魔女」であり、鹿目まどかが教えてくれた「魔女」であるということは、すぐに分かった。

魔獣とは何もかもが違う。……いや、ある意味では同じだが、格が違う。魔女が人間だとしたら、魔獣なんて犬以下、むしろゴミのような存在だ。

「これはヤバい。」

その声に胎児のように身を丸めた魔女がその身体を動かし、サイの角のように大きい爪をもった手をぎよろりと覗かせると、それをこちらに向けて放った。

ミサイルのように勢いよく飛んできたそれを上半身だけ器用に反らして、ギリギリのところまで避ける。

「いきなり攻撃!? しかも魔獣なんかとは早さが……」

どうやら連続しての攻撃はないようだ。上半身を反らしたのを戻さずにそのまま一回転し、体勢を立て直す。

手だけを身体の外に出した状態で魔女は静止していた。どうやら指に当たるパーツを再生しているようで、すでに先端が突出している。

「まどかさん!」

「大丈夫!」

引き絞った弓に魔力を最大まで込め、魔力がこぼれてしまうほどに肥大した矢がどこからともなく飛来し、魔法の身体に命中した。瞬間、魔力が弾けてピンク色の光で周りが満たされる。

「やったか!？」

まどかさんの弓矢は一撃必殺のものだ。彼女の持つ無尽蔵の魔力をありったけ使ったものすごく重い一撃は魔獣はもちろん魔女すらもひとたまりもないほどの威力がある。

前の世界で最強の魔女ですら即死だったらしい。

「まだだよっ!」

まどかさんの掛け声で先ほどよりも強い魔力の波動を感じ、僕はその場から反射的に飛びのいていた。

まどかさんと杏子もそれに気づいたらしく、とっさに身構える。そして次の瞬間、僕たちの着ていた「魔法少女」の服が消え失せ、もとの普段着に戻ってしまった。

「まさか、魔法がキャンセルされたのか!？」

杏子の持つ槍や、僕の剣の柄、まどかさんの弓は実体を持っているので消えていないが、柄から放たれる魔力の剣の本体がそこから消え、強大な矢が失われていた。

「そんな!？」

危険すぎる。魔法を使えないとなると傷の手当てもできないし、肉体の強化も上手くいかないだろう。

爆煙が晴れて、さっきの魔女が姿を現した。

先ほどとは違い、二本足で地面に立っていて、半透明をしている。先ほどの硬質な指も変質し、まるでゲルのように透き通っていた。そしてその腕に一人の少女を抱えている。

「二人とも、あの子を奪還するの手伝って！」

まどかさんは弓をしまつて短剣の様なものを取り出して、生身のまま魔女に向かって行く。杏子が後ろからそれを追い抜かしてその槍で先に攻撃を加えた。

魔女の腕を切るようにして放たれた一撃は通ったが、ゲル化している魔女の身体には傷が一つとして付かない。

「どうすればいいんだ!? 魔力も実体剣も効かないんじゃないや為す術が……」

僕は魔力が使えないと言うのに魔力剣の柄だけを持ってその場に呆然としていた。

魔法が使えないと言う事は、僕が敵を切れないと言う事なのだ。今までは自分の最初の魔法だけでなんとかなっていたが、今日は訳が違つ。

「ミナト君危ない！」

まどかさんのその声にハツとして、飛来してきた固形物を切り伏せるつもりで魔力剣の柄を振るつたが、剣身は形成されていない。

落とすはずだったそれがすり抜けてきて、僕に付着しそうになつたところに一発の弾丸が飛んできて、それを弾き飛ばした。

「危なかったわね。」

その声はテレパシーによるものだった。恐らく結界の端ギリギリからの狙撃だ。今当てられたら死ぬところだったが、そこをちゃんと狙えるほむらさんは本当にさすがだ。

「ほむらちゃん！？ 学校は！？」

「授業なんか受けている場合じゃないわ。それにちょうど体育の授業で退屈していたのよ。」

ほむらさんはその手にデザートイーグルを下げていたが、それをすぐに楯の中に収め、そこからものすごく長い別の銃を取り出した。

「実弾兵器ならばいいのよね？ まさかこれが今さら役に立つとは思わなかったわ。」

次の瞬間魔法の身体が消し飛び、少女が解放された。そしていつの間にかほむらさんが僕の隣に立っていた。時間停止を使ったのだらう。

魔法が消し飛び、囚われていた少女が解放されてその場に膝をついた。一番近くにいた杏子がその体を支えて、その場から離れる。

どうやら魔法が消滅すると結界も崩壊していくようだ。だだっ広い丘陵の様な結界が消え、元の公園の姿を取り戻した。

「グリーンフシードは？」

「大丈夫、私が持っているわ。」

球状をしたグリーンフシードをまどかさんに渡し、とりあえず魔法退治は終了のようだった。

しかし……

「おい、お前大丈夫か？」

魔女に囚われていた女の子、どうみても僕と同年か年下の様だが、魔女に囚われて大丈夫だったんだらうか？

「おい、まどか！」

「大丈夫！」

まどかさんが彼女の頭に手を当て、なにやら魔法を使っているようだ、十分な説明を受けていない僕たちにはちんぷんかんぷんだった。

やがて女の子はまどかさんが魔法を使っている間に気を取り戻した。

「あ、あなた達が魔法少女？」

彼女が眼を覚まして、僕たちを見て、最初に言った言葉だった。

12、魔獣なんかとは比べ物にならない。(後書き)

ホントごめんなさい。

自分でも納得はいつてないんです。

もうちょっと上手く書けるはずなんだけど、今の体力ではこれが限界・・・

次回は不思議な少女について

・・・かもしれない。

ちよつと更新休みがちになるかも。

8月後半休んでなくて疲れてるんだと思う・・・。

13、不思議な少女は予言する。(前書き)

とりあえず一話完成!

パソコンが使えないから手書きして、それをiPod touch
で入力したからとつても時間がかかった。

新キャラの説明回って感じかなw

13、不思議な少女は予言する。

二体目の魔女に囚われていた少女は、不安も恐怖も、希望も喜びも感じることのできないような無表情で、自分を取り囲む少女達にそう言った。

なぜ知っているのか理解できないミナト達はどうすることもできず、それぞれで別々の反応をして、次のモーションがあるまで動けないでいた。

「そんな顔をしなくても、新たな敵とかではないから大丈夫よ。むしろ私はあなた達に有益かもしれない情報を持っているわ。」
「どういうこと!?!」

ほむらが情報という言葉に食いついたが、まどかがそのほむらを制止した。

「お話し、聞かせてもらえるかな？」
「もちろん。」

少しも顔を動かさず、無表情のまま淡々と即答した。

「私はそのためにここまで来たんだもの。」

午後五時を過ぎ、最早見滝原の魔法少女達の溜まり場となっている巴家にその主が帰ってくると、さっそく話が始められた。

「ここにくる経緯は念話でいたい伝わっているわ。……さて、さ

っそく聞かせてもらおうかしら、私達に有益かもしれない情報とやらを。」

ほむらの用意していた紅茶に口を付け、ママは少女の瞳を真っ直ぐに見た。しかし少女は特に動じることなく無表情を保ち続ける。

「まあ、まずは皆の自己紹介をしないとね。……私はバママ、この見滝原を何年も前から守り続けてる魔法少女よ。」

「佐倉杏子だ。担当は隣の街なんだがな、3年前からこっちでも活動してるんだ。」

「曉美ほむらよ。私もこの町には3年前から住んでいるわ。」

「私は鹿目まどか、つい最近ここに来たばかりなんだけど、よろしくね!」

「ミナト。僕も最近来たばかりの「勇者」だよ。」

五人が自己紹介をしている間もまったく興味を示した様子はなかった。まあ、さすがにミナトが「勇者」と名乗った時だけは、その眉がピクリと動いたような気はしたが……。

それも些細な変化だ。

「私の名前は「桃」。14歳、出身は大阪、一応普通の人間よ。」

「桃」と名乗ったその少女は、目の前に用意された紅茶に口を付け、再び口を開いた。

「私に普通と違うところがあるとすれば、タイムリープができたり、他人より少し身体が強いことね。」

ほむらがタイムリープの単語を聞いた瞬間に自分のソウルジェムを見てしまうが、最近時間を戻した記憶はまったくない。それに

魔法少女でもない「桃」がタイムリープなどできるわけがない。

「まあ、タイムリープは受動的だけど。」

「……。」

時間操作系の魔法少女は他にもいるとは思いが、タイムリープしたらそれはほむらにも知覚できるはずだった。

「どづいうことなの？」

「それはどうでもいいことよ。神様からチャンスをもたらつてると考えればいいもの。……それより私が伝えたい情報はそんなことじゃない。」

「桃」はそう言ってテーブルを立ち、カレンダーの前に行くところから約二週間後のある日付を指差した。

「この日に世界が滅ぶわ。とある魔女の手によって。」

その言葉を聞いた瞬間、ほむらが絶句し、まどかが息を呑み、マミと杏子とミナトは事の重大さも分からず、ほうけていた。しばらくの間、時が止まったかのような時間が流れた。

「信じられないと言った様子ね。でも本当の事よ。現に、私は何度も、何度も、何度も何度も、何度も何度も何度も何度も、数えきれなくらい多くの時間で、大勢の人が死に、自分もまた死んで来た。証拠はないけど、あなた達に信じてもらわないと困るわ。」

それはまどかにとって、かなりショックなことだった。

なぜならそれは、まどかの願いが完璧に叶えられていないということだったからだ。彼女の願いは「全ての魔女を生まれる前にこ

の世から消し去りたい。」「というものだ。そうして再編された世界で、魔女が現れただけでもイレギュラーだというのに、それがこの世界を滅ぼしてしまうなんて……。」

「まどか、大丈夫？」

「うん、平気だよほむらちゃん。ちょっと目眩がしただけ。」

まどかが頭を抑えているのをほむらが心配そうに見つめているが、マミは「桃」にさらに深く質問を続ける。

「どうしてここに現れるとわかったの？」

「私は魔力の流れが見えるの。それを辿ってくると、全ての流れがここに向かっていたから、ここしかあり得ないと思ったわ。」

淡々と答え続ける「桃」はすでに事の全てを知っている様子で、全ての質問に対して即答したが、大抵の説明は分かり易かった。

「桃」の今までの話からすると、彼女はタイムリープしてから魔力による加護を受けているのだろう。そのせいで魔力の流れが見えたり、身体能力が普通の人より強くなっているのだと思われた。

「それではあなたは私達に何を求めるの？」

「最強の魔女が現れるけど、手出しをしないで欲しいの。私が一人で狩るから。」

その言葉には総員、三度時を凍らされた。

魔法で強化されているとはいえ、普通の人間より少し強いだけの彼女が、世界を滅ぼすような魔女と一人で戦うと言っているのだ。絶句せざるを得ないだろう。

「あなた、それがどういふことなのか分かっているの？　死ぬ事になるわよ！？」

「どうせ死ぬのだから、変わらないわ。私は自分の手で明日を切り開きたくてここまで来たの。あなた達が協力してくれなくても私は一人で戦うわ。」

覚悟ができていたのではない。それはもはや諦めだ。

それが分かっている、喉元まで言葉がでかかっている、彼女の眼がそれをいうことを許さなかった。まるで獣のような眼だった。そして憎しみしかそこにはこもっていない。

「分かったらあなた達はそこでゆっくり紅茶でも飲んで、嵐が過ぎるのを待っていなさい。」

そう言つて「桃」は巴家のベランダから飛び降りた。

13、不思議な少女は予言する。(後書き)

今までと違う基準で書いてるから多いのか少ないのかよく分からな
いけど、多分少なかつたんじゃないかと思います。

ごめんなさい。

ノート一枚分+ です。

次回は3体目の魔女が出現します。

「桃」の実力が明らかになんか？

ちなみに「桃」の読み方はカツコ モモですよ。

感想よろしくお願いします。

14、不思議な少女は戦いたい。(前書き)

今回もiPod touchから…。

書き写す作業が終わったの二時だよ…眠。

感想待っています。

14、不思議な少女は戦いたい。

「桃」は魔力の流れが変化したことに気づき、その集束点に急行した。

もちろん魔女の相手をするのが分かっているので、実体兵器を装備している。大量の弾倉を身体に巻きつけ、暴力団から奪取したサブマシンガンをストックケースに、シグザウエルP230を腰のホルダーに持ち、他人の家の屋根を伝って見滝原の管轄ぎりぎりのところをめざす。

屋根を跳躍する「桃」は魔法少女にも劣らないほどの機敏な動きを見せ、どんどん集束点に近づいていった。

「うっね……。」

ポケットに入れていた折りたたみ式の大型ナイフを慣れた手つきで開くと、それで目の前の空間を切り裂き、結界への入り口を強制的に開かせる。

躊躇いもなく魔女の結界に足を踏み入れ、次にその最深部をめざす。

道中にいた使い魔たちが人間が入って来たことに気づいてよって来たが、「桃」はそれをナイフで軽く斬り伏せて、どんどん奥へと近づいて行く。

結界の中はまるでコンピューターのように数字の羅列がそこら中を駆け巡り、クーリングファンの動く音と似た、低周波の音が絶えず響いていた。

「主はどっ？」

ほぼ形のない影のような使い魔に拳銃を向けてそう問う。

「答えなさいっ！」

しかし言葉とは裏腹に答えを聞く間もなく引き金を絞る。

どうせ答えなんて帰ってこないのも知っているし、あんまりのんびりしていると結界に呑み込まれてしまう。

そうやって結界の最深部を手探りで探していると、それらしきところへの入り口を発見した。

金属質の丸い扉の中央に「Enter」と書かれていて、その上には魔女の名前がきつちりと刻印されている。

ウィルス・S・C・ナスタリア

それがこの主の名前……、というわけだが、どうやらその使い魔たちはどうしても中には入れさせないつもりらしい。

扉の前に影の様なデータの使い魔がたくさん集まり、そこだけが黒く塗りつぶされていた。

「消えたいものから前にでなさい。」

スーツケースから出したサブマシンガンを構え、言葉が伝わるとも思えない使い魔たちにそう言ったと同時に引き金を弾いた。乱射された弾丸は目の前の使い魔たちを蹴散らし、ウィルスの部屋まで一直線に道を作った。

道の両端にいる使い魔たちはすっかり彼女のことを恐れ、その場でひれ伏している。

その道を扉まで歩き、それを開く前に「桃」が一度だけ振り返った。

「ありがとう。」

まったく感情のこもっていない言葉とともに、手榴弾が使い魔たちに降り注いだ。

……しかし、魔女の結界とは恐ろしい。扉を閉めると爆音も爆風も部屋に入ってこなくなるのだから。

その代わりに部屋の中には魔女という恐るべき存在が待ち構えているわけだが……。

「さあ、始めましょうか……」

……本当の戦いを。

ウィルスという魔女は大きくて混沌としていて、とにかく見るにグロテスクな生命体だった。

本体と思われる黒い「影」の部分は魔獣やさつき使いの魔たちと同じ様に見えるが、大きな本体から細長い触手の様なものがいたるところから突き出し、その何本かが地面に突き刺さり、その大きな身体をクモの様に自立させている。

さらに上部にはカブトムシやカニの様な色様々な甲殻や、柔らかそうな毛皮に覆われていて、キメラの様なことになっていた。

「先制攻撃をしかける！」

スーツケースからデザートイーグルを二丁取り出し、ウィルスに向けて弾倉がなくなるまで撃った。

しかし弾丸は甲殻に弾かれるか、影をすり抜けるかで、まったく

くダメージは通っていない。

反撃に備えて一気に跳躍し、場所を移動すると、ウィルスの触手が伸び、「桃」のいた空間を叩き潰す。

「これならどう?」

「桃」は部屋の壁を走りながら、手榴弾の安全ピンを口で抜き、ウィルスの甲殻に向かって投げ、自分は爆風を受けないようにスリッケースを盾にして身を守る。

魔女、ウィルスは爆風に吞まれ、その圧力に一気に伏した。

しかし爆風が晴れるとウィルスの攻撃は一気に激しくなる。ガムシヤラに触手を振るい「桃」を捕まえようとすが、彼女は冷静で、全ての攻撃を避けきつて再び地面に足を付けた。

そしてそのままウィルスの足元を一気に駆け抜け、下から手榴弾を投げ入れる。そして足元から出ると即座に振り向き、サブマシンガンでウィルスに向けて乱射する。

弾丸の一つが手榴弾に当たり、手榴弾がウィルスの影の中で盛大に爆発した。

「これで終わり。」

内部からの圧力に耐えきれなかったウィルスの甲殻が鍋の蓋の様に吹き飛び、本体は粉々に破裂した。

グリーンシード。

魔法少女達がそう呼ぶ黒色の宝石が「桃」の手の中に収まると、その結界が消えていった。

「遅かったわね。」

魔女との戦闘の気配から駆けつけた魔法少女達は揃って「信じられない。」といったような顔をして、魔女の結界が崩れるのを見ていた。

「これ、あげるわ。私には必要ないから。」

そう言っただけでほむらに投げ渡されたのはウィルスのグリーンフシードだ。

「……あなたは何かしたいのかしら？」

「私は戦いたいですよ。」

相変わらずの無表情で、「桃」はほむらに即答した。

14、不思議な少女は戦いたい。(後書き)

次回はほむらと「桃」が衝突します。

あと、感想で言われたことについてですが…
このまま話を進めて、どこかに折り込んでみます。

15、闘って分かり合いつつとまで来る。(前書き)

今回はこの前までの2・5倍の長さを書き写さなくちゃいけなかったから、真面目に疲れた。

感想よろです。

15、闘って分かり合つこともできる。

ほむらはここ3年間では珍しく、自室で一人悩んでいた。

……ここ最近は何かがおかしい。

まず事の始まりは彼女の盾の中の砂時計が再び動き始めた事だった。

彼女が何かの魔法を使ったわけではない。

そもそもこの砂時計を再び動かすには、彼女が時間逆行を行う以外方法はないのだ。

しかしほむらには時間を戻した記憶がない。

つまり再び動き出した理由は、他の魔法少女が時間を戻したという事以外にあり得るはずがないのだ。しかしそれならばその魔法少女がこの場所に必ず現れるはずだ。

だが実際はミナトという男の「魔法少女」と、「桃」という常識から外れた「一般人」しか現れていない。

もう一つ考えられる理由は、それこそイレギュラーだが、ほむら自身が魔法を使ったが、なんらかのミスで記憶が引き継がれなかったということが考えられる。

この説を信じたくはないが、怖い事にこの説のほうがりかなっている……。

ミナトという男の「魔法少女」が現れた事もイレギュラーといえればイレギュラーだが、それは今はどうでもいい事だ。

そう、その後に再び「魔女」が現れた事に比べれば些細な事である。

男子の友達ができたと素直に喜ばしいのだから。

しかし問題はやはり魔女の存在だ。

なぜこの世界にいきなり魔女が現れてしまったのか、万能の神となつたまどかでさえその理由を説明できずにいる。

これは本当にイレギュラー中のイレギュラーだ。

同じ時間を繰り返して世界線を集めてしまうと因果が大きくなり、時空の中で特異点となってしまうことは、3年前の繰り返し最後の分かつた事だ。

それがまた見滝原で起こっているということなのだろうか……？
しかし、その程度の事ならまどかが分からないはずがない。

魔女のことについては、私で予想できる理由はそれくらいしか見当たらなかった。

次に「桃」と名乗る「一般人」もイレギュラーだろう。

魔法少女でもないのに時間の逆行を知覚でき、魔法で少しばかり強化されているとはいえ、生身で魔女と戦えるほどの戦闘能力を持っている。

その力はほむらにも劣らないだろう。

そしてほむらには「桃」について一つ思うことがあった。彼女の性格についてだ。

一人でなんでもやってやる。誰にも頼らない。絶対に負けたくない。しかしその信念以外の全てを諦めている。

そういったところが3年前の自分自身と重なって、どうしても見ていられないのだ。

彼女は本当の自分を心の奥に封印して、どうしても何もできないということから目を背け、もがき苦しんでいるんだ。

これはほむらの勝手な思い込みだが、彼女自身もそれは分かっているながら、どうしてもそうとしか思えないのだった。

……そう思うと動かすにはいられない。

今すぐにも、彼女の本当の思いを確かめて、救えるものなら救おう。

まどかが自分を救ってくれたように、今度は私が「桃」を救う

のだ。

そう決意して、ほむらはその場で変身し、次の瞬間には部屋が
らいなくなっていた。

「何をしに来たの？」

二人の少女が対峙していた。片方は紫色のダイヤが左手に輝く
魔法少女。もう片方は黒光りする拳銃を右手に携えた異常な少女。

二人の容姿は似てはいなかったが、公園の灯りに照らされてい
るシルエットはまったく同じ形をしていた。

138

「用がないなら帰って、私は暇ではないの。」

「あなたは何がしたいのかしら？」

昼に聞いた質問とまったく同じ質問をされ、「桃」は一瞬だが
言葉を失った。

「……答えは変わらないわ。戦いたいただけよ。」

「何と？」

ほむらは今度は食い下がった。

「……もちろん、最悪の魔女とに決まっているわ。」

「その時も一人でやるつもりなの？ 生身の人間であるあなたが？」

「桃」は黙っている。

「人は一人では何もできないわ。」

ほむらは3年前にそれを学んだ。それをどうか、「桃」にも分かかって欲しかった。

一人でやったって何も変わらない。

いろんな人と協力する関係を作らない限り、大きな敵とは簡単には倒せないようにできているのだ。

「だからあなたも協力して……っ!？」

「うるさい!」

バン!と放たれた弾丸を、ほむらは時間停止を使ってギリギリのところまで避けた。

「お願い、話を聞いて!」

「うるさいって言ってるでしょっ!」

今度は二発立て続けに放たれた弾丸を、
またも時間停止を駆使して避ける。

「あなたを救いたいだけなの！」

「救いなんかいらない！ 私は私の力だけで未来を切り開く！」

時間停止で何度も位置を移動するほむらに的確に照準を合わせ、弾倉がなくなっても何度でも撃ち続ける彼女は、もうすっかり感情的になっていて、話をする隙は見つからない。

しかし……。

ほむらは次の時間停止で一気に接近し、彼女の銃をはたき落として、腕を後ろに回して捕らえた。

「さあ、話をしま……つな!？」

時間停止をといた瞬間に「桃」は合気道の技を使って拘束から逃れ、そのまま後ろにいたほむらを投げてしまう。

予想外だったために背中を強く打ちつけ、肺の中身が一気に吐

き出される。

そのほむらの左手のあたりで弾丸の弾ける音がして、つい先ほどまでほむらの左手……いや、ほむらのソウルジェムのあった地面が抉れていた。

「今度は当てる！」

ほむらは時間停止を使って、一気にその場から離れて体勢を立て直す。

しかし「桃」はほむらに言葉を発することすら許さず、次々とほむらの現れた場所に弾丸を打ち込む。

ほむらは次の時間停止で、一旦遊具の中に隠れた。

「どこ行った!?!」

「桃」の自分を探す声が聞こえ、ほむらはビクリと身体を震わせた。

彼女ともまた分かり合えずにいるしかないのか？

そんなのはもう絶対に嫌だ。

そんな葛藤がほむらの中で渦巻き、やがて一つの答えをむりやり導き出した。

彼女と闘う。

闘って、四肢を破壊してでも彼女と話してわかり合おう。

それが不器用なほむらの出した答えだった。

「そこね！」

「桃」に見つかった。

しかし、ほむらの覚悟はもう決まっている。

もう迷わない……。

「そうよ。ここにいるわ。」

「……余裕そうね。逃げてばかりだったくせに！」

ほむらは遊具の陰から出て、再び「桃」と対峙した。

そして一度だけ深く呼吸をする。

「勝負をしましょう。ルールは戦闘不能になった方の負け。制限は拳銃の弾倉が尽きるまでよ！」

「……その勝負乗ったわ。……先制は私がもらうわ！」

次の瞬間、腰の両側からベレッタを2丁引き抜き、発砲する。
しかしほむらは時間を停止させて瞬間移動する。さらにもう一度時間を停止させると、今度は「桃」の両手のベレッタと両太ももに向けて発砲する。

だが、これだけで終わるような戦いではない。

「桃」は時間停止が終わった瞬間に四肢の位置を微妙にずらし、ほむらの放った弾丸を紙一重でかわしてみせる。

それを見たほむらは、次の瞬間で一気に至近距離まで近づいて、発砲する。

しかしそれを先読みしたような動きで「桃」がほむらの腕を自分の腕で外側に弾いて、弾丸は公園の遊具に跳弾してどこかに消える。

さらに、ほむらの腕が引き戻されるより先に「桃」の腕が引き戻され、そこから放たれた弾丸は空を切った。

次の瞬間にほむらから放たれた弾丸を振り向きざまに撃った弾丸で跳弾させて弾道を変え、さらに自分の弾の弾道をもう一つの弾丸で修正して、ほむらの左手を狙う。

ほむらは左手の位置を変えることで死は免れたが、その代わりに弾丸は彼女の脇腹を少しだけ抉っていった。

そして次に、ほむらは時間停止を駆使して多角的な銃撃を彼女に浴びせてやった。

しかし「桃」はその全てを弾丸で撃ち落としてみせる。

しばらくの間、ほむらの攻撃を「桃」が弾き落とす戦闘が続いたが、「桃」も負けてはいない。

ほむらが接近した瞬間、「桃」はほむらの腕を掴んで投げ飛ばし、そのほむらに向けて発砲する。もちろん彼女もほむらが瞬間移動するのは予測済みだ。

「桃」は次の瞬間にほむらが現れるであろう空間に向けて弾丸を曲射した。

「桃」の予想通りのところに現れたほむらはギリギリのところを避けるが、首の真横を通った弾丸の風圧で神経が圧迫され、身体が麻痺し、その場に倒れた。

「しまった……。」

なんとか身体を動かそうともがくほむらだが、身体はそれに応えてくれない。

しかし、彼女の知識が正しければ彼女の拳銃はさっきの一発で最後だったはずだ。

しかしそこに余裕の表情を浮かべた「桃」が歩み寄って来て、ほむらの左手を取って彼女の顔の前でベレッタをソウルジェムに押し付ける。

「……ック。」

「これで終わりよ。次回は邪魔しないでね。」

勝負に負けたんだ。

そう、死を覚悟したほむらだったが、「桃」が引き金を引いた瞬間、カチツという、発砲の音よりもとても弱く情けない音と共にベレッタのスライドが開き、「桃」も弾切れであることを確認した。

「「引き分けね……。」」

ほむらと「桃」は互いに緊張が切れて、溜めていた息を吐き出した。

15、闘って分かり合うこともできる。(後書き)

なんだろう…。

もつと戦闘中に言葉を挟んだ方が良かったかな？

対人戦闘書くの好きだからつついつい描写に走ったけど…。

次回は四体目の魔女です。

ちなみに知ってるとは思いますが、杏子の妹はモモという名前らしいですよw

次回は近くて水曜日更新。

16、本当は嘘ばかり。(前書き)

今回は意味わからん描写沢山ですけど、仕様です。

…んなわけない。

幻覚ってことを意識したらこうなった。

感想よろしく。

16、本当は嘘ばかり。

四体目の魔女が現れたのを察知して、杏子は結界の張られている現場へと急いだ。

三体目の時は全員が揃うのを待つてから出撃していたので、その間に「桃」が魔女を倒してしまった。

別に「桃」と敵対しているつもりはなかったが、やはり魔法で強化されているとはいえ魔法少女でない「桃」に任せるわけにはいかないだろう。

だからこれからは結界の近くににいるものから先に戦うということになったわけだ。

「……またか。」

杏子は今まさに結界の入り口を暴こうとしている「桃」を見て、そう呟いた。

「まったく、自分の命は大切にしろよな。……まあ、下がってるといっても無駄なのはほむらから聞いたけどな。」

「そう、なら邪魔はしないで。」

杏子の話も全く聞き入れずに「桃」はナイフで空間に結界への入り口を見出す。

「待てって。一般人を守るのがアタシ達魔法少女の義務なんだ。だからちよつとくらい守らせろよ。」

武装を解除している今、攻撃をされると杏子はひとたまりもないだろう。しかし杏子はそれを分かった上であえて武器を出さず、

それを誠意として「桃」に示した。

「……いいわ。5分待つ。」

「桃」は警戒を解き、近くの手頃な高さの物に腰掛けた。

「フンツ。5分もあれば充分さ！」

と言いながら即座に変身し、杏子は結界の中へ入っていった。

「なんだここ？」

結界の中は全面鏡張りの大きな部屋だった。

一体目のときはどうか知らないが、二体目や三体目の時のような最深部へと続く道はない。それに使い魔の様に比較的弱い気配というのもまったく感じられなかった。

そもそもこの結界自体に魔力をそれほど感じられず、何もないそこにあるだけの空間だった。

「杏子！遅くなってゴメン……ってなんだこれ!？」

ミナトが変身した姿で現れ、その後からほむらとマミも現れた。

「鏡だけでできた結界なんて……いかにも趣味の悪い魔女が作りそうなものね。」

「ミナト、危ないから下を見てはダメよ。」

「え？なんでですか？」

見るなど言われれば見たくなくなる。それが人間の性質である。

ミナトが下を向いて、瞬間他の3人がスカートを抑えたが、それでも何か見えてしまったのか、ミナトの顔がみるみる朱に染まっ
ていく。

「見んなっていつてんだろっがボケナス！」

杏子の槍の柄の方がミナトのアゴにクリーンヒットし、ミナトは宙を舞って気絶した。

「え、ちょ、こんなとこで気絶すんなって！」

杏子はミナトの首根っこを掴み上げて往復ビンタを繰り返した。

「マズい！ 魔女が来るわ！」

「お、おい、ミナト！ 起きろ！ 起きろって！」

杏子が必死に叩き起こそうとするが、ミナトの意識はビンタが炸裂するたびにより深く沈んでいくような気さえするほどに戻ってこない。

「くそ、ちょっとミナトを外に置いて来る。」

「ええ、そうして頂戴。」

杏子はまだ近くにあった入り口から外に出て、ミナトをその辺に寝かせてから申し訳程度ではあるが幻覚魔法で痛みを軽減させてやった。

そうしてミナトの顔が苦痛から安らぎに変わったのを感じると、さっさと結界に向き直る。

「言っとくけど、お前が悪いんだからな。」

杏子はもう一度振り返り、ミナトの顔に自分の顔を近づけた。

「この戦いが終わったらちゃんと言葉でも伝えるからいいよな。」

そう自分に言い訳をして、杏子はミナトの頬に口づけを施した。

「……………どうなってんだ？」

結界の中へと戻った杏子はその目を疑っていた。

てつきりマミとほむらの砲撃コンビで魔女とドンパチをやっていると思っていたのだが、杏子の視界に魔女はいなくて、二人はどいうわけか、中央の辺りで横たわっていた。

近寄って見ると、二人は苦痛に顔を歪めており、しかし目立たず外傷もなく、そこで寝ていた。

「おい、お前ら、寝てる場合じゃ……………」

ふと気がつくと、杏子の目の前に鏡があり、そこには自分と、自分を囲む様に書かれた魔女の名前があった。

アバター・K・H・インヴィジブル

「まさかこいつの攻撃は!?!」

思い当たることがあり、杏子は二人のソウルジェムを見る。

二人のソウルジェムは見る間にも淀んできていて、普通ならこの辺でグリーンフィードを当ててやらないと危ないほどになっていた。

「やっぱり精神攻撃か。」

鏡の中の杏子の顔はゆがんでいて、ケタケタと愉快そうに笑っていた。

「おい、ほむら！ 起きろ！」

自分の幻覚魔法で魔女の方の魔法を打ち消してやる。

するとほむらはパチリと目を覚まして、少し寝覚めは悪そうだったが、精神攻撃でやつれたりはしていない様だった。

「いいか、ほむら。アタシの魔法じゃあ助けるのは一人が精一杯だ。マミを連れて結界から出てくれ。」

「……分かったわ。無理はしない様にね。」

マミの手を引き寄せると、次の瞬間ほむらとマミはどこかにいってしまった。

「さあて、始めるとしますか。」

この髪飾りを抜いたのはいつが最後だったか……。もう何年も使っていないというのに、それはいつもの槍よりも手に馴染んでいた。やっぱりこの魔法が杏子の本質といったわけだ。

それを胸の前で握りしめ、魔法が発動したとたんにソウルジェムから赤色の光が溢れ出し、魔女部屋全体が光に満たされた。

「どこだ。てめえの本体はどこにいる！」

魔女が杏子を飲み込もうとする魔法と、杏子が魔女をおびき出そうとする魔法が交錯し、互いに打ち消しあったり、あるいは的外したりしている。

魔女なんて得体のしれないものに幻覚による精神攻撃なんて通用するのとは思いはしたが、こいつが物理攻撃の効く様なやつではないことは直感的にわかった。

鏡の中の杏子は相変わらずケタケタと笑っている。

「なあ、てめえこっちこいよ。」

部屋の中の鏡が全て杏子に向き、なす術のない自分をあざ笑っていた。

しかしこれでは本当になにもしようがない。

境界は固定されているから逃げる事なんてできないと思うが、こっちだって逃げることも倒すことも出来ない。

ふと鏡の中の杏子が嘲笑を辞め、口を開いた。

「ジャア、オマエガコッチコイヨ。」

瞬間、杏子の立っていた床が消え、杏子はしたから伸びてきた手によって水の底へと引きずり込まれた。

その水に当たると身体が焼ける様に熱くなる。

そして身体全体が火傷の様に荒れ始めて、果てにはそのか細い骨が見え始めた。

それは濃硫酸のプールだ。目すら開けられず、杏子は骨へと成り果てながら魔女に足をつかまれてどンドン底へと沈んでいく。

「だけどそんなベタな幻覚効かねえな！ さあ、姿を表しやがれ！」

足で魔女の手を引き上げ、槍の柄を使って弾き飛ばす。

魔女の魔法を打ち破り鏡の部屋に戻ると、杏子は魔女を睨みつけた。しかしその魔女を見た瞬間に杏子は驚愕した。

「さ、さやか……。」

そう、その魔女が3年前に円環の理に導かれてこの世からいなくなつた、美樹さやかの容姿をしていたからだ。

しかもこれはおそらく幻覚ではない。魔女が実体化する時に杏子の記憶から読み取つたのだろう。

彼女が最も戦いたくない人物を。

「タタカエヨ……。」

「ちくしょう、さやかの真似すんじゃねえ！」

多節槍を長く伸ばし、さやかの姿をした魔女に突き刺した。

しかしそれは幻影だ。その姿が一瞬のうちに消え、今度は杏子の後ろに姿を現す。

伸びた槍が戻るのより早く魔女が薙ぎ払いをかけて、杏子の首が切り取られた。

もちろんそれも幻影だが。

「あんま調子乗ってんじゃねえぞ！」

魔女の背中から刺突を仕掛けるが、予想以上の反応速度で退けられる。

そこから返された剣が杏子の身体を裂くかと思う直前に杏子の槍が二本に増えて、自身の身を守った。

「アタシだつて成長してんだよ！」

二本の槍を器用に回し、魔女の剣を押し返し、さらに乱れ突きを繰り出した。

もともと槍というものは片手で扱うものではない。しかし杏子は槍を剣の様に振り回し、どんどん魔女を追い詰めていく。

だけどそれも幻覚だ。杏子は二槍流なんか習得していない。

不意に今まで前にいたはずの魔女が消え、次の瞬間杏子の胸から剣が突き出してきた。

……だけどこれも幻覚。本当は剣なんか刺さっていないし、後ろに魔女も居ない。

何もかも幻覚で、ただこの胸の痛みだけが本物だった。

それは鏡の中の杏子が刺されたところと同じところで、魔女に相打ちさせられたのだと一瞬で気がついた。

「へへ。どうやらアタシの負けらしいな。」

杏子は胸からの痛みに耐えながら必死で魔女を逃がさない様にそこに刺し止めておく。

「桃」！ 鏡を破壊しろ！」

結界の入り口で様子を見ていた「桃」がそれに反応してこっちに手榴弾を投げてきた。

しかしそれを跳ね返す手段は杏子には無い。

手榴弾が杏子と鏡を繋ぐ槍の上で跳ね、爆薬が炸裂した。

爆風が消える頃には結界がその形を失い、消えていく。結界のあったところにはグリーンフィールドと杏子が倒れていた。

「残念だったな。こんくらいじゃアタシは死なないぜ！」

しかし言葉とは裏腹に杏子はその口から血反吐を吐き、胸の痛みに苦しんでいた。

「あなたは戦線離脱ね。」

「桃」は一人邪魔者を消すことに成功した。

16、本当は嘘ばかり。(後書き)

どうだったでしょうか？

たぶん読みにくかったのでは？

次回はミナトの夢の中です。

杏子にかけられた幻覚魔法で天国へ!？

17、円環の理に導かれるのも悪くない。(前書き)

一回全部書き終えたあとにブラウザの更新ボタンを誤って押してしまい、全部消えてしまった時の絶望感……。マジで魔女化するかと思ったわw

感想よろしく!

17、円環の理に導かれるのも悪くない。

ミナトが微弱な結果のできた所に辿り着くと、すでに入り口は開いていて、「桃」がその前で自分のスーツケースに座りながら腕時計を眺めていた。

もうすでに杏子の気配は結界の中にあっただが、どうやらまだ戦闘は始まっていないようだ。

「あら、遅かったわね。佐倉杏子なら中にいるわよ。」

「……分かってる。」

どうやら中に入るところを見ているようで、時計を見ていたのはおそらく介入するタイミングを図っていたのだろう。

「あと270秒くらいで介入するわ。」

「そんなけありや充分。」

「桃」にそんな強がりを言ってしまったが、正直どうか分からないので、さっさと結界の中へと入った。

「杏子！遅くなってゴメン……」

入った途端に中が少し眩しい事に気づき、思わず目を細める。そこには全面鏡張りの部屋があり、杏子の姿がいろんなところに反射していた。

「……なんだこれ!？」

ミナトが単純に驚いていると、後ろからマミとほむらが入って

きた。

「鏡だけでできた結界なんて……いかにも趣味の悪い魔女が作りそ
うなものね。」

それでは全ての魔女が趣味が悪いみたいに聞こえる。まあ、実
際に趣味の良い魔女がいる事は前回までからなさそうだと思うが…
…。

「ミナト、危ないから下を見てはダメよ。」

「え？　なんでですか？」

下に何かあるのだろうか、無意識に下を向いてしまう。しか
しそこには相変わらず鏡があるだけで、なにが危険なのかと思った
瞬間、3人の少女達がいつせいにパツとスカートを押さえ込んだ。
そのせいで意識していなかった色とりどりの布がなんなのか、
一気に分かってしまった。

まさか、あ、あれは、パツ、パツ、パパツ、パツ、パンツとい
うものではないか！？

今はスカートに押さえられていて見えないが、先ほど見えた黒
や黄色や桃色の物体はパンツに間違いない。三者三様のそれがスカ
ートの奥からチラチラと見え隠れしているのが、今度は鮮明に見え
てしまい、ミナトの顔が一気に朱くなった。

「見んなくていつてんだろうがポケナス！」

瞬間、杏子の槍の柄がミナトの顎にクリーンヒットし、ミナト
は三秒ほど対空した後頭から真つ逆さまに落ち、頭を強打した。

……暗い。

僕は次に目が覚めた空間にそんな感想を抱きながら、「死んだのか？」と思っていた。

だけどそれにしては要因が足りなくて、だから僕は気絶して夢を見ているんだと思うことにした。

「夢とは少し違うんだけどね。」

自分の考えを否定された!?

しかしそんなことよりも驚く要素がそこにはあった。

昔聞いたことがある優しいげな声の方向に身体を向けると、思った通りの人物がそこにいた。

数年前とまったく変わらない。女の子にしては少し黒い肌やポニーテールに眼鏡、そしてなにより印象的だった長いワンドと大きな本を両手に持った魔法少女がそこにいた。

「スズホ……?」

「やあ、久しぶりだね。何年ぶりかな? 元気にしていたかい、ミナト君?」

スズホの隣には、数年前に始めてあった時と同じ顔を半分仮面で隠した魔法少女、ミズキが……

そこで僕の思考は中断された。

ミズキと呼んでいいのだろうか? 僕にとって彼女はミズキであり、それ以外の何者でもないが、しかし、ミズキという名前はも

しかしたら彼女のものではないかもしれないのだ。というか本当の名前があったとしても、ミズキはその名前で呼んで喜んでくれるのだろうか……

「ミナト。そんなに考え込まなくてもいいよ。」

「……え？」

「もう悩まなくていい。私は私だったから。」

ミズキは自分の存在を確かめるかのように胸に手を置いた。

「江西ミズキだったり、桐野カズコだったりしたけど、結局どれも全部同じ私だったの。嘘だっけつき通せば本当になるっていうけど、本当だね。もうすでにこの私が素の私になってたから。だから江西ミズキも桐野カズコも全部私だったのさ。」

彼女はそう言って笑って見せたが、僕はそれを素直に受け止められずにいた。

だってそうだろう？ これは気絶した僕が見ている夢の中なんだ。まったくなんて自己満足。

確かに今まで何度となく彼女達が幸福であったことを祈った。

だけどそれを押し付けるのはあんまりだ。

夢の中で補完して、現実で楽をしようとしても？

「おい、君！ 僕の話の聞いていなかったのかい？ これは現実だ。」

スズホの言葉なのか、それとも自分の頭が無意識に考えているのか、自分ではまるで分からなかった。

「いいかい、ここは佐倉杏子の幻覚魔法によって作られた空間だ。君の頭の中ではない。そして同時に佐倉杏子が意識的に作った空間でもない。ここは円環の理が佐倉杏子の幻覚魔法を溶媒にして作った空間だ。」

円環の理が……？

しかし次の思考をする間もなくスズホは話を進める。

「君に円環の理について教えてやろう。」

円環の理……僕が二人を失って以来ずっと憎み続け、そして怖れて来たもの。仲間を失うのが嫌だ。そう思っても残酷に魔法少女を導いていく。

「その考え方は間違っているよ。まあ、そうであると植え付けてしまったのは他でもないこの僕なわけだが。今から話すことを聞いて考えを改めてくれたまえ。」

やっとなんとなく、この空間が僕のものではないことが分かったような気がした。

別にスズホの説明を理解したわけではない。ただ、スズホとミズキがあまりに自然体であつたからである。

「円環の理とは、本来ソウルジエムが完全に濁ると魔女になつてしまふ魔法少女への唯一の救済なのだよ。なぜ救済になるか君に分かるかい？」

僕には分からない。

そもそも魔法少女が魔女になつてしまふというのは初耳だった。

「ま、答は分かっているよ。……そもそも魔力というのは人の感情と深く関わっている。感情が動くことによって魔力が生成されるのだけど……、ここまで理解できているかい？」

そう、それはいつかキュウベエから聞いたことがあった。

彼らは地球外生命体で、エネルギー目当てでこの星にきた。注目したのは感情のエネルギーで、魔力というものだ。

魔力は人間が生活している上で際限なく放出される。まあ、それは当然だ。人間生きている限り感情がある。

人間の放出する魔力というエネルギーは、熱力学の第三法則に縛られておらず、一生の間で消費するエネルギーよりもはるかに上回っているため価値があるのだとか。

「どうやら良さそうだね。放出される魔力の大きさは感情の変動率に比例することまでは分かるだろう。だから極端なプラスの感情である「希望」と、極端なマイナスの感情である「絶望」の相転移は通常よりはるかに強い魔力を放つ。」

キュウベエも確かにそんなことを言っていた気がする。

しかし、それを妨げるのが円環の理だという。

だから本来一番効率がいいはずの「希望と絶望の相転移」での魔力を採取できないのは残念だと言っていた。

「前の世界では円環の理がなかったため、その相転移が実現していた。だが、それは膨大な魔力を放出し、ソウルジェムのキャパシテイを一気に振り切ってマイナス値になってしまうんだ。ソウルジェ

ムが濁り切つてなお魔力を使おうとしたら当然破裂してしまう、まるで水風船のようにね。」

ソウルジエムのキャパシティを一瞬で振り切ってしまう程の膨大な魔力が希望と絶望の相転移で生まれる。ということか。

しかしそれはキュウベエが得をするだけではないか？ 魔法少女で魔力が尽きると死んでしまうのは、普通の人間が体力を使い果たして死んでしまうのと同じだろう？

「話は最後まで聞くべきだ。……そうして破裂したソウルジエムにさらに魔力が溜まり、やがてグリーンフィードの結晶と化するのだ……」
「グリーンフィードからは魔女が生まれる。」

スズホがチツと小さく舌打ちしたのが聞こえて、次の瞬間ボカッとその長いワンドで僕の頭を叩いた。

「ここまで頑張ったんだから最後まで一人で言わせてくれると嬉しかったよ！」

「……ゴメン。だけどそれって……。」
「そう、魔法少女にとっては最悪の事態となる。一般人を守ろうと必死で戦ってきたのに、最後には守ってきたものを壊さないといけないなんて最悪だろう？ だからそれを避けるためにあのお方が魔法少女になるときに円環の理になることを願ったんだ。」

最後の方は理解できなかったが、とりあえず円環の理が救済であることだけは分かった。

しかしミナトには一つ疑問点があった。

「スズホ達はわざわざそれを伝えに来たの？」

スズホは人が自分の話を遮った時と、人が間違っている時にそのワンドでその人の頭を叩く癖がある。

ドグツという音がする程の勢いで僕の頭を叩いた。なんか頭が割れたような気がする……。

「君は本当にバカなのかい？ そんなわけがないだろう。」

じゃあいつたいなにをしに来たというのか。

僕は叩かれたところを摩りながら割れていないかどうか確かめる。

よかった。割れてはいないようだ。

「私達はもう大丈夫だよって伝えに来たんだよ。」

えっへんと胸を張るミズキに賛同するようにスズホが頷いた。

「話の続きだが……。円環の理っていうのは霊的な成仏とは少し違うのだよ。」

「別の場所でもっと希望に満ち溢れたものになるんだよ。」

どういうことなのかさっぱり分からなくなった。

そう思っているとスズホのワンドが今度はミズキの頭にクリーンヒットし、ミズキは「いったあゝ!？」といて頭を押さえた。

「ミズキ、君はもう少し黙っていてくれるかい？ 理解してもらえ

ないと今後の来る時に大変だろう？」

「えー。私もつと話したい！」

「今後が大変？」

今後僕はまたこの二人に会う予定があるのだろうか？ という
かあつたらそれはそれで嬉しいが、ないはずだ。

「それがあるのだよ。さっきも言ったが、円環の理に導かれることは、普通の人間における成仏とは違う。円環の理とは魔力を使い果たした魔法少女を一つ上の領域へと導き、自らの一部とする。その過程で一つ上の領域へとシフトする際に円環の理に同期することで魔女化を防ぐんだ。」

「どういうことだ？」

まったく意味が理解できなかった。

スズホはこれ以上どう説明したものかと頭をかき、なかなか次の言葉を言えずにいた。

「まあ、ミナトだってその内導かれたら分かるよ。」

「魔法少女というのは希望そのものだ。だからその集合体とよりそって幸せにならないわけがない。」

ミナトは結局円環の理の全貌を把握できず、何度も首を傾げていた。

「まあ、あれだ。円環の理に導かれるというのも悪くはないということだ。」

「すごく嬉しくて楽しい気持ちになるんだよ！ だからミナトも早く来なつて。」

それって早く死んでこいってことかよ。

なんてことを言うんだと思っていたら、案の定スズホがミズキの頭をワンドでボカッと殴った。

「ミズキはああ言ったけど、まずは今の人生を楽しんで来るといい。この世はまだ君の知らないことで満ち溢れているからね。その過程で必ず果てる時は来る。その時が来たら円環の理に導いてもらってまた会おうじゃないか。」

しかしそういうスズホも眼に涙を溜めているのが見て取れた。

「スズホ、僕は君が好きだよ。」

スズホは一瞬びっくりしたような顔をしてから溜まっていた涙を流した。

「まったく、何を言い出すかと思えば……。僕も君のことが好きだったよ。」

スズホはそう言って僕の身体を抱いた。しかしそれは本の一瞬で、すぐに離れて行ってしまった。

「まあ、とりあえずは目の前に迫る魔法少女としての使命を果たしてこい。」

スズホが僕の背中をドンツと押し、僕は光に向かって進んだ。

「スズホばっかズルい！ 私もお話したかったー！」

「残念だったね。ミナトは私の事が好きらしいからね。」

「私の事も好きって言うてくれたもん！」

なんて会話が後ろから聞こえて、少し恥ずかしかつたが、僕は思わず振り返ってしまった。

そして声をかけようとしたのに、それは喉のあたりで詰まっ
て出てこなかった。それは別に空間の力が作用したとかいうわけでは
なくて、スズホ達の行く先に見える神々しい光。その先に見える者
に見覚えがあったからだ。

「鹿目まどか………?」

しかしそれを認識するかしらないかのところで自分自身も光に包まれ
て、眠りについた。

17、円環の理に導かれるのも悪くない。(後書き)

なんか個人的な円環の理の解釈を述べる回みたいになってごめんなさい。

自分はたいてい考えが甘いので、「そうじゃなくね?」「みたいな点があると思います。

そういうところを感想とかで報告してもらえると嬉しいです。

今回は五体目の魔女です。

ところでシャルロツテ可愛いですよね!

あのぬいぐるみみたいなのモフモフしたいw

XX、魔女の解説（前書き）

今回は完璧な解説回です。

といっても、原作の魔女図鑑の様な「ちょっと一言メモ…」みたいなものなので、文字数的には最短かなw

これは今までの魔女を書く際に使った特徴のメモから、魔女図鑑風に言葉をつなげてみたものです。

ちょっと要約しすぎた感があるw

ちなみに3体目までね。

XX、魔女の解説

・クラーク・シャーナ・クラッチオリゼー

魔獣の魔女。性質は「凶暴」。

三つの頭を持ち、その広い視界で捉えたもの全てを破壊しつくす。

より強力な力の前ではただの犬となるだろう。

・????

胎児の魔女。性質は「無意味」。

この魔女には言葉や感情は意味をなさない。

倒すには何も感じずに傷つけなければならぬ。

・ウィルス・S・C・ナスタリア

電脳世界の魔女。性質は「混沌」。

黒い影の見える本体は、よく見ると右から左へと言葉が流れている。

籠っている殻を取り去ればたちまち霧散してしまうだろう。

・電脳世界の魔女の手下

黒い影の様な部分をよく見ると文字の羅列になっている。何かの異物が入力されるとたちまちバランスを崩して消えてしまう。

XX、魔女の解説（後書き）

思ってたよりだいぶ短かったけど、今回はこれだけ。

もっと解説らしい解説を入れようかとも思ったけど、要らないよね

?w

欲しいって人がいれば書きますよ！

次回更新の時は本編です。

更新日は水曜日〜金曜日のがどこかです。

感想よろしくお願いします。

18、魔術的結界（前書き）

このお話の中では魔法と魔術を区別します。

魔法は意のままにあらゆる事象を操ること。

魔術は術式を用いてある一定の事象を操る事。

ということにします。

感想よろしくお願いします。

18、魔術的結界

「これはダメだ。僕にはどうしようもないよ。」

杏子が倒れた翌日、キユウベエが久しぶりに見滝原に戻ってきたので杏子の容体を見てもらったが、その答えは絶望的なものだった。

「どうやら君たちの言うその「魔女」とやらに魂の一部を削られてしまったらしいね。見てみなよ。ソウルジェムの中に空洞ができている。」

確かにソウルジェムの中心辺りにぽっかりと黒い穴があいているのが分かった。

何か他の物体が詰まっているわけではなさそうだったが、その黒はグリーンフィードと似た漆黒で、不吉なものを感じずにはいられない。

「どうしたらいいの?」

「だから僕にはどうしようもないって言ったただろう? 別に処置とかをしなくても生命活動に異常は起きないけど、もう今までのように激しく魔力を使う事は出来ないだろうね。」

それこそ絶望的だ。それでは魔法少女として生き残る事が出来ない。植物人間の様なものだ。

「しくじったな……。まさかあの結界の中に入った瞬間から幻だったなんて。」

杏子は巴家のベッドに横たわり、なんとか会話はできているが、まだ胸の辺りを抑えていた。

どれだけ痛いのか自分には分からなかったが、私はそれを見て自分も胸に手をやる。

「魂が欠けていると言う事は魔力を奪われたと言う事だ。……まあ、人間の魔力と言うのは底なしだからね。諦めさえしなければじきに元に戻っていくと思うよ。僕たちもそこに注目してこの星に来たわけだしね。」

キュウベエのその言葉に安心して、マミはホッと胸をなでおろした。

「あと数日で最悪の魔女がここに来るらしいけど、それまでに治りそうなの？」

「うーん……。それは難しいんじゃないかな。魂と言うのはそう簡単に治るものじゃないからね。」

最悪の魔女……。今まで四体ほどの魔女を見てきたが、そのどれもから魔獣なんかとは比べ物にならないくらいの気持ち悪いオーラを感じている私は、その言葉に不安しか感じられない。

5人でも倒せるか不安だと言っていたのに、人数が一人減ってしまったのは相当痛い。今回は本当に覚悟して臨まないといけないうもしれない。

「それよりキュウベエ。今のこの状況、あなたはどうか分析しているの？」

まどかがキュウベエにそう問いかける。しかしキュウベエはどう答えたものかと珍しく頭を傾げて悩んでいた。

「……僕の個人的な見解だけど、この町に魔剣とか魔術的結界でも

あるんじゃないかな？」

「……魔剣……！？」「……」

一同が声を張り上げ、キュウベエは耳をくるくるっと丸めてうるさそうに眼をつぶった。

魔剣……、小説やアニメの中なら素晴らしくかつこい言葉だが、今のマミにとってはとても不吉な予感しか感じられなかった。

「そんなものがあるの！？」

「あるとも。君たちだつて聞いた事くらいあるはずだよ。聖剣エクスカリバーや魔剣デュランダル。名前くらいは知ってるだろう？」

聖剣エクスカリバーと言えばアーサー王の使ったという伝説の剣デュランダルについても名前は聞いた事がある。

しかしどちらも伝説だけで本物は残っていない。そもそも作り話だと思っていた。

「それらは魔法少女が作ったか、彼女達自身が姿を変えたかのどちらかだ。その証拠に宝剣にはたいてい宝石がついているだろう？」

あれはソウルジェムさ。」

「……もしかして僕の剣も宝剣になる？」

確かにミナト君の剣にも柄のところにソウルジェムが付いているのを見た事がある。

「ミナトが手放せば宝剣となるだろうね。実際、英雄とされた男性の「魔法少女」がソウルジェムを剣に付けて宝剣にしたものもあるけど、みんな魔剣にがつきすぎだよ。今回は魔術的結界の方が現実的だと思うよ。この町は本当に混沌としているからね。」

確かにそれも説明がつく。

見滝原は近年、近代化といって都市化されてきたが、その計画が約一か月前に終わったという。

魔術というのは魔法の上位互換の様なもので、高度な技術が要される。

しかし偶然と言うのは結構あるもので、例えば神聖な建物が五角形を描くように存在していればそれで陣は完成。魔力の供給だって魔法少女が五人もいれば十分すぎるし……。

私は魔術の事を知っているから納得できたけど、ミナト君以外の3人は「魔術」という言葉にピンとこないようだった。

「みんな知らないわよね……。いいわ。魔術的要素については私が調べてみるから。」

「僕も手伝います。」

数日以内に発見できれば最悪の魔女の出現だけは回避できるかもしれない。

そう考えると足が動かずにはいられなかった。

「ついてきなさい！」

「はい！」

町はすでに夜。しかし私はそんなことを気にせずに必要なものを揃えにベランダから急行した。

マミとミナトは見滝原のとある場所に来ていた。そこは調査からして次の魔女が現れるであろう場所だ。

魔術的観点からの調査は恐らく正解だった。今までに現れた魔女の出現場所が正に正五角形のうちの四点になっているのだ。

そしてその最後の点は意外なところにあつた。

「まさか島全体が一つの点になっているなんて思わなかったわ。」「ホントですよ。……でもこれじゃあさすがに消せませんね。」「

これほどのモノを消滅させればさすがに不味いだろう。最悪の魔女と比べたら世間の声なんて……とも思ったが、どっちにしる崩すのは難しかった。

他の点についても結構人の目があるような難しい場所にあり、破壊するのは不可能だった。

「結局最後の魔女とは戦わないといけないみたいね。」「

「それより、学校はいいんですか？」「

「いいのよ。世界を守る使命と比べたら小さな事だし。」「

私はそんなことより集まってきている瘴気の行く先が気になっていた。それにその大きさもかなり強いものだ。

「……まさか海中で結界を開いたりしないわよね？」「

「でもそうなりそうですよ。服がぬれるのが嫌なら今のうちに水着でも……あっ、別に見たいとかそういうんじゃないですから！ただ単に……」

ミナトが勝手に変な妄想をして自分から不利になるような言い訳をしているのがおかしくなって、マミはプツと噴き出してしまった。

「気遣いありがとう。でも大丈夫よ。いざとなれば魔法で作るから。」

ミナトは顔を真っ赤にして水面をじつと見つめていた。穴があれば入りたいなんて言う事があるが、今のミナトは海に潜ってしまいそうな感じだった。

「ミナト君は本当にピュアよね。14歳くらいの男の子ならもう少し吹っ切れててもいいんじゃない？」

「……そうですか？」

まあ、別に下ネタ連発の変態君になつて欲しいわけではないけれど、もうすこし男の子らしくてもいいんじゃないかと思う。

ときどき男の子らしく私たちを守ってくれたりしているけれど、なんだかそれは彼にとっては苦痛なようで、守られている側としては素直に喜べなかった。

「ところでミナト君はどこで魔術を？」

「僕は昔の仲間から教えてもらったんです。基礎的な知識だけで、実際に使った事はないですけど。」

そう言つて遠くを見るような顔を見ると、彼はまた水面に視線を下ろして俯いてしまった。スズホさんという、ミナト君の大切な仲間を知っているからすぐに理由がピンときた。

「……そろそろ潜る準備をした方がよさそうですね。」

「え？ ああ、そうね。結界ができそうだわ。」

ミナト君は魔法少女の制服をズボンだけ穿き、さっさと海中深く

へと潜水していった。

「私も行かなくちゃ。」

マミはいつもとは違って、ビキニの上下に軽くそれらしいあしらいを施した水着と、いつもの花の形の髪飾りをつけた姿に変身し、ミナトの後を追った。

結界は海中20メートルくらいのところに開いていて、どうやら中も水で満たされているようだった。

『どうやら魔女はまだ羽化しきってないようです。』

念話でミナトが中の様子を伝えてくれた。

『了解。こつちも今から結界の中に入るわ。』

言いながら結界の入口を通り抜け、水路をグリーンフィードの気配を辿りながらどんと奥へと進む。

そこは水だけの空間。最近泳いでいなかった私は素早く動けない事に気が付いていた。

ちなみに空気は魔法で補っている。というか、昔キュウベエに魔法だけで身体を動かす方法を教えてもらっていたため、空気はいらなかった。

「それにしてもすごい魔力を感じるわ。今までより強い魔女なのかしら。」

水と共に流れてくる魔力はやはり邪悪で、気持ちの良いものではなかった。しかし水自体はこの海の物の様で、結界を通ったからか意外と澄んでいてそれが身体の表面を流れていくのは気持ち良かった。

『羽化が始まりました。急いでください。』
『了解。』

しかしすでに近くまでは来ている。私はマスキット銃を召喚し、最奥部の部屋の入口を通過する。

そこは特にあしろいもないただの空間だ。しかしよく見るとガラス張りになっていて、上には空気が溜まっている。

巨大な水槽。それがこの魔女の結界だった。今まで通ってきたのはきつと浄水器の部分なのだと分かった。

『マミさん避けて！』

その声に反応する前に下を向くと、小さなマスコットの様なモノがその口から魔力弾を吐きだして、それがこちらに迫ってくる。それをマスキット銃から放たれた魔力弾で撃ち落としながら射線を離れる。

しかし水中であることがとてもマイナスに働いてしまった。自由の利かない水中では避けるのも一苦労だ。ミナトは以前使っていた大きな剣をフィンの様にして素早く動いているが、私にはそういう類の物がないたため、うまく動けずにいる。

小さな魔女は今までの魔女のように声を発する事はなかったが、一番攻撃的だった。

私の動きが遅いのが分かるとそちらに向かって射撃する。どの魔女よりも知能を持っている。

『マミさん！ 僕が牽制します。』

左手に持った以前の剣で魔女に一気に近づき、右手に持った新しい剣で魔女の注意を引く。そのおかげで魔女からの砲撃がそれて、私は一気に近づいた。

「これで一気に片を付けるわ！」

ストック部分で魔女を弾き飛ばし、その先でリボンを使ってがちりとバンドしてやる。魔女は身動きをする様子はなかったが、リボンに首を絞められて口から物体を戻していた。

その様子に勝ちを確信し、いつもの決め技の発射態勢に入る。

「テイロ……」

『マミさん待って！』

その時、ミナトが魔女の異変に気付いてそう言ったがもう遅かった。すでに引き金は引かれてしまい、一際強力な魔力弾が水中に迸った。

魔女はそれをもろに受け止めて全身をぼろぼろにするはずだったが、一瞬のうちに姿を変えた魔女はその魔力弾を切り伏せて、一気にマミへと距離を詰めた。

『マミさんっ！』

反応は遅れなかった。しかし水で動きが鈍いし、思うように動けない。剣が振りあげられる。部屋の中の光を反射してキラリと光る

刃が自分の首へと迫るのがスローモーションで捉えられて、怖い何かが身体の奥底から吐き出されるような感じがした。

しかしそれは結果的に私の首には届かなかった。

ミナトがぎりぎりのところでマミを押し飛ばし、自分も大きな剣を持ってその攻撃を辛うじて防御した。しかし水中では支える物がなく、ミナトは一気にガラスの壁に叩きつけられてしまう。

『ミナト君！？』

刹那の知覚から覚めた瞬間まず最初にミナトのことを心配したが、すぐに我に帰り、状況を判断させる。

状況はこちらに不利だ。

まず地の利が向こう側にある。まあ前ではあるが、今回は特にそれが厄介だ。足場がなく、全面水になっている。そのため私たち魔法少女は素早く動けない。しかし魔女の方はどうやら関係ないようだ。

そして次にこの魔女の特性が厄介だ。近距離の攻撃と中距離の攻撃をすることができる。

ということとは、やはりミナト君にクロスレンジを制してもらうしかない。しかしこの魔女は水の中で自由に動ける。つまりミナト君一人でクロスレンジを制してもらうのは難しい。

「私がやってみるしかないかな。」

まだ近くにいる魔女が次のモーションに入る一瞬の間に作戦を考えると、それをすぐに実行に移した。

リボンをグルグルと棒状に幾重にも巻き、それを礎にして一本のランスを召喚した。

魔法によって生み出されたそれは重さがなく、水中でも苦もなく持つ事が出来た。どうやら久しぶりの召喚には成功したようだ。

『ミナト君、二人でクロスレンジを抑えるわよ。』

『はい！？ りよ、了解！』

ミナトはマミが近接戦闘を苦手としているものだとばかり思っていたので、多少びびくりしながらも一気に魔女に距離を詰めた。

私は魔女が次のモーションに入ったのを見ると、すかさずランスを魔女に向かつて突き出す。剣は振りかぶるモーションがある分、槍よりも攻撃速度が遅い。その隙を上手く突き、私はそのまま突きを乱発する。そのほとんどが魔女の剣に防がれてしまったが、それでいいのだ。

本命はミナト君だから！

マミが突きを乱発して魔女の気を引いている間にミナトが後ろに回り込み、魔女の身体を引き裂こうとその剣を振りかぶる。

しかしその直前に私のランスが弾かれてしまい、魔女に防御のチャンスを与えてしまった。

魔女が防御すると言っても、こっちは自在には動けない。だからミナトは今度はその反撃に近い防御を受け流し、連撃を繰り出した。

『しつこいわね！』

私はミナト君が気を引いている隙にと思ったが、今度も防御され

てしまう。

『マミさん、クロスがダメならミドルで攻めましょう。』

ミナト君が先にその場を離脱し、左手に持っている剣を大きく振りかぶって水中でソニックウェーブを繰り出した。それは空中より早く進み、魔法の本体と最初のマスコットが繋がっている鎖を断ち切った。

その瞬間魔法が超音波の様なものすごく周波数の高い音を出し、身体をよじらせて苦しんでいるのが分かった。

『どうやらあれを壊されるのは嫌みたい。ミナト君お願い!』
『任せてください!』

ミナトはそのままの勢いで最初の殻に向けてソニックウェーブを放つ。私は本体の方を防御に向かわせないようにランスで連撃を繰り出して足止めする。ソニックウェーブが想定通りに殻を切り裂き、本体に見えない傷を負わせる。

『もうあなたも終わりよ!』

連撃の最後の一突きが魔法の身体に通り、ガラスの壁へと吹き飛ばす。

私はそれをリボンで捕まえて、ランスを低く構えて、魔法を引きよせて、突きを繰り出す。

『ティロ・ファイナレ（物理）!!』

しかしランスの先が魔法の身体に大きく穴を開けた瞬間、魔法が最後の力を振り絞って剣を後ろに引いた。

18、魔術的結界（後書き）

マミった。

いや、首が飛んだわけではないからマミったのとは違うかw
今回マミさんネタをちよつと豊富に取り入れてみたつもり。
あんまり良くなかったかな・・・

次回は要望のあった鹿目まどかとミナトの絡みです。

SS 暁美ほむらの入学初日（前書き）

はいー。

ggdggdですw

日常系マジ書けない。

ストーリーちゃんとないとこんな風になる。

感想・・・今回はまあいいやw

SS 暁美ほむらの入学初日

「入学おめでとう！」

私、暁美ほむらは長い繰り返しから解き放たれて2年後、高校生となった。

中学の時とは違って灰色のブレザーと言うすごく地味で味気ない制服であったが、なんだか中学の時より少し大人になったような気分。

長い時を過ごしてきた私でも新しい事柄に関しては歳相応に感情が動くらしい事はこの二年間で分かってはいたけれど、これはこの二年間で最も大きい喜びかもしれない。

だけど私は繰り返し以降の癖でクールを演じようと、あまり浮かれた様子は外には見せずに花をつけてくれた男の先輩に「ありがとう。」と軽く微笑む程度で済ませます。

それから講堂へと向かう間に何度笑みがこぼれたか私は数えてはいなかったが、どうやらよほどうれしそうに顔をしていたらしく、列で隣になった男子に話しかけられたりもした。

そのあと校長先生が長い話をしている間に周りを見回してみると、中学のころからよく見る顔も結構ある。見滝原高校は見滝原中学から上がってくる者も多く、先ほど話しかけられた男子もその一人だった。

「……皆が成長する事は……」

ふと「成長」というワードを聞きとり、私は嬉しくなる。

美樹さやかのおかげで魔法少女の本体はソウルジエムであることを知らされた時、私のこの身体はもう成長しないんじゃないかと思っていたのだけれど、去年の身体測定で身長がわずかだが伸びていた事が分かってとても嬉しかった覚えがある。

これからもまだ成長する余地があるという話を聞いて、私の胸はこれから待つ嬉しさでわくわくしていた。

そしてクラスで自己紹介の時が来た。

何を言おうか迷っている自分が懐かしくてまた顔が緩んでしまう。

繰り返している時は自己紹介なんて無駄だと思っていたけれど、これから新しい生活が始まるのだ。あえて自己紹介を短縮することはない。

そう思うと昔とは変わっているのだとも思えてきた。昔は何を言えばいいのか分からなくて悩んでいたけれど、今は言いたい事が多すぎる。

変えてくれたのはまどか。まどかには本当に感謝しかない。

「暁美ほむらです。見滝原中学校から来ました。……………よろしく
お願いします！」

そう言って礼をすると教室内に拍手が巻き起こった。

「暁美」で出席番号1番だったので考える暇がなかったので、結局話したい事全部話してしまった。これでみんなからのイメージが崩れてしまつかも。

でもそれでもいい。高校ではもう少し明るいイメージでいきたいのだ。

「暁美さんの髪綺麗だね！　いつもどこの使ってるの？」

なんて、転校してきた時のようにもてはやされるかと思ったが、さすがにそういうのはなくて、私はHRのあと一人で座っていた。

「まあ、こんなものかしら。」

少しの期待が裏切られてちょっと残念ではあったが、午後から授業があるためついさっきもらった新しい教科書を眺める。

化学の教科書……、遊びかしら？

「暁美さん。」

ふと名前を呼ばれて扉の方を見ると、この学校に先に進学したバママがこちらに向けて手を振っていた。目立つから念話で呼んでくれと言ったのはどうやら忘れていているらしい。

二年前は縦ロールになっていた髪型は彼女が高校に入ったと同時に下ろされて、今は少しウェーブがかかった彼女の自然体にソウルジェムをつけた髪飾りをつけるくらいだ。見慣れていた姿が一年前にいきなり変わってちょっと驚いたけれど、これがけっこう似合っている。

私も高校生になったら髪型を変えてみようかと思ったけれど、まどかのリボンが外せない私ができる髪型と言えばツインテールなど

のように髪を結うくらいしか思いつかなかった。
それを杏子に見せたら逆に子供みたいだと言われたので、私はもう絶対髪型を変えない。

「お弁当食べましょう。」

そんなことを考えているうちにママが他の子の椅子を借りて目の前に座っていた。この位置は危険ね。早く席がえしたい……。

「お弁当と言っても、私はあなたのように綺麗な弁当を作ってこれないから、コンビニで買ったものよ。」

「あら、それは良くないわね。……分かった。明日から二人分作ってくるわね！」

あれ？　なんか私が思ったのと反応が違う。

まあいいか。ママの料理はおいしいし。

とか思いつつ今日はコンビニで買ったおにぎりを1、2個食べて、再び午後の授業の教科書を見る。

数学？　……算数じゃないの？

「暁美さん嬉しそうね。ここ最近で一番幸せそうな顔してる。」

そんなの自分でも分かっている。ママはそんな私の顔を見て微笑むと、自分の弁当の最後の一口を食べて教室を出て行った。

そうして学校が終わると今度は魔法少女の仕事が待っている。

今日は魔獣が出そうな気配はないが、パトロールするのはかかせない。というより夜の風に当たるのは結構気持ちがいいので、毎日

こうしてパトロールと称して外に出るのだ。

春の夜風が暖かく私の事を包み、ふわふわと私の心をさらに浮かせた。

「まどか、私高校生になったよ。本当はあなたと一緒にたかったけれど、今のままでも充分満足してるよ。」

夜の風に当たりながら私を包んでいてくれるはずのまどかに報告するのが日課となっている私は、今日もそれを終える。

これから高校生活が始まるのかと思うとなんだか嬉しくなってきた、無意識下に私は翼を生やしていた。

嬉しいという気持ちに連動して出てくる白い翼は今日も純白をしていた。

SS 暁美ほむらの入学初日（後書き）

マジごめんなさい。

時間かけた割にこんなggggdでごめんなさい！

だれか日常系の小説書くコツ教えて！

次回はSS書く気になったら明日更新。
本編書いてたら金曜日更新です。

19、自分を守れずに他人を守れるわけがない。(前書き)

ものすごく微妙なでき。

いや、これはダメだな・・・。

あとで改稿とかするかもw

感想よろしく！

19、自分を守れずに他人を守れるわけがない。

僕がほむらさんの家までマミさんを運ぶと、まどかさんが迎えてくれた。

事情は話してあるので、マミさんを受け入れる態勢は整っており、診察の準備もできていたため、僕は用意されたベッドにマミさんを下ろす。

まどかさんは魔法を使ってパツパツと簡単にマミさんの身体を診察してくれた。

マミさんは右目を魔女に貫かれたショックで気絶してしまい、僕の方では不味いのかどうか分からなかったため、とりあえず水から上がってそのまま一直線で来た。

しかし目玉を貫かれたのだから、普通の人間だったら即死レベルだ。魔法少女といえど、治療に特化したようなタイプでないとさすがに眼球ほどの精密な部位は簡単には治せない。

これでもし魔法を使っても眼球が完全に直らなければ僕のせいだ。

マミさんが他の人たちがいなくても大丈夫だといったのを僕も肯定したんだ、でもそのせいでマミさんに怪我をさせたなんて最低だ。やはりほむらさんとまどかさんも呼ぶべきだった。

「……僕のせいだ。僕も大丈夫だっていったのに、結局マミさんを守れなかった。」

そう言うと、僕の視界の隅にいたキュウベエが理解できないといったような顔で僕の前まで歩いてきた。

「それはちょっと違うんじゃないかな？ だってマミが大丈夫って言ったんだろ？ ならそれを肯定した君にも少しの責任はあるとはいえ、一番責任を持つべきなのはマミだ。そこまで君が気に病む必要はないと思うけど？」

「でもマミさんを守れなかったのは僕だ。」

僕がふがないせいで、僕が安直に回答したせいで、杏子が魂を削られてマミさんが怪我をしてしまった。

全部自分のせい。自分のせいでみんな傷ついていく。次こそはと思っても全然守れない。

「まったくお前は、他人の前に自分を守れよな。」

頭に直接声が響き、すぐにそれが杏子の声であると分かった。

「言われる前に言っとくが、念話くらいは支障ないから大丈夫だぞ。」

考える前に言われてしまった。

「お前は他人の事ばっか考えすぎなんだよ。少しは自分の事を守れ。他人を守るなんて、自分を守り切れてねえ奴の仕事じゃないんだよ。」

自分の事？

自分を守りきれない……のだろうか？

「気付いていないのかい？ 君は自分が周りを守っていると思っただけ、実は逆だよ。君はみんなに守られてばかりだっ

「ただ。」

「僕が守られている……？」

「そつだよ、ミナト君。」

「まどかさんが隣の部屋から診察を終えて出てくる。念話ですべては聞いていたようだ。」

「ついでにココアを僕に差し出してくれる。」

「あつたかい。」

「ミナト君は自分が思ってるほど強くない。だから私たちが守るの。」

「

「僕が……強くない？」

「弱いでしょう？」

「そつだ。僕は弱い。」

「いつもそつだ。」

「スズホの時もミスキの時も守る事は出来なかったし、全力で守ろうとして魔力を使いきるなんて根性もない。」

「結局僕には斬る事しかできないのだ。斬ることで守れる事なんてきつとないんだ。」

『でも弱いという事は強くなる余地があるという事よ。』

「ほむらさん？」

「どうやったら強くなれるのだろうか？」

「そんなの僕たちには分からないよ。でも、それを探して成長して

いくのが知的生命体なんだ。だからほむらの言うとおり、成長する余地はあるんじゃないかな？」

『それと、ミナトはアタシの事も病んでるみたいだけどさ。それはいけないぜ。だってアタシは他人のために魔法を使ってるんだ。だからアタシ自身が傷つくのは当然のことだ。その傷をお前まで感じるならアタシは次から助けないからな！』

「ミナト君が守るとかそういうのは結局ミナト君の勝手に、みんなお互いに守り守られているんだよ。だからミナト君一人がキズを背負わなくてもいいんだよ。みんな気持ちは同じだから。」

みんな、同じ。同じ気持ちで一緒に戦える仲間。

守るだけ、守られるだけの関係じゃない。お互いに信じあう関係。僕はそういうのを求めていたのかもしれない。

「魔女が現れる原因、分かったんだね？」

「はい。」

魔術的結界。今回の場合は正五角形の中に星を描く、もつともシンプルなタイプの陣だ。その効果もついさつき特定できた。

今回の陣は交差点、公園、住宅地、マンション、離島の五つの点を結ぶ五角形と、それを対角線上にもつないだ星型からなる陣で、いままでの魔女は星型の角になっている部分の範囲内に現れている。このことから次が最後である事と、その魔女の出現場所がだいたい特定できる。

そしてこの五角形の中には古今東西の建物などが集まっっていて、そのことからこの結界の効果が特定できた。昔から今までの全ての

魔力がここに集まるようになっていたのだ。

「次の魔女が現れる予想範囲はセントラルタワーから半径8キロメートルくらいです。」

そう言ってミナトが指差したのは星型の中に現れるもうひとつの五角形の範囲だ。

「広いよ。もつと絞れないの？」

「無理です。でも中心に近くなるほど確率は高くなります。」

むしろ、ミナトはセントラルタワーに現れるのではないかと予測していた。しかしマミが根拠もなく安直に決め付けるのは良くないとして、皆に説明する時はこういう風に報告することにした。

「この範囲か……。3人でカバーできるかな？」

「普通に考えたら無理ですよ。」

セントラルタワーから8kmもあって、どうやって3人でカバーしろと言っただ……。。

「私やっぱり「桃」って子と協力するしかないと思う。」

『「桃」との接触はやめた方がいいわ。彼女は彼女で精神状態が安定していないもの。』

ミナトは「桃」と直接話した事はないに等しいが、ほむらと同意見だった。彼女は魔法少女にとっても危険だ。身体能力がすごすぎる。いったい何をつかっているのか。

「それと、もうひとつ分かった事あるんですけど……。」

ミナトはもう一つ持っていたファイルから資料を何枚か取り出して、ある日にちを示す。

「出現日時が特定できてます。「桃」の予想では明後日でしたけど、予想時刻は明日の正午あたりです。」

そのセリフにまどかさんが凍り、他の全員が固まった。全員覚悟はしていたが、やはり一日の差と言うのは大きい。

「「桃」が嘘の情報を流したんだと思います。」

「そんな、明日だなんて……。」

明後日だったかもしれないからママさんはかるうじて回復できたかもしれないが、3人プラス1人でそれほど強い魔女と戦えるのだろうか……？

僕は今さらながら不安に思ってきた。

古今東西からの魔力量は計り知れない。よって魔女も無限大の絶望を秘めていると言える。

「どうします？」

おそらくこの3人の中で最も魔力の多いのはまどかさんだ。だから僕は、まどかさんに向けてそう言う。

しかし当の本人は自分が指揮を取るのをおかしいと思っているよ。うで、「どうしようか」と返ってきた。

そんな無責任な……とは思ったが、実際僕に聞かれても同じような返事しか返せなかったと思う。

それほど絶望的で、途方もない存在だという事だ。

「うん。どうしようもないね。現れたところを討伐するしかない。今考えたってしょうがないよ。」

『そうね。でも私は学校帰りに武器の調達に行つてこないと……。』

それぞれの準備がある。

そういうわけで、今日は全員休養するという事になった。

『まどかさん……。』

僕は会議が解散になった後すぐにまどかさんに念話で話しかけた。他の人には聞こえないタイプのものだ。

『うん……。そろそろ来ると思ってたよ。』

その反応ではもうすでに僕の用件が分かっているようだ。

『「ということはやっぱりまどかさんが円環の理を願ったって言う魔法少女？」』

僕はほむらさんの家から出て、数歩歩いただけのところにある小さな公園のベンチに座っている。

『そうだよ。私が円環の理になったの。うん、作つたって言う方が分かりやすいかな。』

円環の理、スズホやミスホを導いて幸せな気持ちにしてくれたもの。

今までは魔法少女を勝手に消してしまっても嫌いな概念だったが、今ではその気もない。

きつと今までの自分だったらまどかさんが円環の理だと分かった瞬間に暴走しちゃって、それでまどかさんを傷つけていただろう。

『僕は……』

僕は何を言いたかったのだろうか？

とても重要な気がするけど、でもどうしても分からない。

何が言いたいのだろう？ 頭では分かっているけど、言語化できないというもやもやが頭の中に籠っていて出てこなかった。

『今言えないなら、無理して言わなくてもいいんじゃないかな？』

言わなくていいのだろうか？

何か言った方がいいのではないか。でも何を……？

『あの……』

『言葉は魔法。ちゃんと自分の言いたい事がまとまってから話してくればいいから。』

『……………』

言いたい事は確かにあるんだ。だけど、それがなんなのかが全く理解できない。

なんだかふわふわした暖かい羊毛のようなものに包まれている感じ、それを彼女に伝えたかったのに、どうしても言葉が出てこなかった。

『そうだ、お話したついでにお使い頼んでいいかな？ マミさんの

ために包帯を買ってきてくれると嬉しいな。』

円環の理がこんな身近で眼に見えてしまっていて大丈夫なんだろうかと一瞬心配になってしまった。

『はい！ 分かりました！』

そう言って僕は薬局へ急いだ。

19、自分を守れずに他人を守れるわけがない。(後書き)

前書きで言えば良かったけど、一日遅れでごめん！

今回は最後の魔女の出現です！

20、最後の魔女（前書き）

遅くなってすみません。
時間かかってしまった。

感想よろしくお願いします。

20、最後の魔女

時間は午前11時55分を回ったところだ。

最後の魔女が現れるまでおよそ五分と言ったところだが、もしかしたらミナトの予想は間違っていたのかもしれない。

セントラルタワー周辺になんとか動けるようになった杏子とマミも合わせた五人を配置して魔女の気配をずっと探っていたが、五分前となった今でもまだ周辺に魔力が集まる気配はなかった。

「桃」の現れる気配もまったくなかったし、これはもう間違いないだろう。

その場にいる5人が5人ともそう思っていた。

『ごめん、やっぱり気になるんだ。予想の時刻まではあと5分あるし、もうちょっと待って。』

まどかさんのその言葉だけで全員が繋ぎとめられていた。

それにしても最後の魔女が現れる前兆が無さすぎる。

今までの魔女は結界を生む時に多少なりとも町の魔力に変化があった。そしてそれなりの強さを持った魔女が生まれた。

しかし今回は何も無い。見滝原の魔力にはまったく変化がない。

これはどういった事か、キュウベエでさえ測れずにいた。

『あと一分で予想の時間よ。空振りだったわね。』

ほむらでさえこの状況に見切りをつけて帰ろうとしたその時だった。

突如巨大で膨大で邪悪な魔力を五人は感知した。それは魔法を使う彼女達に強い電磁波の様に打ちつけて威圧する魔力。
今までで最も邪悪な気配……いや、魔法を使って探知するまでもないほどの波が彼女達を襲った。

いったい何が起こったのか？

しかしそんな事を思う前に波が伝わってきた真上を五人は一斉に見上げた。

『そんな……』

『こんなことってあるのかよ……』

魔力波は今もビリビリと五人に打ちつけられ、頭が痛くなってく
るほどに強くなっていく。

五人が見上げた先には青い空があったが、ある一点だけぽっかりと穴が開いたように黒い物体がそこに浮かんでいた。
あれが魔女だと分かったのはそれを見たすぐ後だ。

『でかい……』

それは最早SF映画に出てくるような巨大な宇宙船だった。
物体のおおよその半径は8kmだ。出現予測範囲のどこかではな
く、範囲全体を覆いかくすように現れてしまった。

『こんなものどうやって……』

まどかは次の瞬間に魔法少女の衣装に変身して、その大きな弓矢
を魔女に向けて最大威力で放った。

その魔法矢は他の四人の全員から視認できるほどの桃色の魔力光を放って一瞬のうちに魔女のいる成層圏まで届く。

しかし、その矢は魔女に届くか否かのところで突如現れた巨大な透明の壁に阻まれ、失墜してしまう。

『攻撃が通らない。』

僕の魔法もこの距離では魔力波を放ったとしてもまず届かないだろう。

『一旦帰って作戦を立て直しましょう！』

誰も想像していなかった。

最後の魔女が隕石だなんて……

その後数分攻撃を試みたが、まどかの攻撃と同じ様に見えない壁に阻まれて、ほむらの砲撃も、マミのティロフィナーレも、全て弾かれてしまった。

そこで今日は全員ほむらの家に集まって作戦会議をすることになった。

「飛ばないとダメだね。」

「もっと接近して撃てば貫けるはずよ。」

まどかとほむらの魔女を知っていた組が一斉にそう言うが、空を飛ぶというのは意外と魔力を使うのだ。

一応この場にいるミナト以外の全員が空を飛ぶ魔法を知っている

が、普段の戦闘では消耗が激しいため使っていなかった。

「ほむらちゃんは空を飛ぶ魔法使えるよね？」

ほむらが頷く。

ほむらの空を飛ぶ魔法はミナトも見た事があった。約一か月前にこの町で助けてもらった時に使っていた魔法だろう。

「杏子ちゃんは無理だけど、マミさんは？」

「私も大丈夫よ。消耗を抑えるなら飛ぶというよりは空中を歩くといった形になるけど。」

「おい、まどか。マミも戦闘はやめさせた方がいいんじゃないか？右目がその状態じゃあ、マミの得意な砲撃だって当たらないだろう？」

マミは意識は取り戻していたが、右目はまだ治療中だ。そこには包帯の代わりに黒い眼帯が付けられていた。

「大丈夫よ。確かに砲撃はできないけど、牽制とか支援ならちゃんとできるわ。」

確かにマミの支援には大きな意味がある。彼女ならちゃんとした支援ができるだろう。

しかし杏子と一緒に圏外に避難してほしい気持ちもミナトにはあった。

だがマミの魔力は消耗していないし、本人がやる気になっているのだから止めようとは思わなかった。

「ミナト君は飛行系の魔法は何かないの？」

何も無い。

常にジャンプだけでその場をしのいでいた。距離が欲しい時は剣を団扇代わりにして遠くまで跳んだが、あれほど高くはさすがに飛べない。

「じゃあ、解散したら何か飛ぶ方法を考えて。飛行系魔法は人それぞれの方法しかないから。」
「もし方法が見つからなかったら？」

正直空を飛ばうとは思った事があまりなかったから、方法を探せばいくらか出てくるかもしれないが、それを実行するとなると話は別である。

新しい魔法を使おうとしてもなかなか上手くいかない。

僕の砲撃魔法だってそうだ。あれは魔法少女になって以来ずっと研究を重ねてきたが、今でもそれほど上手くいかない。

「上手くいかなかったら私がフォローするわ。まかせて！」
「それよりあいつ、どんな攻撃を仕掛けてくると思う？」

それは正直問題である。

さっきはこちらが攻撃しても障壁を作って防御するだけだったが、いざ障壁の向こう側に突入したらどうなるのか。あの丸い形からはいったいどんな攻撃を繰り出すのかまったく読み取れない。

「どんな攻撃が来たとしてもかわすしかないわ。それより問題はど
うやって倒すかね。あの大きさでは風穴を開けたところでほとんど
意味はなさそうよ。」

「そうよね。あの大きさだと撃つても爆破しても斬りつけても特に大きなダメージにはならないと思うわ。」
「僕ならできるかもしれませぬ。」

その言葉にふつとまどかさん達の注目を得て、ミナトは少し縮まっ
つてしまう。

「えと、僕の魔力剣なら障壁も本体も真つ二つにできると思います
よ。」

なにせ僕の魔法は斬る魔法だ。障壁のあるところに攻撃が届きさ
えすれば、どんなにそれが堅くとも紙の様にスパツと切る事が出来
るだろう。本体だって魔力剣の剣身の長さを変えればおそらくどう
にかなるはずだ。

「でもあれだけの巨体を斬ろうとしたら魔力の消費が激しくなるわ。
」

「そうね、やるとしても一回が限度でしょうね。」
「それに頼らない作戦を考えた方がいいと思うが……、それしかな
いかもなあ。」

それぞれ意見は出し合ったが、どうやら他に方法はなさそうだっ
た。

ほむらが魔女より上空から爆弾をありったけ投下するや、マミが
ティロフィナーレの最大威力で攻撃するなどの方法は全て障壁に阻
まれて本体には通らない。

長さ8kmの剣身を作って切りつける。それしか方法はないよう
だ。

それなら間違いなく倒せるはずだ。

「でも、一回だけだからね。絶対に無理はしないって誓って！」
「大丈夫です。僕もまだ逝きたくはありませんから。」

ソウルジエムはまだ大丈夫そうだったが、以前に魔獣から集めたグリーフシードがあるから大丈夫だろう。

いったいどれだけの魔力を消耗するのかはミナト自身にも分かり切ってはいないが、1、2発くらいなら大丈夫だと思っている。

「知ってるか、魔法を使うのって大丈夫だと思ってるうちは案外大丈夫なんだ。やっぱ魔法に感情って辺りが関係してるのかな？」

杏子のそれは確かにあってない事はないのだが、それはかなり危険だ。まだ大丈夫だと思っただけで使い続けるとすぐに濁ってしまう。暗示もかけ過ぎるとよくない。

「それでも絶対一発だけにして！」

「そうね、2発撃つたとしてもたぶんその後動けなくなってしまうわ。自重して頂戴。」

まあ、ほむらさんもそういうなら、と僕は引きさがる。

「それより、問題はミナトをいかに魔力を使わずに魔女のところまで運ぶか……ね。」

「私がリボンで押し上げるのはダメなの？」

「近づいたところで魔女から攻撃があるかもしれないわ。リボンでは細かい動きは遅れてしまうでしょう？」

確かにリボンは先端の動きが遅れるからなあ。

だいぶ先読みしなければ上空にいる僕を攻撃から避けさせるのは

難しいだろう。

「私が運ぶよ。ミナト君を運んで魔女のところまで行く。それなら魔力の消耗はしないよ。」

「いえ、まどか。私に運ばせてちょうだい。」
「え？」

ほむらがいきなり前に出てきたかと思うとそう言ったので、四人は一斉に眼を丸くした。

ほむらはいつもと特に変わらない顔でそう言ったまま突っ立っていた。

「……別にいいけれど、ほむらちゃん無理してない？」

「いいえ。そんなことはないわ。ただ、まどかには攻撃をしてもらいたかっただけよ。私よりまどかの方が強いもの。」

「まあ、よく考えれば妥当な配置だな。まどかがほむらの進むルートを確保して、ほむらが一気に魔女に近づいて魔女をぶったぎるとマミ用なしだな！」

「支援なんてそんなものでしょ？ 私はおこぼれの使い魔とかをやっつければいいの。」

そう言う風で今日は解散となった。

「何の用？」

「別に。僕も今日はここで寝ようと思っただけ。前の町で稼いだお金が尽きちゃってね。」

「桃」は公園のベンチに腰掛けて、コンビニの弁当を食べている

ところだった。

巴家が晁美家に転がりこめば歓迎されたかもしれないが、なんとなく僕は公園で寝ようと思いついて、来てみたら「桃」がいた。それだけの話だ。

「あれが最後の魔女よね。私も何回も繰り返してきたけど、ここまで来たのは初めてなのよ。」

「桃」が最後の魔女を指差してそう言ったので、とりあえず肯定はしておく。

「初めてなのに、どうやって戦うのさ？ 君は魔法少女でもないからあそこまでたどり着けないだろう？」

「飛べないなら、跳べばいいのよ。私にはそれだけの力があるの。」

なぜそれほど力があるのか。彼女はその力をどこで手に入れたのか。興味がないわけではない。

しかし聞いてもいいのだろうか？

彼女が魔法少女に匹敵する力を持っているという事は、魔法少女によって付与されたという事しか考えられない。

だが、彼女には魔法少女が付き添ったりしてはいない。つまり、大切な人から魔法少女とほぼ同じ力を付与されたが、その魔法少女は逝ってしまったということが考えられるのだ。

「そんなに興味があるの？ だったら教えてあげるわ。」

彼女はそういっていきなり上着を脱ぎ始めた。

一瞬見ていられず眼を反らしたが、すぐになぜ上着を脱いだのか分かった。

彼女の背中には複雑な形のタトゥのようなものが入っていた。それが魔法の口づけであることはすぐに分かった。

「これ、魔法少女のものよ。」

「魔法少女の!？」

魔法少女の口づけ。それは確かにまどかやほむらに聞いた魔法の口づけとは格段に大きさも何もかもが違う。

これは最早呪いのレベルだ。

「私はこれのおかげで魔法少女並に動いているのよ。これをつけた魔法少女はこれ。」

彼女はそう言って付けていたイヤリングを取り、僕に見せてきた。それは勾玉の様な形をした宝石。それがソウルジェムである事はすぐに分かった。

「私が身体を焼き払って上げたらこれだけ残ってしまったの。だから私は呪われ続けている。まあ、そのおかげでこの能力があるんだから感謝しているわ。」

嘘だ。呪いが身体を蝕まないはずがない。

現に、彼女の身体の模様は現在も浸食している様子で、長くは持ちそうにない。

「でも明日で最後。明日が終わったら私はこれを壊してやる。明日、全てが終わったら!」

最後の魔法と戦った後。そういうことだろう。

最初の中から彼女の感情など見た事はなかった。しかし彼女は怒

りを強さにしていたのだと、今初めて気付かされた。

「僕たちは明日攻撃をしかける。君の言っていた正午からだ。」

「ちゃんとかかってくれたのね。私は10時から攻撃を開始する予定よ。」

次の瞬間、僕のあごのところに剣獣の銃口が押し当てられた。

「言わないでね。」

彼女はそう言つとどこかへ行ってしまった。

20、最後の魔女（後書き）

最後の魔女はまだ現れただけ。

どれほど強いかっていうのを次で分からしてあげるよ！

次回は最後の魔女VS「桃」です！

21、少女は戦い、そして消える。(前書き)

うーん……。

なんだかなあ。

もうちょっと上手く書けると思ってたが……。

文章の辺り、こう言う風にした方がいい
つてのがあったら言ってください。

最近のは感想求める以前の問題かもしれない。

21、少女は戦い、そして消える。

「うぐぐ……」

「桃」は昨夜ミナトと別れた後、見滝原駅のホームの壁に背中を擦りつけて一晩呪いからくる激痛に耐えていた。

もうすでに何度も何度も味わった痛み。身体の底からまるで自分が引きちぎられてしまうような痛みだ。しかし何回ものループの中で、この痛みが強ければ強いほど力は促進されているのは分かっていた。

もちろん力を使えば使うほど、どんどん呪いは進行していく。よくある呪い。

「お願いだから、あと1日だけ持って……」

自分の身体にそう言い聞かせ、背中をドンとホームの壁に叩きつける。

ホームの壁は一晩でだいぶ破壊されていて、叩きつけるたびに場所を変えていたが、それでも壁のいたるところがへこんでいた。

呪いの紋様はすでに背中全体を浸食し、首の回りや胸などにも広がってきていた。

きっとこれが眼に見えるタイムリミット。身体が紋様で埋め尽くされた時に私は消えてしまおうと確信していた。

現在の時刻は午前9時半。予告の時間まであと30分。

最後の魔女は昨日出現した時よりだいぶ高度を下げていて、正午には地面に激突するだろう。

これほどの大きさのものが落ちてきたらどうなるのか。私は知っていた。

「もう、これで終わりにする！」

「桃」は背中を叩きつけるのをやめ、最後の魔女を倒す準備に取り掛かった。

この為だけに仕入れたエプロンスカートに拳銃を四丁と弾倉を巻きつけて、腰の周りには爆弾を各種取りつけておく。さらにその裏側に無数の刃物を仕込み、それを腰に巻きつけた。重くはない。この程度の荷重は呪いが最終段階まで進行している彼女にとっては何の意味もなさない。

さらにその上から裾の長いコートを羽織り、その中にも弾倉やナイフなどの近接武器を多数入れた。さらにコートの袖の内側にプッシュダガーを忍ばせておく。

武器はできるだけ多い方がいい。

「これで……」

それにあとアンチマテリアルライフルを背中に背負って、「桃」の準備は整った。

「魔女までの距離は……4000kmといったところかしら？」

それは魔法補正による目測だ。そうでもないとさすがにこの距離で見えるわけがない。

それより記憶が正しければ、そこは大気圏外だ。まあ、魔法少女にとって空気のあるなしはほとんど関係がないし、それは「桃」も

同じだった。

しかし問題は空気がない事より重力が少ない事だった。

魔法少女なら飛んでいけば簡単なのだが、「桃」は飛ぶ事は出来ない。あくまで強化されているのは身体能力だけだ。岩かデブリでもあればいいのだが。

とりあえずワイヤーアンカーを装備しておく。

「君は本当に変わった子だね。」

ふと顔を上げると、そこには真っ白いネコの様なウサギの様な身体をした紅い瞳を光らせる地球外生命体があった。

「キュウベエ……。」

「僕の力を使っても君の経歴を暴けずにいるよ。君がどうしてそんな呪いで身体能力が強化されているのか、なんで魔法少女によるタイムリープに巻き込まれているのかも全然分かっていない。」

キュウベエは魔法少女の全てを知っているわけではない。現に、円環の理や魔女化の事はまったく説明できていないし、魔術だってよく分かっていないようだ。

感情の無いこの生物にとっては魔力を認識する事は容易でも、魔法を理解する事は難しいのかもしれない。

「聞きたい事があるのだけれど、あなたは どうして私を魔法少女にできないのかしら？」

「桃」はかつてのループで何度かキュウベエを探し出し、魔法少女にしてもらうようお願いした事があった。

そうすればこの呪いも自分の力で簡単に解く事ができるし、最後

の魔女だつてここまで苦労せず倒せるはずだと思つたからだ。

「言つまでもないよ。君には魔法少女の資質と言つものがまるで存在しないからさ。」

キュウベエは冷たくそう言い放つた。

「僕たちインキュベーターが魔法少女を作る条件は、その人物の感情エネルギーが一生で消費するエネルギーを上回っている……、つまりエントロピーを凌駕している者なんだ。そうでないと利益がないだろう？ 君が今までで放出した感情エネルギーは君が今までで生活してきたエネルギーを圧倒的に下回っているんだよ。どうして地球の間である君がこれほどまで低い値を出せるのかは僕にも理解不能だが、利益がない以上僕たちは君を魔法少女にはしようと思わないのさ。」

「そう、そういうことだつたの。よく分かつたわ。」

だつたら、今まで変動してきた感情はなんだつたのだろうか？

憎しみだけは負けていないと思つていたのに、それは私の勘違いだつたのだろうか……。

そう思うとなぜか悲しくなってきた。しかし、この悲しみも嘘なのかもしれない。

「ま、魔法少女じゃなくても戦つというのなら僕は止めないよ。あんまりお勧めはしないけどね。」

それも彼らにとって不利益がないからという事なのだろう。

私は駅のホームから出た。

場所は変わってセントラルタワー屋上。

ここから垂直に飛べば恐らく最後の魔女と接触できるはずである。

「桃」は呪いの力を全開にして思い切り足を曲げると、勢いよく屋上の床を蹴った。

瞬間ものすごいスピードで雲を突っ切り、空はたちまち黒く変色していき、すぐに空気が無くなってしまった。

そしてどンドン魔女への距離を狭めていく。

2000kmの辺りのスペースデブリを中継して、スカートからライフルを抜き放ってさらに接近する。

だんだん近くなって来てそれが超巨大であることを再認識すると、「桃」はついに一枚目の見えない壁に阻まれた。

正確には衝撃波を食らった様な強い波が「桃」を襲い、その行く手を阻む。

アンチマテリアルライフルを撃ってみたが、それは数センチと進まないうちに見えない壁に押し返されてしまう。

その波について自分も押し返され、「桃」スペースデブリの一つにドスリと着陸した。

しかしこの一撃で特性は理解できた。

「壁なんて切り崩せばいい！」

「桃」はライフルを背中に移動させると、袖のナイフを手に移動させてしっかりと握る。

そしてもう一度デブリを強く蹴って一気に近づくと、今度は波を感じた瞬間にその波の弱い部分を割り出して、その部分的確に刃を当てていった。

瞬間、ガラスの割れるような破碎音がして、壁が眼に見えて割れていく。

しかし波はまだ止まない。

「次！」

波の隙間を縫うように刃を当てていくと、その部分から眼に見えるほどの波が発生して、共振を起こしたガラスの様に綺麗に割れていく。

何枚も何枚も、とにかく見えない壁に食いついてそれを割り続けた。

何枚あるのかは分からない。むしろ無限にあるのかもしれない。それでも間違はなく自分が死んだ回数よりは絶対に少ない。

死ぬ事を繰り返すよりはよほどマシだ。

「負けない！　ここまで来たんだもの。もう絶対に負けない！」

そう言っただきく振りかぶった一撃が最後の壁を貫き、その向こうにある魔女の本体へと抜けた。

真空中なので魔女が声を発しているかは分からなかったが、魔女は怯えたようにその全身を一瞬だけ震わせた。

「これで終わりよ！」

様子を豹変させた魔女に向かってそう言い放ち、コートやスカート上の爆弾という爆弾を全て魔女の表面にばら撒いて、無数のナイフを投げつけて爆発させた。

爆発は留まる事を知らず、魔女の表面全体を覆うほどのものだ。そんな爆風に「桃」も巻き込まれ、弾き飛ばされてデブリの一つ

に衝突する。

「くはっ……。これで、終わったはず……。よね？」

どこの血管が破れたのか、吐血してしまっただが痛みはもうほとんど感じない。それほどに呪いは進行しているようだ。

もう身体のひとつが自分のものではない気がして、もうすでに終わりが近づいてきている事は分かった。

でも満足だ。私は勝つ事が出来た。

私の命を奪うのは魔女なんかじゃない。生まれてからずっと身体を蝕んできたこの呪いだけが私の命を奪う。それでいい。それが私の望んだ死の形だ。

あんな魔女なんかには私の命をくれてやるものか。

にらんだ先はまだ爆散した爆弾の破片が漂っていた。その多くが綺麗に流れ星と化していく。

最後に私も、あんな綺麗なものになれたらいい。そう思って「桃」はデブリから手を放し、地球に落下し始めた。

しかし「桃」が落下し始めた瞬間、爆片の中で何かが揺らめいた。

「そんな、まさか……。！？」

瞬間、魔女のランスの様に細長い腕が「桃」の身体を貫いた。

彼女は特に痛みを感じていなかったが、口から血を噴き出して、急速に落下を始める。

「あれだけの攻撃を食らってもまだ死なないというの！？」

そう言っている間に腕が引き抜かれ、元の位置へと戻っていく。
そこには「人」がいた。

「……悪魔ですとでも言いたいの？」

それは今までで最も身体の構造が人間と似ていて、そして自分たちよりも少し大きい身体に6対の真っ黒い天使の羽を付けている。身体には黒くて薄い布を付けていて、身体もどうやら人間と大差ないようだ。

「分かりやすくなったわね。これで戦いやすくなった！」

「桃」は手近なデブリにアンカーを打ちこみ、近くのデブリへと着地する。

しかし魔女は一息つかせる事を許さず、「桃」が着地した瞬間にその腕をデブリに向けて放たれた。それは「桃」を外れ、デブリを砕く。

「桃」はさすがの瞬発力で一瞬のうちに他のデブリへと飛び移っていた。

「残りの武装はライフルがあと一発と、拳銃が26発……。」

それに今持っているナイフ一丁だけ。

しかしこの距離ではナイフや拳銃は射程圏外だし、ライフルもとても当たるとは思えない。

魔女は自分のいくところを追従して攻撃をしてくる。

だっただらもう……

「正面突破しかない。」

「桃」はすぐさまコートを脱ぎ捨て、エプロンスカートを剥いだ。拳銃一丁とナイフだけを手に持ち、次のデブリで魔女へと特攻を仕掛けるのだ。

魔女の攻撃は重いが、避けられないものではない。故に身軽になった彼女が近づくには簡単だ。

「これで終わり！」

「桃」は魔女への恨みをすべてそのナイフに乗せて、顔に向けてそれを突きだす。

しかし魔女へと一撃が通るか否かのところでナイフの切っ先から波紋が広がった。障壁が復活していたのだ。

一瞬のうちに押し戻され、地球へと落下し始めた。

それに追い打ちをかけるかのように魔女の腕が彼女の首を捕まえ、翼が槍の様に伸び、彼女の身体を串刺しにした。

「ああ……」

痛みなんてもう感じられなかった。

自分の身体を異物が貫通している事は分かる。だけど、その程度だ。まるで最初からそこには穴が開いていたかのような感覚で、そこになんだかとても気持ちの悪い何かが当たってるだけ。それだけとしか思えなかった。

この世界で最後にすることのどこに意味があるのだろうか。

次の世界ではもうどこに行けばいいかも分かっているし、この魔女の性質だって全部分かる。

もう何度も死を体験した。

だからもう、何度死んでも同じじゃないか。

力尽きた「桃」を魔女は思い切り投げ飛ばした。

21、少女は戦い、そして消える。(後書き)

最後に近づくにつれてだんだん力尽きてきているような気がする。
あと2、3話くらいだけでもつのかこれ・・・？

次回は・・・

まあ言うまでもないかw

22、円環の理に導かれて？（前書き）

更新が不定期になりつつある・・・。

それだけリアルが忙しいという事は分かって欲しい。

感想、評価よろしく願います！

22、円環の理に導かれて？

ミナト達が最後の魔女の魔力の変質に気付いたのは午前10時を少し過ぎた辺りの時間だった。

異変に気づいて空を見上げてみると、あれだけ大きかった魔女が消えていて、代わりに「桃」と悪魔の様な翼をもった魔女が戦闘をしていた。

「あの子！ 死ぬわよ。」

マミがそう言ってベランダから一気にセントラルタワーの方まで飛んで行った。

杏子はすでにこの町から離れていて、ミナトとまどかとはむらは結局飛ぶ方法が見つからなかったミナトのために作戦会議を開いていた。

しかしミナト達も相談する事もなく、すぐにマミの後を追いかけてセントラルタワーに飛翔する。

「早くいかないと手遅れになるわ。明らかに魔女が押している。」

ほむらはタワーへと飛翔しながら「桃」の戦闘の様子を見ていた。

「桃」はワイヤーアンカーやナイフを使ってデブリ帯の中で器用に戦っていたが、魔女の攻撃はほとんど受け流すような形になっている。

「見てもらえないよ！ もうやめてー！！！」

まどかがそう叫ぶが、念話は圏外だし声はもちろん届かない。

そうしている間に「桃」が一つのスペースデブリに降りた瞬間、方向転換して真っ直ぐに魔女に向かって行った。

そのナイフで魔女の頭部を狙い、突きを繰り出した。

「ダメだ！ 障壁がある！」

その攻撃は案の定障壁に阻まれ、しかしそれを予想していなかったのか「桃」はあっけなく跳ね返されてしまった。

そのまま大気圏へと突入しそうになるが、そこを魔女が捕まえ、さらなる追撃を与えた。そして勢いよく地表に向かって投げ捨てられた「桃」は、魔法の効果で燃え尽きる事はなかったが、流星のように紅い光りを纏って地表へと落下し始めた。

「マミさん！」

「任せて！」

マミはそう言って胸のリボンを解き、天高く投げ上げて重ねて大きなクッションを作る。「桃」は長い距離を落ちてきて、そのクッションに包まれて止まった。

「しまった。魔女が気付いたみたい。降りてくるわよ！」

「ほむらちゃん、空中で迎撃するよ！ もし見滝原に降りられたらどうなるか……。」

まどかが先にセントラルタワーから飛び立ち、ミナトもほむらの腕を掴む。

「一回だけよ。それ以上やって死んだりでもしたら私が許さない。」

ミナトの魔力剣を使った最大威力の斬撃を浴びせる。
しかし、最強の魔女を倒すという事はそれなりの魔力を使うとい
う事だ。一発でもかなりの量になるはずだ。

「分かってる。大丈夫だよ！」

それだけ聞くと、ほむらは真っ白い天使のような翼をはばたかせ、
一瞬のうちに天高く飛行していく。

翼と言ってもそれは見かけだけで、実際は魔法による飛行なので
空気の無い宇宙に出ても飛ぶ事は出来た。魔法と言うのは形からな
のだ。

下を見てみるとすでに日本の島全体が見えていて、その後数秒と
しないうちに地球全体が見えるようになった。

「ずいぶんゴミが増えてきたわね。そろそろ2000kmといった
ところかしら……？」

もちろん空気はないので念話による会話だ。

「宇宙って意外と暗いですね。太陽とかあるからもうちょっと明る
いかと思ったのに。」

「そうね。でも現実はこのなもの。私たちは魔法が使えるけど、も
しかしたら普通の人にはもっと暗いかもしれないわ。」

宇宙はひどく寒かった。魔法がなかったら凍えてしまいそうなほ
どだ。まあ、魔法がなかったら凍えるどころか死んでしまうのだけ
れど。

それにしても、もしかしたら宇宙は狭いのもかもしれない。

この位置までもものの20秒ほどで来てしまうなんて、科学的に考えたらありえないけど。もしキュウベエ達の星でこの魔力が見つかったように地球でも魔力が普及しだしたら、実は異星人がいる惑星だってそう遠くないのかもしれない。

星との距離は光の速さでも何年もかかると言っが、魔力だとなんのだらう。

しかし、そんな思考をさえぎって念話が届いた。

「ミナト君、ほむらちゃん！ そろそろ魔女が攻撃を仕掛けてくると思うから気を付けてね！」

「了解。」

2500kmを超えた辺りにその魔女は待ち構えていた。さきほど「桃」と戦っていた人型ではなく、薄っぺらな巨大な隕石に戻っている。

こっちが魔法なしでも視認できるくらいの距離になると、魔女の方からも次々と攻撃が降ってきた。

ほむらはミナトの分もちゃんと考慮してローリングしてその攻撃をかわし、どんどん魔女に近づいていった。

「ミナト、お願い！」

「了解です！」

ほむらは魔女に向かってミナトを放り投げ、自分の弓矢を取り出して魔女の攻撃を防ぐ。

僕は魔力剣を抜き放ち、迫りくる攻撃を切り伏せながら近づいて

いく。

魔女はそれに対応して僕を優先に潰そうとしてくるが、それはほむらさんたちに防御を任せた。

僕は魔女のところまで最低限の魔力消費で行って、そして必殺の一撃をお見舞いしてくればいいのだ。

攻撃はすべて受け流した。少しでも魔力の消費を抑えるために、そこまで飛翔してきた分の運動エネルギーだけを使って推進する。周りのスペースデブリが魔女によって操作されてこちらに向かってくる。その攻撃をかくぐりながら減速すると、魔女の障壁の前までたどり着いていた。

「全力全開の一撃、通ってくれよ！ はあああああ……」

僕は圧倒的魔力量にも耐えうるほどの太く長い柄を両手で前に構え、魔力をどんどん流しこんでいく。

流し込まれた魔力は後から後からあふれ出し、なかなかまとまらない。どうにも魔力のコントロールができていないようだった。

「ミナト君、頑張つて！ 杏子ちゃんに言われた事を思い出して！」

「……魔力球を長く引き伸ばす！」

まどかさんに言われて思い出したのは、いつか杏子に言われたアドバイスだ。

魔力球にするのは簡単だ。

魔術で集束させればいい。その方法は今回の事件が教えてくれたではないか。

辛うじてでき上っていた小さな魔力球の周りに魔力によって五角形が描かれ、すぐに拡散していた魔力が集まりはじめてやがて大き

な魔力球となる。

「引きのばす……。」

そう言うつと魔力球は僕のイメージに従って太く長く、10m、100m、1kmと伸びていく。

そうして出来上がった魔力剣は8kmを余裕で超えていて、先はもはや見えなくなっていた。

「これで終わり！」

魔女もこれに怯えて少しづつだが後退していた。しかし、いまさら許してもらおうと言ってもそうはいかない。

僕は無情にもその大きな魔力剣を振りかぶり、勢いよく一撃目を振り下ろす。

剣は僕の魔法によってあっさりと魔女の障壁をそぎ落とした。何枚も重ねられていたはずの障壁がまるでリンゴの皮の様に剥がされ、魔女はさらにおびえた様子を見せた。

「次！」

剣を反して魔女の隕石部分を真つ二つに切り裂いた。そして数回返して隕石をぶつ切りにしてやる。

すると次に現れたのは「桃」と戦っていたあの小さな人型をした悪魔の様な魔女だ。

「容赦なんてしないで一気にやりなさい！ もうあなたのソウルジエムが……。」

「容赦なんてしない！」

黒く染まってきたソウルジェムを見て、自分の力はこんなものかと絶望している暇はない。

魔女がけっこうな速度で飛来してくるが、僕はそれすらも剣を反すだけで葬る事が出来る。それだけの魔力を今放出しているのだ。

魔力剣を反すと、その太さはもはや魔女の大きさなどはるかに上回っていた。

「なんて魔力。まどかにも匹敵するかもしれない。」

「デヒヒ、なんかミナト君が強すぎて私が出る幕がないよ。」

もはやこれでは「斬る」ではなく圧倒的魔力量で潰すといったような感じだったが、どちらでも同じだった。

魔女は魔力剣に触れるとまるでマグマに触れた水のように一瞬で霧散していく。

それはやはり斬るというよりは消し飛ばすという表現が正しかったが、どうやら魔女は消滅したようだった。

しかし……

「どうしたの、ミナト君？」

何かがいつもと違う。いや、むしろ変わっていないのかもしれないが、なんだか変だ。

どうにも説明しづらい変な気持ちが残っている。

もしかしたらソウルジェムが濁っているせいかもしれないが、ミナトの直感はそのではないと告げていた。

「なんだか……」

上手い言葉が出てこなくてそこで言葉を詰まらせてしまう。

「悪い予感がするわね。どうにも首尾よすぎる気がするわ。まあ、
ミナトの魔法は元からそういうものなわけだけど……。」

この気持ち悪い何かはなんなのだろうといろいろ思考を巡らせて、
まどかと目があつた時にふと思った事を口にしてみた。

「魔女が消えたのにどうしてまどかさんがここに居られるんですか
……。」

まどかさんは自分もたつた今気がついたかのように「あっ」と声
を上げる。

「待って二人とも！　もしかして魔女はまだ生きてる！」

そう言ったまどかの後ろに先ほどの人型の魔女の影が現れたのが
僕の方から見えた。

「まどか危ない！」

とっさに叫びながらまどかを弾き飛ばすと影から実体へと変化した
魔女の腕が僕の腹を貫いた。

「っはっ！」

盛大な吐血と共に僕は地表へと落下していく。

僕はとっさに発動した治癒魔法によってソウルジェムを黒く染め

た。

天使が二人も手を伸ばしてくれているというのに、手を取る事がもうできないなんてと思うと急に悲しくなってきた。

どうやら僕はかなりのスピードで落下しているようだ。すぐに地表に衝突してしまうだろう。

いや、円環の理に導かれる方が先か。

「まどかさん。ごめんなさい。僕もう無理みたいですね。」

身体を動かせないからソウルジェムは見れなかったが、どうやらもう許容量を超えたらしい。もうぜんぜん魔法が使えない。

「僕を導いて下さいよ。円環の理で。」

僕の目の前がブラックアウトした。

「ここはどこだ?」

真っ暗な空間で僕は目を開いたが、すぐにそれは無意味だと分かっ
ってしまい、再び目を閉じる。

「リッー!」

誰かが人を呼んでいる声がする。だけど、リツって誰なんだろう？
この空間には僕以外の誰かがいるのだろうか？

「リツ！ 早く起きなさい。」

その声と共にバシリと鳩尾を叩かれ、僕はのけぞる。その時に何かがずれて、僕の眼に光が差し込んだ。

「リツ、やっと起きた？ さ、早くご飯食べて。」

「……？」

目が開くとそこには見知らぬ天井があった。シミ一つない真っ白な天井。まるで新築のマンションの様だ。

周りを見回すと物が散乱していて、部屋の中はとても片付いていないと言えない状況であった。

「早くご飯食べないと学校遅れるわよ？」

部屋の扉のところでそういうのは見知らぬ大人の女性だ。

どこで会ったのだろうか？ 知っているような気はしても思い出せなかった。

それに学校？ そんなものはとっくの昔にやめたはずだ。

それとリツって誰の事なのか、いや、それは分かっていた。その女性は明らかに俺の事を「リツ」と呼んでいる。

「う、うん。」

とりあえず返事をする。すると女性はニコリと笑って扉から出て行った。

「どづいつことなのだろう？　僕は円環の理に導かれて消滅したはずじゃあ……？」

それにあの女性、どことなく雰囲気はほむらさんに似ている気がする。長い黒髪と言い、すらっとした身体といい、ほむらに似ている。

「どづいつことなんだ？」

とにかく壁に用意されていた制服らしい服に着替えて部屋を出てみる。廊下を奥の方へと進むと食卓があった。

食卓にはすでにサラダやパンなどの朝食らしい朝食が置かれていて、テーブルの向こうにはさっきの女性の夫かと思われるスーツ姿の男がどっしりと座っていた。

「どづいたんだ、リツ。ぼーっとして。」

その男に話しかけられても僕はぼーっとしたまま空いている席に移動して、とりあえず座った。

違う違う。

そつじゃない！

僕は円環の理に導かれたはずだった。そしてこの世から消滅したはずだ。

なのにこの世界はなんだ？　僕が望んだ幸せを見せられても言うのか？

もしそうだとしたらこの女性はお母さんで、この男性はお父さんなのかもしれない。

でも僕にはお父さんやお母さんの記憶は全くない。

こんなのはただのまやかしだ。ふざけるな。
夢なんか見せなくていい。早く現実を返せ。

しかしミナトの願いはどうかやら世界に聞き入れてもらえなかった
ようだった。

22、円環の理に導かれて？（後書き）

不思議な世界に囚われてしまったミナトは脱出できるのか・・・？
呪いが完成してしまった「桃」は・・・？

そしてほむらの時間操作はどうして再び作動したのか？

まどかはどうしてこの世界線の未来を読めないのか？

杏子、マミの容体は・・・？

そのへんを全部あと5話くらいで終わらせます！

次回はVS最後の魔女。

更新予定日は金曜日です。部活&塾で遅くなるか更新できないかも
しれないけど、一応更新する予定！

23、最後の魔女は最強だ。(前書き)

まとまらなかった。

今回はマジで没にしていいくらいのものなので、あとで気力があれば書きなおします。

— 感想等よろしくお願ひします。

23、最後の魔女は最強だ。

マミはセントラルタワーの真上でリボンを重ねて「桃」を受け止めた時と同じ様に柔らかくミナトを受け止めた。

しかし受け止めたのは身体だけで、彼の身体からはすでにソウルジェムが欠如していた。

「円環の理に導かれてしまったのね。」

ほむらがまどかの方を見るが、まどかにはどうしようもない。

円環の理とはこの宇宙に設定されたルール、物事に例外なく働く力、概念なのだ。だから円環の理はすでに彼女の力でどうこうできるものではなくっている。

「早く戻らないと魔女が急速に降りてくる可能性が……。」

「そうだね、マミさん。私たち、もう一回行くね。」

「待ちな……さい。」

まどかとほむらが再び飛び立とうとしたその時だった。セントラルタワー屋上の隅っこに寝かされていた「桃」が起き上がり、まどかの足を掴んだ。

「桃」の身体は呪いによってもうほとんど元の色を保っていない。紋様によって黒く塗りつぶされている。

辛うじて残っているのはその顔くらいだ。

「あなたはもう限界でしょう？ それ以上戦うとどうなるか分からないわ。」

「死んだかと思っただけど、私は生きてた。だから、死ぬまでは絶対にあきらめない！」

それだけ言うと、「桃」は武器も何も持たずにその身一つで再び魔女に向かって跳躍した。

魔女はすでに隕石へと変身していた。

この状態ではあまり大きな攻撃はしてこないと分かっているので、「桃」はデブリの一つに着地した。

「この魔女だけは私が倒す！」

一つだけ勝算があるとすれば、私の呪いが最大の力を発揮した時に得る力だ。

もうすでに首全体が黒く染まっており、だいぶ進行しているのは見て取れる。もうそれほど時間の余裕はない。

だけど、私はあえてその先へと行こうではないか。

「はああああああ……！」

そんな掛け声でも出している気にもならないと身体から皮が剥離する様な激痛には耐えられなかった。

「もう、勝利以外何もいらない！」

こんな風に勝てない相手に永遠に苦しむくらいならもう、死だっ
ていらない！

全てを捨てて、私は私の目的だけのために私を犠牲にする！

「だから、今をもちこたえてみせる。」

そんな願いを込めて魔力を放出すると、ついに紋様が顔にまで浸食し始めた。

浸食された髪は真っ白に染まり、もう何が何だか分からなくなってくる。

頭の先まで黒く染まったところで私はどうやら私ではなくなった。もう激痛も感じない。何も感じない。自分と言う存在がこの世から消えてしまったようだ。

「いくわ!」

紅くキラリと光る眼が大きな身体を持った魔女を捕え、威圧するように細まる。

次の瞬間「桃」が腕を大きく振りかぶったと思ったら魔女に向かって跳躍し、貫き手で魔女の障壁を一気に破壊した。

障壁を力づくで殴り割っている姿は最早人間ではなかった。

その拳は獰猛な獣とまるで変わらない恐ろしさを帯びて、障壁に大きな振動を起こしてまるでプラスチックの様にバリバリと割っていく。

「おりゃあ!」

最後の一枚がやはり簡単に破られ、人型魔女は「桃」を拒絶するように手を伸ばした。

「桃」はその手すら打ち砕き、魔女の顔面に一発拳を打ちこんだ。しかしものすごい勢いで撃ちこまれた拳は魔女の身体をすりりと抜けて、後ろのデブリを破壊した。

「外した!？」

違った。確かに「桃」の腕は魔女のいる空間にはあったが、拳は細分化されて密度が低下した魔女の身体を突きぬけていた。

はずしてはいなかったが、「桃」にもう勝機は無かった。さっきの一撃で最後の力を使い果たしたようだ。

紋様が広がるのはまた別な、痛みが彼女の精神を襲い、浸食していく。意識がどんどん薄れていき、彼女は彼女じゃなくなっていく。

「ああ、終わりか。」

今度こそ、本当に終わり。

彼女の思考はそこで終わった。

まどかとほむらは「桃」をすぐに追いかけて飛んだが、「桃」のほうで魔女の位置まで到達するのが早く、まどかたちは全速力で飛んでも「桃」に追いつく事はなかった。

しかしどういふことか。まどかでさえ破れなかった魔女の障壁があんなにたやすく破られているのだ。

納得がいかない。

まどかは最強の魔法少女だったのではなかったか。もちろんこの世に顕現する際にだいぶ弱くなつてるといふ事は聞いていたがそれでも魔女に勝てるだけの力は持っているはずだ。そうでないと意味はない。

「あ、「桃」ちゃん！」

まどかの声に反応して空を見てみると「桃」が電池が切れたように動かなくなっていた。そして重力に引かれて落下を始める。

やがて自分たちと入れ違いになり、私たちは上へ、「桃」は下へと落ちて行った。

「マミに任せましょう。まだ辛うじて生きてると思うわ。」

マミが彼女の呪いを解けるかどうかは分からないが、少し和らげる事はできるはずだ。

まずはこの目の前にいる魔女を倒さなければ。幸い、一番厄介な障壁は「桃」が全て壊してくれた。

あとは魔女本体だが、実際どうすればいいのかと言つのは思いつかなかつた。

ミナトが魔力で吹っ飛ばしても無傷で再生してしまったのだ。そんな奴をどう倒せと。

何もしないわけにはいかないので私とまどかはとりあえず魔女に向かつて矢を放つた。しかしそれは魔女の身体をすり抜けて宇宙空間へと放り出される。

「あいつ、不死身なの？」

「攻撃が当たらない。どういうこと？」

矢が通つたところは確かに穴が開いていたが、手応えが全くないのだ。まるで水の中に手を通した様な感じで、矢が摩擦もなく突きぬけていく。

しかもすぐに元に戻る。ダメージなんかあるはずもない。

「まどか、何か対策は？」

「……ないこともないんだけど、それをしたら周りへの被害が……」

魔女の身体はこの次元ではどうやっても倒せないだろう。ほぼ絶対の威力を持つまどかの矢でも、ほぼ絶対の切断能力を持ったミニトの刃で切っても倒れなかったのだ。

なぜどちらも効果がなかったか。それは当たらなければ意味がないからだ。

ならば存在ごと切り取って別次元でそれを討ち滅ぼせばいい。しかし、存在を切り取るなんて真似をしたらこの宇宙ごと消えてしまう可能性もあるのだ。

「あるのね？ 大丈夫よ。まどかならきつとできる。」

ほむらはまずまどかの手を取り、世界から時間を切り離れた。

「分かった。やってみる。」

まどかは手のひらを魔女に向けて、魔力弾の様なものを放つ。それは魔女に当たる前で止まり、一瞬大きな爆発を生み出したかと思うとすぐに収束して今度は空間を歪めていった。

それは巨大な重力で魔女を引きよせて潰していく。別次元へと転送している様子はそんな感じだった。あとは別次元でまどかが魔女を消せば落着する。

まどかは魔力球の中に自ら飛び込み、その直後ブラックホールの様な魔力球は消滅した。

「確かに私の時間停止がなければ危なかったわね。」

さきほど観測した魔力球の吸引力はものすごかった。時間を停止させていても物体に触れずに動かせるほどのものだ。もし時間を停止させていなければ地球を丸ごと吸い込んでいたかもしれない。

ほむらはそんな事を考えながら地上へと降りていく。おそらくまどかは別次元で魔女を倒したらもうこの世界には出現しない。だから、この戦いは終わったのだ。

「暁美さん！ 鹿目さんは？」

降りてくると巴マミが真っ先にそう尋ねてきた。人が一人消えているのだから、心配はして当然だ。

ほむらはとりあえずまどかの事は適当にごまかすことにする。

「残念ながら……」

あれ、でも完全にこの世界から消えてしまっているならまどかの事は覚えていられないはずでは……？

なぜならまどかと言う存在そのものがこの世から消えてしまっただらだ。

存在が消えるということはただその人の姿が見えなくなる事とは違う。過去から現在、未来までもが消えてしまうのだから、彼女は他人の記憶に残る事が出来ない。

なのになぜ、巴マミが彼女の事を知覚できるのか。

それはいたって簡単だ。

魔女をまだ倒す事が出来ていないからだ。

「マミ！ 今すぐこの場所から離れて！ 魔女が来るわ！」

しかしその警告は間に合わなかった。

さっきの収束とは真逆の大きな爆発が見滝原上空で起こり、その場から先ほどの悪魔の様な魔女とまどかが飛び出てくる。

「まどか！」

魔女の手はまどかの首を油断すれば首が引きちぎられそうなほど強く掴んでいた。その中でまどかははずたぼろになって必死に抵抗していたが、どうしても拘束から抜けられないようだ。

しかも拘束を解けないどころか彼女の意識はどんどん薄れていていた。

「マミ！ あなたは逃げて！」

「分かったわ！ 気を付けて。」

マミは「桃」だけを担いでセントラルタワーから飛び降り、そのまま遠くの方へと飛んでいった。

魔女がそれを追撃するかと思っけて弓を構えたが、どうやらそれはないようだ。去る者は追わない……か。

「まどかを放しなさい！」

楯の中から拳銃を二丁取り出して、一気に魔女に近づいて発砲する。しかしそれは先ほどと同じ様に魔女の身体をすり抜けてどこかへと飛んでいってしまった。

撃つ、斬る、叩く、一切の動作が無効。

そんな敵にどうしていいか分からず、ほむらはただがむしゃらに戦闘を続けた。

魔女はまどかを人質のように前に出してくる事はなかったが、ほとんど力が増しているようで、そう長くは持たなさそうだ。まどかを助けなければいけないという使命感がまたほむらの思考をマヒさせた。

しばらく何も動きがなかった魔女は一瞬だけその眼を光らせて、光線をほむらに向けて照射した。

凄まじい威力の光線をほむらはとっさに楯を使って防御したが、その重さに負けて地表まで一気に落とされた。交差点の堅いアスファルトに背中を打ちつけ、吐血する。

「く……。このままじゃまどかも私も死んでしまう。」

ほむらは楯に手をかける。

「それには及びません！」

聞いた事のある声が楯の機能を発動させる動作を止めさせ、その直後、私の目の前に大きな魔法陣が描かれ、魔女からの攻撃を止めた。

もし魔女からの攻撃が通っていれば私は間違いなく首を持っていかれていただろう。

そしてそうになったらどうなっていたのだろうか？ そう考えるとぞっとした。

「なんとか間に合いましたね。」

男はほっとしたのか笑みをこぼした。

23、最後の魔女は最強だ。(後書き)

一応流れとしてはミナト死ぬ「桃」が死にそうになる。まどかとほむらが魔女と戦う。死にそうなところを最後に出てきた謎の人物によって助けられる。というふうにしてたんですけど。上手くいかなかった。

次回はミナトの夢の続きを・・・

24、魔法少女のくちづけ（前書き）

最近忙しくて更新できなくてホントごめんなさい！
ついでにもう二週間くらい休みください。
定期テストがあるので勉強してきます！
よろしく願います！

感想よろしく！

24、魔法少女のくちづけ

「リツ？」

母親と父親が僕の顔を不思議そうに覗いてくる。

きつといつもと様子の違う自分を心配してくれているのだろう。僕には両親の記憶が全くないが、それくらいは分かる。

僕が悩んでいて、それを心配してくれる親がいて……母親のいう学校に行けばきつと友達もいるのだろう。

そうだ。これもある意味僕が憧れていた生活なんだ。

でも僕が望んだのはこんなものじゃない！

僕はある意味生まれた頃から「魔法少女」で、人間だった記憶なんて一切ないんだ。

だから僕は人間が人間として人間らしい死に方を望むように、「魔法少女」として「魔法少女」らしい死に方があると信じていた。

円環の理に導かれたり、ソウルジェムが砕かれて成仏もできないまま存在が消えるのでも僕はかまわない。

だけど人間のように死ぬなんて絶対に嫌だ！

「リツ？」

「僕はそんな名前じゃない！」

母親と父親の身体が硬直した。

「何を言っているの？ あなたの名前は奥村リツよ。もう14年間

そう呼び続けてきたのよ？」

「違う！ 僕はミナト。3年前に「魔法少女」として生まれて以来、僕はずっと僕だ！」

僕はソウルジェムを呼び出そうとしたが、そんなものはどこにもなかった。そんなはずはないと思って手探りで探しても僕の身体には何もついていない。

この世界は本当に再構築でもされた世界なのか。

そうでもなければ僕の身体からソウルジェムが消えるなんて絶対あり得ない。

「魔法少女」だと、なんだそれは？ お前は男だろうが。」

父親は新聞紙をたたみ、真剣に話を聞こうとしているようだった。

分かっているのか？ この世界は僕が構築した世界ではないのか？ であつたなら魔力もない僕がこの状況を打開できるのか？ いや、無理だ。

しかし、がむしゃらにでも何かしなければならぬ。

もしかしたら外に出れば現実の世界が待っているのかもしれない。僕の心はそんな簡単な問題ではないと言っている。しかし思った事を試す他、僕にはもう道が残っていないかった。

「リッ！ どこへ行く！」

僕は結果逃げるように自宅を後にした。

どうやら両親は追いかけてきているようだ。ちくしょう。魔力がないから全く早く走れない。このままじゃ追いつかれる。

このままではいけないと僕は物陰に隠れて両親が見失うのを待った。

両親はしばらく辺りを見回して僕を探していたが、そのあと二手に分かれて再び僕の事を探しに走っていった。

「何とか逃げ切れたようだな。」

しかし、結局外に出たところで何も変わらなかった。僕は何をすればこの状態から解放されるのだろうか？

そんなことを考えながら行き着いた先は大きな川の河川敷だった。

「リッ！」

先ほど聞いた女性の声が入から聞こえ、僕は即座に逃げようかと立ちあがった。

しかし立ちあがったところで僕の動きは止まった。

「リッ。お母さんとお話しよう？」

母の手の上には僕の持っていたのと同じ輝きを持つソウルジェムが乗っていた。

「お母さんね。実はリッの事……いや、ミナトのこと知ってるの。」

僕は驚きのあまり、せつかく芝生に腰かけたというのに再び立ち上がってしまった。

「なんでさつきは言わなかった？ …… 父さんがいるからか。」
「そう。お母さんはね、あなたもよく知っている暁美ほむらさんの記憶を持っているの。信じてもらうためにミナトとの記憶を話すわね。」

「その前に、この世界の事を教えてよ。」

母親が暁美ほむらの記憶を持っているとしても、それは世界の存在の仕方によつては意味がない。

これが夢なのか、幻覚なのか、現実なのか。

そこだけははっきりさせておかないと母親の話も意味が無くなってくる。

「分かったわ。この世界は現実、天国とでも考えればいいわ。」

「天国？ それって現実なのか？」

「天国だって死人が存在できる立派な世界の一つ。といつてもここは天国と現世の境。簡単にいえばミナトは今臨死体験しているってこと。」

臨死体験。杏子に殴られた時ののは幻覚だった。それとは違つたのだらうか？

違つただらうが、それより問題は臨死体験だというのに自分が望んでも元に戻れないという事だ。

「それよりほむらさんの記憶について。」

「無条件で信じるから話を進めて。」

そういつと母親は少し不満そうな顔をしたが、どうやら分かつてくれたらしい。

「私かなぜ記憶を持っているか。それはおそらく、最後の魔女に勝

てないとほむらさんが時を戻してやりなおそうとした時に、魔法の攻撃によって首が取れてしまい、記憶だけが私に飛んだ。そういうことなの。」

「つまり最後の魔法にほむら先輩は何度も殺されているという事か。」

「そういうことになる。だから私は彼女の願いを叶えるべく、魔法少女になってあなたを生んだ。結果奥村リツは魔法少女になる以前から魔力を持っていたわ。だけどそれを世間は気味悪がってあなたを追い詰めた。あなたがここに来たという事はそれも全部計算通りに行ったようね。」

「僕の魔法少女になった理由？」

きつと母親に記憶されているほむら先輩の記憶は前回の一回分だ。それより前はきつと時間が遡るだけで記憶は母親に引き継がれなかった。

だから前の世界には僕が存在しない。

「魔法少女になるように仕向けたのか。僕をわざと不幸にして。」
「私も心が痛かったけど、しょうがないでしょう？　そうでもしないと状況は変わらないもの！」

しかし僕がせめても意味はない。僕は奥村リツの記憶を持っていないから、そもそも追い詰められた記憶すら覚えていない。

しかし状況が変われたのは前回の世界でほむらの首が飛んだ時に記憶が偶然奥村リツの母親に飛んだせいだ。

これは今回を逃すともう最後の魔法は倒せない事を意味するだろう。

「そう。今回以外に最後の魔法を倒す機会はないわ。」

「でも、僕は下界に戻れない。今回も失敗に終わったのではないか？」

臨死状態だというが、戻れないのならそれは死同然だ。

「私が魔法を使えばミナトを下界に下ろせるわ。」

「じゃあなんで早く下ろさないんだ！ こうしている間にほむら先輩の首が飛んだら元も子もないだろう！？」

「約束してほしいの。」

約束？

「絶対に彼女を守って、世界を守って！ 全てを守って！」

そんなの言われなくてもやるに決まっている。今さら何を言うかと思っただが、実際問題、どうなのだろう？

僕は今まで彼女達を守れた事があっただろうか？

結局無いのだ。守る守られるの関係だと言っても、未熟な僕はまだ守られっぱなし。

僕は自分自身を守るのに精一杯なんだ。

しかしそんなことおかまひなしに母親は僕を抱き、加護を施すように僕の額に口づけをした。「桃」にあったのと同じ魔法少女の紋様が僕の手の甲に刻まれた。

「私の魔法は言葉を操る魔法。あなたが強い決意とともに言葉を発したらその通りになるわ。あなたがこのまま行きたいと言えばそうなるし、帰りたいと思えばきつとそうなる。決断するのはあなただから。いいように転ぶ事を祈るわ。」

母親がそういうと周りの景色がフツと消え、真っ暗な空間になる。

僕は下界に戻るべきだ。僕が戻らないと魔女は絶対に倒せない。

一か月前から今日までの時間が延々と繰り返されるだけだ。

しかし、本当に戻れるのだろうか？ 戻ってどうなるのだろうか？

帰ってもおそらくソウルジェムはもうない。魔力を使い果たしたからだ。

きつと、僕が臨死体験をしているのはあのソウルジェムが奥村リツの願いによって生み出されたもので、僕の願いはまた別のものがあるから、奥村リツが円環の理に導かれて逝ってしまったからだろう。

とにかくソウルジェムがないのでは僕はもう戦えない。

戻るのに母親がくれた魔法を使えば、おそらく効力は切れるだろう。

戻っても意味があるのか？

それだったら天国に行つて奥村リツの理想だった生活をした方がマシなのではないか？

そんな考えを頬を叩いて吹き飛ばそうとする。

ダメだ。

僕は戻らないとダメだ。絶対に弱音を吐いちゃいけないんだ。まだ彼女達に何もしてあげられてない。だからこれ以上何もしないのはダメなんだ。

「僕はまだ何も守れていない。だから僕はこれから今までの分も守つていかなくちやいけないんだ。だから僕を下界に返せ！」

「キユウベエ。僕の願いを叶えろ。」

下界で目を覚ました僕の横にいたのはいつか奥村リツが契約したのと同じ白い猫の様な形をした小さな動物。

僕はそいつを見るなりそう言い放った。

「やれやれ、乱暴だね。だけど僕はそうなると思っていたよ、ミナト。さあ、時間が無い。君の新たな願いはなんだい？」

「僕が守れなかった全ての物を守る力が欲しい。」

「単純な願いだね。だけどその願い、確かに叶えたよ。さあ、受け取ってごらん！ 君の新しい力だ。」

魂が分離する感覚はもう痛くもなんともない。

魂が物体となり、前と同じ色に輝いている。僕はそれを手に取り、新たな力を即座に解き放った。

ミナトの身体に割と軽目の甲冑が装備され、その上からローブが覆う。右手には短い木製の杖が握られていて、そのほかには目立った装備は特になかった。

「さあ、君が守りたいものを守るがいい。」

言われなくてもそうする。

僕が杖を一振りすると僕の下に円陣が現れる。その中には幾何学的な模様が描かれていて、パツと見ても魔術のための魔法陣だった。僕はそれによって瞬間的に移動した。

ほむらは交差点の堅いアスファルトに背中を打ちつけて吐血していた。

もうまどかが力尽きるまで数秒とないだろう。そうなる前にとほむらは楯に手を伸ばした。

「それには及びません！」

瞬間ほむらの目の前に大きな魔法陣が描かれ、魔女からの攻撃を止めた。

それはほむらの死角からの攻撃だった。もし今の防御がなければほむらの首は飛んでしまっていただろう。

「なんとか間に合いましたね！」

「ミナト!？」

ほむらがミナトを確認するとほぼ同時にまどかを捕まえていた魔女の腕が魔力の斬撃によって切り取られ、次の瞬間魔法陣がまどかを挟み込んでほむらのすぐそばに転送した。

まどかは弱ってはいたが、命に別状はなさそうだった。

ミナトはそれだけ確認すると、また杖を一振りして自分の真下に魔法陣を出現させた。

「それじゃあ魔女を倒しに行ってきます！」

24、魔法少女のくちづけ（後書き）

あともう2話くらいですよ！

クライマックスつってやつです！

しかし徐々に力尽きていつている感がw

それでもちゃんと最後まで書いてから終わりますので見捨てないで
くださいね！

次回はミナトVS最後の魔女です。

それでは！

25、新たな理(前書き)

試験終了しました！

というわけで長らくお待たせしましたが、最新話のpです！

感想等よろしく！

25、新たな理

「待ってミナト君！」

飛び立とうとした僕を呼びとめる声の一つあった。

「最強の魔女を倒すってことは、あなたも消えちゃうんだよ？」
「大丈夫です。」

根拠はない。でも、今は彼女達を安心させる言葉が必要だった。僕はどちらにしる行かなければいけない。この魔女を倒す事が出来るのは僕だけなんだ。

僕は鹿目まどかの眼を直視して、その女神の眼光に打ち勝つほどの眼差しを見せつける。

「ホントだね？ 絶対ほむらちゃん達のところに帰ってくるんだね？」

僕は一回だけ頷き、魔法陣に魔力を注ぎ込んだ。

「ミナト！ 絶対帰って来なさい。」

ほむらのその言葉を聞くか否かで魔法陣が発動し、僕は最後の魔法の目の前に転送された。

魔法は人型を保ったままだった。さきほど斬撃で斬れたのはおそらくまどかが別次元でこいつの存在を固定したからだろう。

これで戦いやすいってものだ。

僕の願いは「僕の守れなかった全ての物を守る力」だ。
それをキュウベエはよくある単純な願いだと言ったけど、違う。
僕の守れなかったものはたくさんあるんだ。キュウベエが思っている以上にたくさん。

僕が存在しないせいで守れなかったものがたくさんある。
ほむらやまどかはおちろん。この世界の人間全員いままで僕が存在していなかったせいで守れなかった。

だから、今度こそ守る。いや、次は無いんだ。
絶対守る！　こんなループ、今回で終わらせてみせる！

「もし僕がここでこの魔女を倒せなかったら、それは契約が成立していない証拠だ。勝たせてもらうよ、インキュベーター。」

僕は杖を一振りしてその延長上に魔力剣を発動させる。前の剣よりもさらに細く、長い。レイピアのような魔力剣だ。

「行くぞ！」

初動で魔女ののど元へと高速の突きを繰り出し、先手を取る。
魔女はその速さをもともせず右手で魔力剣を弾き飛ばすと僕に向かつて魔力球を放つ。

僕はそれをシールドで防ぎ、魔力剣をいつもの剣と同じ様に振る。それはいままでの魔法と同じ様に斬る魔法を帯びて、魔女の壁を切り裂き、さらに魔女をも切り裂こうとする。

しかしこれで終わるほど魔女も弱くない。
その斬撃を、刃の部分だけをかわすように身体を変形させて、人間らしからぬ動きで避け、さらに追撃の魔力弾すらも避けた。

普通の攻撃で倒せるような奴ではない。それは変わっていないよ
うだ。

まずはあの動きを封じなければいけない。僕は杖を一振りして魔
女を拘束する。

しかし魔女はその拘束を上手く逃れて僕に体当たりを繰り返した。
もちろん当たったら最後、風穴があいてしまっただろう。

「おつりゃああああああ！」

逃げない！ 逃げる必要はない！

杖を魔女に向かって付きつけ、軽く一振りすると魔法陣が魔女を
包み、トランポリンのようにその身体を受け止めて弾き返した。魔
女は地面に向かって落ちていく。

「これで終わり！」

地面にたたきつけられた魔女に魔力剣を突きさし、ありったけの
魔力を流し込んだ。魔力は魔女の許容量を超えてその身体からあふ
れ出し、霧のように辺りを包んだ。

「こいつを倒すためには目の前の物体を消すだけじゃダメなんだ。」

もつと根本的な部分。この魔女を生み出した負のエネルギーの根
源。それを断ち切らないとこの魔女は消えてくれない。

この魔女もまた永遠のループに囚われて、負のエネルギーを吸い
続けるんだ。

だったらその連鎖を断ち切る。

これは僕の願いじゃない、奥村リツの願いだ。

僕の身体は魔女の身体に溶け込んでいく。そうして僕は人間の負の感情の中に落ちていった。

感情の世界というのは形がない世界だ。

多くの負の感情が渦巻く世界に紛れ込んだ僕もまた、今は形を失くして、負の渦の中で千切れそうになっていた。

他人の感じている事はその人にしか分からない。

他人の感じている事を感じているつもりでも、その感情は所詮自分の物で、その人の感じているものとは別なんだ。

この空間に漂っているとそれが嫌というほど感じられた。

僕以外の全てが理解不能で、混沌としていて、とにかく気持ち悪かった。

「他人の心の中なんて見るものじゃないんだ。」

今僕に紛れ込んだ感情だ。

後悔とか、嫉妬とか、狂気とか、とにかくいろんなものが僕とすれ違って行く。

僕もおかしくなってしまうそうだった。

だけど僕が僕を保てなくなったら、僕まで負の感情に押しつぶされてしまったら僕は僕として存在できなくなって、この中の一員と

なるのだろう。

でも僕は大丈夫だ。まだ大丈夫。

負の感情の渦は僕を巻き込んでグルグルグルグルと回り続ける。

でも全ての感情は個別なんだ。僕が僕として存在しているように、他の感情もきつと個人として存在している。

僕は君たちをも守りたいんだ。

あるところには大切だと思っていたものに裏切られた者がいた。

あるところには人として生きられずに一生を終えた者がいた。

またあるところには自分のせいでこうなったのだと自虐する者がいた。

またあるところには親を、友達を、大切なものを失くした者もいた。

そしてあるところには……。

全員が全員、絶望に満ちた顔浮かべていたり、狂気に満ちていたり。

ねえ、君たちもそんな顔しているの嫌なんだろう？

どうしてそんな顔をするんだよ？

そんなの絶対おかしいよ。もっと笑いなって。

世界には辛いこともあるけど、それよりもいっぱい楽しい事もあるんだよ。

でもそれも君たちの気の持ちようであら変わるんだよ。なんでそれが分からないの？

感情の渦は異端者の僕を押しつぶそうと流れを変えて、全ての感情を僕にぶつけた。

それならそれでもいい。

君たちの感情は僕が受け止めるから、だから元気だしなよ。

そうすればなんでもできる！

魔力の霧が晴れ、そこにはもう魔女はいなかった。

ただ、ミナトが立っていた。

僕はしばらく経っても存在し続けていた。

「あなた、本当に大丈夫なの？ あなたの存在はある意味円環の理と似たモノになっているわけだけど・・・？」

大丈夫だった。自分でも、あのまま感情の空間で他の人の感情と混ざり合って自分が消えてしまおうんじゃないかと思った。誰に覚え

られるわけでもなく、存在が消えて、何もなかった事になるんじゃないかと思った。

「だけど大丈夫だった。」

それはきつとほむらのおかげ。とかいうと言いすぎかもしれない。けど理由が分からなかったので、そう言っておけばカッコよくなくて。

「ミナトおめえ過去と未来、全ての時間軸の負のエネルギーを受け止めてんだろ？ それでおかしくならないなんて逆に変だぞ。」

そうなんだ。僕が全ての負の感情を受け止めているならば、僕はとっくに許容量を超えて破滅しているはずなのだ。

「それはそうなんだけど、なんか別に、前と変わらないって言うか、なんというか……？」

そう、前と変わらないのだ。

存在がなくなることなかったし、感情の流れを感じたりすることもない。本当になんにもないのだ。

「それは私に受け流してるからだよ。」

テーブルの向いに座るまどかがそう言った。

「私がミナト君に流れてきている負の感情を全部受け止めてる。だからミナト君はその感情を感じないの。」

なんで、まどかが全部受け止めているんだ？ 僕は受け止める覚悟があったのに。

「まどか！？ そんな事してあなたは大丈夫なの！？」
「大丈夫だよ。だって円環の理は元から魔法少女の負の感情を受け止めるもの。だから私は大丈夫。」

そんなことよりこれだ。

「なんで勝手に受け止めてるんですか？ 僕は自分でちゃんと受け止めようと思ったのに。」

「それは私がミナト君に生きてほしいと思ったからだよ！ ミナト君が助からない事は、ミナト君が私を助けてくれた時から分かったの。それでもミナト君がやらないとこの世界は救われない。だからせめて私がミナト君の受け止めようとしてるたモノを肩代わりして、それでミナト君が救われる未来を作りたくて……。」

僕があの時ほむらとまどかを救った時点ですでにルートは出来上がっていたんだ。

きっと、僕が全ての負の感情を受け止めようとして失敗したところを見たのだろう。

僕が失敗してもおそらく概念化するだけで、魔女がよみがえったりはしない。

好意という事で受け取っていいのだろうか……？

「……ありがとう。」

「どういたしまして。」

まどかが僕を救ってくれている。また助けられたな。

「そんなことよりミナト、あなたこれからどうするの？ とりあえ

ず魔女の脅威は無くなったけど、まだこの町にいるつもりなの？」「一応、「桃」の呪いを解くまではいるつもりですけど・・・？」

僕は席を立ち上がり、瘴気の溢れている隣の部屋に移動した。

25、新たな理（後書き）

結局新たな概念は生まれませんでしたW

次回は「桃」救出です！

あと2話かなW 1話かも・・・？

26、たいていの物語は別れで終わる。(前書き)

感想よろしくお願いします。

26、たいていの物語は別れて終わる。

正気の満ちた部屋で横たわっているのは「桃」だ。

呪いの進行はとりあえずグリーンフシードで防げる事が分かったものの、それも時間の問題だ。グリーンフシードを全部使い切ってしまったらもうそれ以上どうしようもない。

それと、呪いは「桃」の身体、精神の奥深くまでを浸食している為、風呂場のカビのようにしつこく取れない。

しかし、この状態から救って見せないと僕の願いは叶ったことにならない。

やり方など見当もつかないが、僕がやらなければいけないのだ。

魔法少女のくちづけ。最後の魔女との戦いで臨死体験をした時に現れた僕の母親が使った魔法だ。

その魔法の効果は一度だけそのものの願いを叶えるというものだ。

「桃」は魔法少女のくちづけをされた時、いったい何を願ったのか。何を欲したのか。それが分からないと解くにも解けない。

もしそれ以外にも解く方法があれば話は別だが、あいにくそんな方法は思いつかない。

まどかでさえ解くのは無理だったのだから、もう手遅れなのかもしれない。

しかし手遅れと諦めてしまえばそこで僕の魔法少女人生は終わってしまうのだ。

「ごめんね、私たちじゃどうにもできないわ。」

「アタシの幻覚魔法でも症状をやわらげることすらできねえ。まったく情けないよ。」

ちなみに杏子の傷はもう完治してしまったようだ。ある程度治ったところで幻覚魔法を使って無理やり治したらしい。

「私の魔法も効果が無さそうだから、あとはミナト君だけが頼りだよ。」

ほむらは名前が出てこなかったが、それはほむらにこんなことをする力がないからということだ。彼女の魔力はもともと弱い。

「ミナト・・・頑張って。」

結局僕がやるしかない。

というより、僕がやらなければいけないんだ。

「じゃあいきますー！」

僕は杖を一振りして彼女の身体と自分を魔法陣で囲む。

「ユニゾン……。」

その言葉と共に僕の身体は一瞬の魔力光と共に消え去り、僕の意識は「桃」の空間へと潜っていった。

「桃」の中に構築された空間は真っ暗だった。

漆黒の闇。どんなに探しても光なんて見つからない。そんな空間の中で僕自身も闇にまぎれそうになる。

しかしここで紛れてしまえば、それは自分の存在が消えてしまう事を意味する。それだけは回避しなければ……。

それにしても、「桃」の姿が見えないのが気になる。

後から入ってきた「闇」によって空間の様になる事は分かっていたが、そのどこかには必ず「桃」の意識が残っているはずなのだ。しかしこの空間には闇しか見えない。

まさかもうすでに闇に飲まれてしまったなどという事はないだろう。そうだったら「桃」の身体はきつと消えているはずだ。

「桃」いるなら返事を……」

呼びかけてみても応答はない。

どうしたものか。

結局、こんな中でも手当たり次第探すしかないのか……。

だが、本当に手当たり次第探すだけでいいのか？

たぶん、「桃」を見つけただけではこの状況は解決しない。結局この闇を全部追い出さなければいけないのだ。

しかしどうやって……？

僕がこの身体に入った魔法を逆展開すれば出すことはできるかもしれない。しかし、それではきつと「桃」自身は消えてしまう。

それじゃ解決になっていない。

結局「桃」本人がこの空間から出てくるしかないのだ。

「桃」。君はどんな事を願ったんだ？ 魔法少女のくちづけをどんな事に使おうとしたんだ？」

答えは返ってこない。

「もし救われる事を願ったのなら、もう大丈夫だよ。君は救われた。」

今度も答えは返ってこない。
そう思っていた。

「本当に？」

どこからともなく返事が返ってきて、その方向を向くと、ぼんやりだが「桃」の姿が見えた。

「私は最初の時間で救われる事を祈った。だけど私の願いは数え切れないほどの回数くじかれた。その度に絶望して、死の恐怖を味わって、それでも時間は戻されて生かされ続けた。」

きっとそれは普通に死ぬより数倍ひどいのだろう。祈った事を後悔もしただろう。だけど彼女はめげずにここまで来た。与えられた力のできる事をしたのだ。

それはすごいことだ。

だけどそれは僕の勝手な同情でしかない。彼女が体感した時間は想像もつかない。

「その気持は僕には分からない。僕はその繰り返しの中に存在して

いなかったから。」

「そう。私はその繰り返しをした拳句、結局何もできないまま終わるのか。自分の目標を奪われて、それでまた何十年も生きていかなきゃいけないのか。」

目標……それはおそらく最後の魔女を自らの手で倒して、自らの力で繰り返しを脱出することだろう。

だったらそれを奪ったのは僕だ。でも、彼女が何をやっても最後の魔女は倒せなかった。それは本人ももう分かったはずである。

「お前が私の人生を奪ったんだ！ お前がいなければ私は……救われなかった。でも、いっそその方がよかった。」

「救われない方がよかったなんて、そんなのよくない！ そんなの僕が絶対に許さない！ 人はみんな救われるべきなんだ！」

「私の方がいいって言ってるんだから、ほっといてよ！」

ダメだ。そんなんじゃないだめなんだ。

「君がそんな事を言い続けても僕が勝手に救ってやる！」

そう言っただけで彼女の方に手を伸ばすと、それを彼女の心の壁が防ぐ。

「私は救われなくていいよ。もう疲れた。」

「ダメだ！」

何年、何十年、何百年という時を過ごした彼女の心の壁はとてつもなく堅いだろう。

だけど、それを破れないでなんとする！

僕はそれに向かって拳を叩きつけた。もちろんそんなことで砕け

るほど脆いものではない。こっちが砕けてしまいそうなほどにその壁は堅かった。

「ダメだ、僕が君を救う！ 他の人は全部まどかに取られちゃったけど、今度こそ僕が救って見せる！」

そう言いながらもう一度壁を殴る。

「あなたが私の目標を奪ったのに、あなたは私を救うの？」

「そうだ。僕は君の目標を奪った。だから僕には君を救う義務がある。」

壁を殴り続ける。僕の拳はもう力をあまり残してはいない。じんじんといたむ。

「目標なら僕が作ってやる。」

僕が君の生きるための支えになってやる。

「だから生きろ！」

その答えは沈黙だった。

しかし彼女の意識はしだいに色を取り戻し、完全なものになっていった。

やがて彼女はそこから立ち上がり、こちら側に歩いて来た。

「本当に？」

「本当だよ。」

その言葉を言った瞬間に彼女の身体は急に接近してきて、僕の唇を奪った。

「責任……取ってもらおうわ。」

普段の彼女に戻った。

それを知覚すると同時に僕の魔法は解け、強制的に彼女の心の空間から僕の意識は排除されて……。

……そうやって僕たちの契約が成立した。

〈数日後〉

その日は快晴。ただし暑くなく、とても温かく過ごしやすい日だった。

数日の間にまどかは帰ってしまい、ほむらが寂しそうな顔をしていた。

「何を見ているの?」

「いえ、別に。」

ある意味田環の理と直接的なつながりがある僕はまどかのことが見えるのだ。

僕が言おうとするともものすごい力で押さえられてしまうのでほむらに言う事は出来ないが、まどかは本当にいつでもほむらのそばにいた。

今もほむらの身体をふわりと抱いている。

「ところであなた、本当に行ってしまうの？」

「はい、まあおかげさまで桃の身体も治りましたし。」

桃の身体は順調に回復し、もう歩く事が出来るようになっていた。今後の事を悩んでいた僕も桃のおかげで決心がついて、この町ともお別れの時が近づいてきているのだ。

「そう。まあ、別にいいわ。私は最初からそうなるだろうと思っていたもの。」

『ウエヒヒ。ほむらちゃんきついなあ。』

ほむらはその長くて美しい黒髪を後ろに流し、また僕の視線を気にしてちらちらとこちらを見る。

「なんだか大人になったみたいね。あなた、最初はこの動作だけで赤面していたのに。」

「ま、まあ、別に動揺しないわけじゃないですけど。」

でもやっぱり少し耐性が付いたみたいだ。

「この町には戻ってくるの？」

「まあ、いつかは戻ってきますよ。世界中を旅しようと思ってるん

です。僕が救おうとした人たちが実際にはどんな人なのか知りたいので。」

「じゃあ、気が向いたら戻ってきなさい。私たちはいつでも受け入れるわ。」

「ありがとうございます。」

僕は別に気が向かなくても定期的に帰ってくるつもりだが……。

「それじゃあこれで。」

「もう行くのね。まあ、桃を待たせるのはよくないわ。行きなさい。」

「……短い間だったけど、ありがとうございます。」

僕は杖を一振りして目の前に魔法陣を出す。

「またね。」

その声が聞こえた直後に魔法が発動し、僕は桃のいるところへと転送される。

魔法で転送された先では、桃がその手を差し出しながら待っていた。

「長かったわね。」

「そうかな？」

僕は桃の手を取り、再びワープゲートへと姿を消した。

(終わり)

26、たいていの物語は別れて終わる。(後書き)

終わったああああああああああああ！！

これで本編は完結です！

もう自分としては一つの物語を完結させる事ができて満足満足。
ま、見落としてる点はあるかもしれませんがw

このあと魔女の解説と登場人物の紹介を土日の投稿する予定です。
完結設定にするのはそれが終わってからですねw

それでは……

ここまで読んでくれた皆さん今まで本当にありがとうございました
！

XX02、魔女の解説？（前書き）

第4魔女から最後の魔女までの解説。

というか作品を作る際に使ったメモを公式の魔女図鑑っぽくしたやつですねw

XX02、魔女の解説？

・アバター・K・H

鏡の中の魔女。性質は「幻」。

結界は形だけで、実際は結界内に入ってしまった者の心の中にいる。

入られる弱い心を取り去れば、その姿を現しただろう。

・?????

海底の魔女。性質は「執着」。とにかく戦いたい。

魔法少女が止めなければ戦いを求めて人間をどんどん取りこんでしまう。

正々堂々と勝負して負けた時、この魔女は消滅するだろう。

・?????

最後の魔女。性質は「拒絶」「復讐」。

全ての物を拒絶する絶対の壁を持ち、何人たりとも自分に触れさ

せず。

全ての物を破壊するまでその身体はけして断たれる事はない。
倒すにはまず受け入れてもらわなければならぬ。

・最後の魔女の手下

悪魔の様な形をした使い魔。

その身体は微細な粒子の様なもので造られていて、どんな形にも
曲がる。

実際は最後の魔女が自分を攻撃したものに復讐するための器。

こつから先は魔女とは違うのでしゃべり口調でw

・魔獣

アニメの最後に出てきたあいつ。設定は全て個人の想像ですw
普通の人間の負の感情が集まって形成された物。

ごく少量の負のエネルギーでも形成可能であるが、形成時のエネ
ルギーの大きさがそのままその個体の強さとなる。

しかし本編では強くても使い魔と同レベルの設定。

外見や攻撃方法はその個体も同じで、主な攻撃は鎖や触手による

中距離攻撃。

グリーンシールドは8割方の個体を持っている。

XX02、魔女の解説？（後書き）

今日中にと登場人物の紹介をうります。

XX03、登場人物の紹介（前書き）

特にひねりもせず、ミナト、ほむら、杏子、マミ、まどか、「桃」の紹介をします。

XXX03、登場人物の紹介

・ミナト（奥村リツ）

14歳。「斬る」魔法を得意としている男の魔法少女。
と本編では書いたかもしれないが、それはミナトの勘違いである。
本当は「断つ」魔法である。

女性に対して耐性がなく、そういう場面に遭遇するとすぐに赤面してしまう純粋な少年である。

ただし、思春期ともあつて興味がないわけではない。

奥村リツは彼が魔法少女になるときに他人との関係を断たれてしまい、ミナトとは別の人格ということになっている。

・暁美ほむら

「17歳」。現在見滝原高校二年。
中学二年の時から身長が少し伸びた以外は3年前とほとんど変わらない。

世界の改変後、長らくまどかの力を使用してきたが、本編では彼女の最初の力である時間魔法も使える。

3年経っているともあって、性格はだいぶ丸くなっているが、長らく「クール」を演じていたため、変なところでツンとしてしまう。

・佐倉杏子

年齢不明。二トトから一步成長してフリーターになっている。

身長はそれほど伸びていないが、出るところが出てきて少し大人の女性らしくなっている。

改変後、すぐに剣を作る事を学びにいろいろなところを回り、ついでに父親の教えを説いた。

3年間で射撃系の魔法を習得していたりと、いろいろな面で成長している。

・田マ三

18歳。現在見滝原高校三年。

高一辺りで成長が止まってしまい、3年前とほとんど変わりはない。

変わったところは高校に入学した時を境に、縦ロールにしていた髪をやめてしまい、本編ではウェーブのかかった髪にソウルジェムのついた髪飾りを付けている……という設定。

厨二病的な要素はだいぶ抜けているが、「ティロ・フィナーレ」だけは譲れないらしい。

ソウルジェムの秘密については全て知っている。

・鹿目まどか

年齢不明（外見は17歳）。現在円環の理として絶賛活動中。

現れたのは正確には円環の理から分離した魔女で言う使い魔的存在。

最終話でクリームヒルトを倒しに来たのと同じ様に出てきたため、容姿はいわゆるアルティメットまどかのもの。

3年前のように言動の迷いはなく、ハッキリと物を言うようになっている。

基本、魔女と交戦するときのみ現れる。

・「桃」

年齢不明（外見的には中学生かそれ以下）。

身体能力が魔法を使ったほむらと同じくらいか、それ以上あり、

反射神経は常人の何十倍もあるだろう。

その秘密は背中に隠された魔法少女のくちづけから発生した魔法少女の呪いによるもので、クライマックスでは精神とも深くリンクしていた。

最終的な身体能力は魔法少女よりもはるかに高く、魔女よりは劣るものだった。

以上で人物紹介終わり！

もっと詳しく説明してほしいとか、まだ紹介されてない人物で紹介してほしい人物がいたら言ってください。

あと、本編の感想よろしくお願いしますw

XX04、用語の紹介（前書き）

用語と言っても、二次創作なのでそれほど多くないですw

XX04、用語の紹介

・魔術

術式を用いて、より強力な魔法を使えるようになる。

例：アニメ最終話でまどかがワルプルギスに放ったモノ。

・魔剣・聖剣

古代に英雄たちが使っていたもので、英雄のソウルジェムが付いている。

もしくは「魔法少女」が魔法で造ったものが、「魔法少女」自身が剣に変化したもの。

・魔法少女のくちづけ

ミナトの母親の魔法の一つ。

そのものの願いを一つだけ叶える。ほど強い加護を与える事ができる。

「ねくらいでよかったはず……。」

XX04、用語の紹介（後書き）

以上で説明終了です！

そしてこの回で「魔法少女まどかマジカ 勇者の物語」は完結設定にさせていただきます！

今まで本当にありがとうございました！

今後も本編の感想お待ちしておりますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3950v/>

魔法少女まどか マギカ 勇者の物語

2011年11月5日16時03分発行